(四)棠梨葉戰風颼颼。』棠梨葉戰いで風颼颼。
生離別。生離別。生離別、生離別、
憂從中來無斷絶。憂中より來つて斷絶する無し。
憂極心勞血氣衰。憂極り心勞して血氣衰へ、
未年三十生白髮。未だ年三十ならざるに白髮を生ず。

【題義】生別の悲を述べた詩である。

【詩意】檗を食ふのも梅を食ふのも容易でない。なぜといふに檗は苦く梅は酸いから。併し梅や檗の酸苦は、生別の酸苦の心肝に沁みわたるほどひどくはない。二番雞が鳴き殘月が沒すると、馬が別を惜むものの如く連に嘶く。其馬に乘つて旅立ちする。やがて骨肉の親を顧みて哭泣する。その時の酸苦に比すれば梅や檗は蜜のやうに甘いと謂つてよい。黃河の水白く黃雲の棚引く處、行人此景に對して誰か涙なきを得ようぞ。天寒く野廣き處を過ぎ行きて一夜の宿を借りる。簷の棠梨に秋風が戰いで颼颼の音を發する。時しも生別の悲が心の中から湧いて來て、未だ年三十に達せぬ身に先づ白髮を生ぜしめるくらゐだ。

【四】棠梨　木の名。颼颼は風の聲。

浩歌行

天長地久無終畢。天長地久終畢無し、
昨夜今朝又明日。昨夜今朝又明日。
鬢髮蒼浪牙齒疎。鬢髮蒼浪として牙齒疎なり、
不覺身年四十七。覺えず身の年四十七。
前去五十有幾年。前五十を去ること幾年か有る、
把鏡照面心茫然。鏡を把つて面を照らして心茫然たり。
既無長繩繫白日。既に長繩の白日を繫ぐ無く、
又無大藥駐朱顏。又大藥の朱顏を駐むる無し。
朱顏日漸不如故。朱顏日に漸みて故の如くならず。
青史功名在何處。青史功名何の處にか在る。
欲留年少待富貴。年少を留めて富貴を待たんと欲すれば、
富貴不來年少去。富貴は來らず年少は去る。
去復去兮如長河。去つて復去ること長河の如く、

【字解】【一】蒼浪　髮斑白なり。

【二】大藥　不老長生の仙藥。朱顏は紅顏。

【三】青史　歷史。

東流赴海無迴波。
賢愚貴賤同歸盡。
(四)北邙塚墓高嵯峨。
古來如此非獨我。
未死有酒且高歌。
(五)顏回短命伯夷餓。
我今所得亦已多。
功名富貴須待命。
命若不來知奈何。

【題義】浩歌行は樂府の雜曲歌辭で、浩は大の意である。人生の果敢なく功名の立ち難きを述べた詩である。

【詩意】天地は長久で際限がない。昨日から今日、今日から明日とどこまでも續く其間に俺は段段に老いて髮が白くなり齒が疎になり、夢のうちに四十七になつて、もう五十に手が屆くやうになり、顏を鏡に寫して見てがつかりした。かの白日を繩で縛りつけて置くことも出來ず。いつまでも若さを保

東流海に赴いて廻る波なし。
賢愚貴賤同じく歸盡し、
北邙の塚墓高うして嵯峨たり。
古來此の如し獨我のみに非ず、
未だ死せず酒有つて且つ高歌せよ。
顏回は短命にして伯夷は餓ゑたり、
我今得る所亦已に多し。
功名富貴須く命を待つべし、
命若し來らずんば知んぬ奈何せん。

【四】北邙　山の名。洛陽の北に在る墓地。嵯峨は高き貌。

【五】顏回　孔子の弟子、亞聖の稱あり、不幸短命にして死す。

留する仙藥もない。年ばかり取つて史上に傳ふべき功名は成らない。若さを保留して富貴にならうと思ふが、富貴は仲仲に來らず、若さは遠慮なしに去つてしまふ。その去ることは長河の流の一度逝いて復還らないのと同じだ。賢愚貴賤に拘らず、皆落ち行く先は北邙の塵だ。せめて死なないうちに、酒でも飲んで歌ふがよい。顏回は短命で伯夷は餓死した。それから見れば俺などは大に贏けてゐると謂つてよい。功名富貴は運に任せておいて、さて運が來なかつたら其迄の事だ。

王夫子

王夫子。送君爲一尉。
東南三千五百里。
道途雖遠位雖卑。
月俸猶堪活妻子。
男兒口讀古人書。
(三)束帶斂手來從事。
近將狗祿給一家。

王夫子

王夫子、君が一尉と爲るを送る、
東南三千五百里。
道途遠しと雖も位卑しと雖も、
月俸猶妻子を活すに堪へたり。
男兒口に古人の書を讀み、
束帶して手を斂めて來り從事す。
近くは將て祿に狗つて一家に給し、

【字解】【二】束帶　衣冠を整へること。斂手は謹んで敢て恣にせぬこと。
【三】狗祿　俸祿を求める。

遠則行道佐時理。遠くは則ち道を行ひ時を佐けて理む。
行道佐時須待命。道を行ひ時を佐くるは須らく命を待つべし、
委身下位無爲恥。身を下位に委するも恥と爲す無し。
命苟未來且求食。命苟くも未だ來らずんば且く食を求む、
官無卑高及遠邇。官に卑高と遠邇と無し。
男兒上既未能濟天下。男兒上既に未だ天下を濟ふこと能はずんば、
下又不至飢寒死。下又飢寒の死に至らず。
吾觀九品至一品。吾九品より一品に至るを觀るに、
其間氣味都相似。其間氣味都て相似たり。
紫綬朱紱青布衫。紫綬朱紱と青布衫と、
顏色不同而已矣。顏色同じからざる而已矣。
王夫子別有一事欲勸君。王夫子、別に一事の君に勸めんと欲する有り、
逢酒逢春且歡喜。酒に逢ひ春に逢はば且く歡喜せよ。

【題義】王夫子（王は姓）の縣尉となつて赴任するのを送る詩である。

【三】卑高　ひくきと高きと。遠邇は遠近。

【四】九品　九位。

【五】紫綬　紫色の印綬。朱紱は赤色の印綬。青布衫は青色の官服。

【詩意】今王夫子が縣尉となつて東南三千五百里の地に赴くのを送る。たとひ道は遠く位は卑くとも其月俸は妻子を養ふには足りる。苟くも男子たる者が學問をして、衣冠を整へ行跡を愼み、一縣の從事（屬僚といふが如し）となるからには、近くは祿を求めて一家に給し、遠くは己の道を行ひ時を佐けて天下を治めるといふ覺悟がなければならない。所で道を行ひ時を佐けるには運命を待つ必要がある。故に一時下位に居るとも決して恥づべきではないのである。先づ運命の向いて來る間暫く所謂祿仕するのである。それには官の高い卑いや道の遠近などは問ふ所ではない。男子たる者が未だ運が到來しない爲に天下を濟ふことが出來ないからには、飢ゑて死んでしまつてはならない。吾九品の卑官より一品の高官に至るまでの樣子を觀るに、その宦情は皆同じである。紫綬であらうが朱紱であらうが青布衫であらうが、ただ外見が違ふだけである。ただ君に一つ勸めることがある。そは餘の儀ではない。酒に逢ひ春に逢つたら何事を措いても先づ歡を盡すがよいといふことだ。

江南遇天寶樂叟

江南にて天寶の樂叟に遇ふ

白頭老叟泣且言。白頭の老叟泣いて且つ言ふ。
祿山未亂入梨園。祿山未だ亂れざるとき梨園に入り、
能彈琵琶和法曲。能く琵琶を彈じて法曲に和し、

【字解】【一】天寶　玄宗皇帝の年號。樂叟は老晉樂家。
【二】祿山　安祿山、天寶十四年叛し、遂に洛陽・長安を陷れ、玄宗蜀に蒙塵す。

多在華清(五)隨至尊。
是時天下太平久。
年年十月坐朝元(六)。
千官起居環珮(七)合。
萬國會(八)同車馬奔。
金鈿照耀石甕寺(九)。
蘭麝(一〇)熏煮溫湯源。
貴妃(一一)宛轉侍君側。
體弱不勝珠翠(一二)繁。
冬雪飄颻錦袍暖。
春風蕩漾霓裳(一三)翻。
歡娛未足燕寇(一四)至。
弓勁馬肥胡語(一五)喧。
豳(一六)土人遷避夷狄。
鼎湖龍去哭軒轅(一七)。
從此漂淪(一八)落南土。
萬人死盡一身存。
秋風江上浪無限。
暮雨舟中酒一樽。
涸魚久失風波勢。
枯草曾沾雨露恩。
我自秦來君莫問。
驪山渭水如荒村。
新豐(一九)樹老籠明月。
長生殿(二〇)閣鎖春雲。
紅葉紛紛蓋欹(二一)瓦。
綠苔重重封壞垣。
唯有中(二二)官作宮使。

多く華清に在つて至尊に隨ふ。
是時天下太平なること久しく、
年年十月朝元に坐す。
千官起居して環珮合し、
萬國會同して車馬奔る。
金鈿照耀す石甕寺、
蘭麝熏煮す溫湯源。
貴妃宛轉として君側に侍し、
體弱うして珠翠の繁きに勝へず。
冬雪飄颻として錦袍暖に、
春風蕩漾して霓裳翻る。
歡娛未だ足らざるに燕寇至り、
弓勁く馬肥えて胡語喧し。
豳土人遷つて夷狄を避く、
鼎湖龍去つて軒轅を哭す。
此より漂淪して南土に落ち、
萬人死し盡して一身存す。
秋風江上浪限り無し、
暮雨舟中酒一樽。
涸魚久しく風波の勢を失し、
枯草曾て雨露の恩に沾ふ。
我秦より來る君問ふこと莫れ。
驪山渭水荒村の如し。
新豐樹老いて明月を籠め、
長生殿閣うして春雲に鎖さる。
紅葉紛紛として欹瓦を蓋ひ、
綠苔重重として壞垣を封ず。
唯中官の宮使と作る有り、

【三】梨園　宮中の音樂教習所。
【四】法曲　道觀にて奏する所の曲。その樂器に鐃鈸・鐘・磬・琵琶等あり。玄宗甚だ此曲を愛す。
【五】華清　宮殿の名。驪山の上に在り。毎年冬十月玄宗行幸す。至尊は天子。
【六】朝元　驪山に在る閣の名。降聖閣ともいふ。老子を此に祀る。
【七】環珮　腰に佩ぶる飾の玉。
【八】會同　會合する。
【九】石甕寺　驪山に在る寺の名。
【一〇】蘭麝　香の名。
【一一】貴妃　楊貴妃なり。宛轉は眉目の美しきこと。
【一二】珠翠　身の粧飾物。
【一三】霓裳　舞曲の名。
【一四】燕寇　安祿山の叛軍、范陽より起る。范陽は古の燕の地なり。故にかくいふ。

【一五】胡語　えびすのことば。安祿山はもと胡人なり。
【一六】豳土　周の先祖なる古公亶父の時、獯鬻之を攻む。古公之を避けて岐山の下に遷る。豳人曰く、仁人なり、失ふべからずと。老を扶け幼を携へて古公に從つて遷る。
【一七】鼎湖　黃帝龍に騎り天に上る小臣上るを得ず。悉く龍髯を持す。髯拔く。弓を墮す。其弓を抱いて泣く。後世其處を名けて鼎湖といふ。軒轅は黃帝。
【一八】漂淪　流浪する。
【一九】新豐　縣の名。驪山の近くに在り。
【二〇】長生殿　驪山に在る殿の名。
【二一】欹瓦　傾く瓦。
【二二】中官　宮中の官吏。

毎年寒食一開門。

毎年寒食一たび門を開く。

【題義】江南で天寶時代に玄宗に事へた老音樂家に遇ひ、其言を敍した詩である。前半は太平時代の盛事、後半は亂後の景象である。

【詩意】白髮の老音樂家が泣いて言ふ。私は安祿山の亂の起らぬ前に梨園に入り、琵琶が上手なので法曲に和することを務めとし、屢〻陛下の御伴をして華淸宮にも往つた。その頃は太平日久しく、毎年十月には朝元閣に御臨幸になり、文武百官が環珮を鳴らして扈從し、萬國の使臣も車馬を奔らして盛儀に列し、金色燦爛としてまばゆく、香氣發散して四邊に薫じた。楊貴妃は宛轉として君側に侍し、珠翠の重さにも勝へない風情であつた。冬雪飄れども寒からず、春風舞衣を翻すといふ有樣であつた。その娛の未だ終らざるに忽ち亂軍が押し寄せて來て、胡人が都大路を踏み荒したので、天子は蜀へ蒙塵せられ、都人は東西に逃げ惑つた。その騷に私も逃げ出して今は江南に流浪し、多くの人は死んだが私だけは惜しからぬ命を長らへ、秋風江上の愁を一樽の酒に慰めてゐる。これでも昔は花咲く春にも遇ひ雨露の惠にも浴したのである。私は長安から來た者ぢやが、どうか長安の樣子は尋ねて下さるな。今では驪山・渭水のあたりは荒野原となり、新豐あたりの樹には淋しく寒月が懸り、長生殿は春雲に鎖され、紅葉が紛紛と散つて傾く瓦を蓋ひ、綠苔は壞れた垣を埋め、ただ寒食の時に宮使が來て一年一回門を開くといふ打つて變つた荒廢で、言ふに忍びない有樣であるから。

【三】寒食　冬至より百五日目をいふ。

前半は太平時代の

送張山人歸嵩陽[一]

張山人の嵩陽に歸るを送る

黃昏慘慘天微雪。
修行坊西鼓聲絕。
張生馬瘦衣且單。
夜扣柴門與我別。
媿君冒寒來別我。
爲君沽酒張燈火。
酒酣火煖與君言。
何事出關又入關。
答云前年偶下山。
四十餘月客長安。
長安古來名利地。
空手無金行路難。
朝遊九城陌。

黃昏慘慘天微雪す、
修行坊西鼓聲絕ゆ。
張生馬痩せて衣且單なり、
夜柴門を扣いて我と別る。
媿づ君が寒を冒し來りて我に別るるを、
君が爲に酒を沽うて燈火を張る。
酒酣に日煖にして君と言ふ、
何事ぞ關を出でて又關に入る。
答へて云ふ前年偶〻山を下る、
四十餘月長安に客たり。
長安は古來名利の地、
空手にして金無ければ行路難し。
朝に九城の陌に遊べば、

【一】嵩陽　縣名、今の河南省登封縣。
【二】慘慘　いたむ貌。
【三】修行坊　長安の街の名。
【四】柴門　木の小枝を集めて作つた門。樂天が己の家を指して言ふ。
【五】出レ關　關は函谷關。
【六】九城陌　市街の中。

肥馬輕車欺(七)殺客。
暮宿(八)五侯門。
殘茶冷酒愁殺人。
春明門外城高處。
直下便是嵩山路。
幸有雲泉容此身。
明日辭君且歸去。

肥馬輕車客を欺殺す。
暮に五侯の門に宿すれば、
殘茶冷酒人を愁殺す。
春明門外、城高き處、
直下便ち是れ嵩山の路。
幸に雲泉の此身を容るる有り、
明日君を辭して且歸り去らん。

【題義】張山人が嵩山に歸隱するを送る詩である。

【詩意】夕方悲しげな空合になつて雪がちらちら降つて來た。修行坊の西には閉門を告げる鼓の音も鳴りやんだ。張君は瘦馬に乘りぶるぶるした裝をして、私の家に暇乞にやつて來た。私は寒さを冒して來てくれた好意を辱く思ひ、酒の用意をなし燈火を張り張君をもてなした。酒酣に火も暖くなつた處で張君に聞いて見た。一體君は一旦函谷關を出て長安に來り、又間もなく關に入りて嵩陽に歸るのは何故であるかと。すると張君の答はかうだ。先年ふと嵩山を下つて四十餘個月の間長安に暮したが、長安は名利の競爭場裏で、無一物では暮らせない。市街の中に遊べば、肥馬輕車を驅る勢力家が豪奢を極めて我我風情を踏附けにし、貴族の家に厄介になれば、殘物の冷酒などをあてがはれて氣を腐らせる。もう長安は懲り懲りだ。春明門外の高城の下は卽ち嵩山に通ずる路である。嵩山の雲や泉は我を歡迎してくれるから、明日は君に暇を告げて歸らうと思ふのである。

【七】欺殺　あなどる。馬鹿にする。殺は助辭。
【八】五侯門　貴族の家。漢の元帝の舅王譚・王逢時・王根・王立・王商、兄弟五人、同日に侯に封ぜらる。世之を五侯といふ。
【九】春明門　長安城の東西に三門あり。中なるを春明といふ。

醉後走筆酬劉五主簿長句之贈。兼簡張大・賈二十四先輩昆季

醉後筆を走らして劉五主簿が長句の贈に酬い、兼ねて張大・賈二十四先輩昆季に簡す

劉兄文高行孤立。
十五年前名翕習。
是時相遇在符離。
我年二十君三十。
得意忘年心迹親。
寓居同縣日知聞。
衡門寂寞朝尋我。
古寺蕭條暮訪君。

劉兄文高うして行孤立す、
十五年前名翕習。
是時相遇うて符離に在り、
我年二十君は三十。
意を得年を忘れて心迹親む、
同縣に寓居して日に知聞す。
衡門寂寞として朝に我を尋ね、
古寺蕭條として暮に君を訪ふ。

【字解】【一】翕習　盛なる貌。
【二】符離　縣名。今の安徽省宿縣治。
【三】心迹　心事といふが如し。
【四】衡門　かぶき門。木を横へて門となすなり。樂天が己の家を指して言ふ。
【五】蕭條　淋しき貌。

朝來暮去多攜手。
窮巷貧居何所有。
秋燈夜寫聯句詩。
春雪朝傾煖寒酒。
陣湖綠愛白鷗飛。
灑水清憐紅鯉肥。
偶語閒攀芳樹立。
相扶醉蹋落花歸。
張賈弟兄同里巷。
乘閒數數來相訪。
雨天連宿草堂中。
月夜徐行石橋上。
我年漸長忽自驚。
鏡中冉冉髭鬚生。

朝來暮去多くは手を攜ふ、
窮巷貧居何の有る所ぞ。
秋燈夜寫す聯句の詩、
春雪朝に傾く煖寒の酒。
陣湖綠にして白鷗の飛ぶを愛し、
灑水清うして紅鯉の肥ゆるを憐む。
偶語して閒に芳樹を攀ぢて立ち、
相扶けて醉うて落花を蹋んで歸る。
張賈弟兄里巷を同じうし、
閒に乘じて數數來りて相訪ふ。
雨天連りに宿す草堂の中、
月夜徐に行く石橋の上。
我年漸く長じて忽ち自ら驚く、
鏡中冉冉として髭鬚生ず。

【一】冉冉　漸く老ゆる貌。
【八】聯句　數人相集り一人一句づつ作りしものをまとめて一篇とした詩。
【七】煖寒　寒さをあたためる。
【八】陣湖　湖の名。
【九】灑水　川の名。祭符離六兄文に灑水南岸、符離東偏とある。
【一〇】偶語　相對して語る。

心畏後時同勵志。
身牽前事各求名。
問我栖栖何所適。
鄉人薦爲鹿鳴客。
二千里別謝交游。
三十韻詩慰行役。
出門可憐唯一身。
弊裘瘦馬入咸秦。
鼕鼕街鼓紅塵闇。
晚到長安無主人。
二賈二張與余弟。
驅車邐迤來相繼。
操詞握賦爲干戈。
鋒銳森然勝氣多。

心時に後れんことを畏れて同じく志を勵まし、
身前事に牽かれて各〻名を求む。
我に問ふ栖栖として何くに適く所ぞ、
鄉人薦めて鹿鳴の客と爲す。
二千里の別交游に謝し、
三十韻の詩行役を慰す。
門を出でて憐むべし唯一身、
弊裘瘦馬咸秦に入る。
鼕鼕たる街鼓紅塵闇く、
晚に長安に到れば主人無し。
二賈二張と余が弟と、
車を驅り邐迤として來り相繼ぐ。
詞を操り賦を握つて干戈と爲す。
鋒銳森然として勝氣多し。

【一三】栖栖　せわしき貌。
【一三】鹿鳴客　地方から推薦せられて都に往き官吏登庸試驗に應ずる者卽ち鄉貢進士なり。其送別の宴に鹿鳴の詩を歌ふ故なり。
【一四】行役　旅行なり。
【一五】咸秦　咸は咸陽、秦の都なり。長安をいふ。
【一六】鼕鼕　鼓の音。
【一七】主人　寄寓する處。
【一八】邐迤　つづく貌。

齊入(一九)文場同苦戰。
五人十(二〇)載九登科。
二張得(二一)雋名居甲。
美退爭雄重告(二二)捷。
棠棣輝榮竝(二三)桂枝。
芝(二四)蘭芬馥和荆葉。
唯有沅犀屈未伸。
握中自謂駭(二五)雞珍。
三年不鳴鳴必大。
豈獨駭雞當駭人。
元(二六)和運啓千年聖。
同遇明時余最幸。
始辭祕(二七)閣吏王畿。
遽列諫(二八)垣升禁闈。

齊しく文場に入つて同じく苦戰し、
五人十載九たび登科す。
二張雋を得て名甲に居り、
美退雄を爭うて重ねて捷を告ぐ。
棠棣輝榮して桂枝に竝び、
芝蘭芬馥して荆葉に和す。
唯沅犀の屈して未だ伸びざる有り、
握中自ら駭雞の珍と謂ふ。
三年鳴かず鳴けば必ず大なり、
豈に獨雞を駭かすのみならんや當に人を駭かすべし。
元和の運は啓く千年の聖、
同じく明時に遇うて余最も幸せらる。
始め祕閣を辭して王畿に吏たり、
遽に諫垣に列づて禁闈に升る。

【二九】文場　試驗場。
【二〇】十載　十年。登科は及第する。
【二一】雋　肥肉。
【二二】告ル捷　及第なり。
【二三】棠棣　灌木の名。
【二四】芝蘭　香草。
【二五】駭雞　犀角の名。通天犀角の一赤理あるもの、角を以て米を盛り群雞中に置けば、雞驚き且つ退く。故に通天犀を駭雞犀といふ。
【二六】元和　憲宗の年號。
【二七】祕閣　祕書省。王畿は盩厔縣を指す。
【二八】諫垣　諫官なり。禁闈は禁裡。

(二九)蹇步何堪鳴珮玉。
衰容不稱著朝衣。
(三〇)閶闔晨開朝百辟。
(三一)冕旒不動香煙碧。
步登(三二)龍尾上虛空。
立去天顏無咫尺。
宮花似雪從乘輿。
(三三)禁月如霜坐直廬。
身賤每驚隨內宴。
才微常愧草(三四)天書。
晚松寒竹新昌第。
職居密近門多閉。
日暮銀(三五)臺下直回。
故(三六)人到門門暫開。

蹇步何ぞ珮玉を鳴らすに堪へん、
衰容朝衣を著くるに稱はず。
閶闔晨に開いて百辟を朝す、
冕旒動かず香煙碧なり。
步して龍尾に登つて虛空に上る、
立つて天顏を去ること咫尺無し。
宮花雪に似て乘輿に從ひ、
禁月霜の如くにして直廬に坐す。
身賤しうして每に驚く內宴に隨ふを、
才微にして常に愧づ天書を草するを。
晚松寒竹新昌の第、
職密近に居りて門多くは閉づ。
日暮れて銀臺直より下つて回る、
故人門に到つて門暫く開く。

【二九】蹇步　跛行なり。珮玉は腰に佩ぶる玉。
【三〇】閶闔　宮城の門。百辟は百官。
【三一】冕旒　天子の冠。
【三二】龍尾　宮殿の前の道。
【三三】禁月　禁裡の月。直廬は宿直處。
【三四】天書　勅書。
【三五】新昌　長安の里の名。
【三六】銀臺　翰林學士院の在る處。
【三七】故人　舊友。

回頭下馬一相顧。
塵土滿衣何處來。
斂手炎涼敍未畢。
先說舊山今悔出。
岐陽旅宦少歡娛。
江左羈遊費時日。
贈我一篇行路吟。
吟之句句披沙金。
歲月徒催白髮貌。
泥塗不屈青雲心。
誰會茫茫天地意。
短才獲用長才棄。
我隨鵷鷺入煙雲。
謬上丹墀爲近臣。

頭を回らし馬を下りて一たび相顧みれば、
塵土衣に滿ちて何の處よりか來る。
手を斂めて炎涼敍べて未だ畢らず、
先づ舊山を說き今出でしを悔ゆ。
岐陽の旅宦歡娛少く、
江左の羈遊時日を費す。
我に一篇の行路吟を贈る、
之を吟ずれば句句沙金を披く。
歲月徒に催す白髮の貌、
泥塗屈せず青雲の心。
誰か會せん茫茫たる天地の意を、
短才は用ひらるるを獲長才は棄てらる。
我は鵷鷺に隨つて煙雲に入り、
謬つて丹墀に上つて近臣と爲る。

【三八】岐陽　地名。岐山の南。今陝西省岐山縣。
【三九】江左　江東なり。羈遊は旅行。
【四〇】鵷鷺　官列に喩ふ。
【四一】丹墀　禁裡をいふ。

君同鸞鳳棲荊棘。
猶著青袍作選人。
惆悵知賢不能薦。
徒爲出入蓬萊殿。
月慙諫紙二百張。
歲愧俸錢三十萬。
大底浮榮何足道。
幾度相逢卽身老。
且傾斗酒慰羈愁。
重話符離問舊遊。
北巷鄰居幾家去。
東林舊院何人住。
武里村花落復開。
流溝山色應如故。

君は鸞鳳の荊棘に棲むに同じく、
猶青袍を著て選人と作る。
惆悵す賢を知つて薦むる能はざるを、
徒に出入を爲す蓬萊の殿。
月、慙づ諫紙二百張、
歲、愧づ俸錢三十萬。
大底浮榮何ぞ道ふに足らん、
幾度か相逢うて卽ち身老ゆ。
且く斗酒を傾けて羈愁を慰す、
重ねて符離を話して舊遊を問ふ。
北巷の鄰居幾家か去る、
東林の舊院何人か住する。
武里の村花落ちて復開き、
流溝の山色應に故の如くなるべし。

【四二】選人　選用を求むる人。
【四三】蓬萊　宮殿の名。大明宮ともいふ。
【四四】二百張　二百枚。
【四五】大底　大抵に同じ。
【四六】羈愁　旅愁。
【四七】武里　村の名。
【四八】流溝　山の名。

感」此酬」君千字詩。此を感じて君に酬ゆ千字の詩、
醉中分」手又何之。醉中手を分ちて又何くにか之く。
須」知通塞尋常事。須く知るべし通塞尋常の事、
莫」歎浮沈先後時。歎くこと莫れ浮沈先後の時。
慷慨臨」岐重相勉。慷慨岐に臨んで重ねて相勉む、
殷勤別後加」餐飯。殷勤に別後餐飯を加へよ。
君不」見買臣衣」錦還」故鄉。君見ずや買臣錦を衣て故鄉に還るを、
五十身榮未」爲」晚。五十にして身榮ゆるも未だ晚しと爲さず。

【題義】醉後筆を走らせて劉五主簿（五は排行、主簿は官名。）が長句（長篇の詩）を寄せられたるに酬い、兼ねて張大・賈二十四兩先輩の兄弟に贈るといふのである。昆季は兄弟をいふ。

【詩意】劉君は文章も達者で行も拔羣であつて、今より十五年前既に名を著した。私が符離縣で君に遇つた時は、私は二十で劉君は三十であつた。其後は年を忘れて親しく交り、同縣に寓居して互に能く知り合つた。君が寂寞たる我が衡門を訪へば、我は蕭條たる古寺に君を尋ね、朝な夕なに手を攜へて遊び、秋は燈を挑げて聯句をなし、春は酒を傾けて煖を取り、陣湖の白鷗を愛し、灑水の紅鯉を憐み、芳樹に攀ぢ落花を蹋みなどして歡を俱にした。時に張君・賈君兄弟も亦里巷を同うする所から屢

【四九】通塞　窮達といふが如し。
【五〇】殷勤　ねんごろに。
【五一】買臣　漢の朱買臣。

我を來訪し、雨が降れば遂に我が草堂に逗留し、月の夜には俱に石橋の上に散歩などをした。その中に余も段段年を取り鏡を見ると髭なども生えて來た。いつまでかうしても居られまいと互に志を勵まし、各〻將來の功名を期した。かくて余は鄉貢進士となつて都に上ることになり、交友と別れて千里外の旅路に上り、三十韻の詩を作つて自ら旅愁を慰めた。弊裘を著、瘦馬に跨つて長安にはひつた。併し賴るべき知合もなく殆ど途方に暮れた。そのうちに張君・賈君兄弟と我が弟とが續いてやつて來て、詩賦を以て武器となし、試驗場に上つて同じく苦戰したが、十年間に五人が九回及第し、張君兄弟は特に拔羣で甲科に登り、美退（知退の誤か。知退は樂天の弟、白行簡の字である）も雄を爭つて重ねて及第の榮譽を取り、それぞれ得意滿面であつたが、唯獨り沅犀だけは未だ及第が出來なかつた。併し其心中には自ら以て駭雞の珍と爲し、三年鳴かず鳴かば必ず人を駭かすであらうと自任してゐた。元和に至り千載に稀なる聖君（憲宗を指す）が現れた。張・賈兄弟と同じく昭代に遇つたが、中にも余は最も寵幸を辱うし、祕書省校書郎となり、後之を辭して盩厔縣尉となり、遽に左拾遺（諫官なり）となつて禁中に入り、跛行にして佩玉を鳴らし、衰容を以て朝衣を著ることになつた。かくて天顏に咫尺し乘輿に從ひ、內宴に陪し天書を草した。時に余は新昌里に住んでゐたが、職が職だから門を閉ぢて妄に人と交らなかつた。併し舊友（劉五主簿を指す）が尋ねて來たといふので暫く門を開いた。やがて君は馬から下りて互に顏を見た。見ると君は大分塵にまみれてゐる。まだ寒暖の挨拶も終らないのに、君は先づ故鄉の山を說き、故鄉を出たのを今は後悔してゐるらしく、岐陽に官

吏となつてゐても面白い事もないので、江東に遊んで日を送らうとの考で、私に一篇の行路吟の詩を贈つた。讀んで見ると實に立派な出來である。一歳月は漸く白髮を催して來たが、世塵が未だ全く青雲の志を屈しはしない。我の如き短才が用ひられて君の如き長才が用ひられない。天地の心は茫然として知るに苦む所である。我は官列に加はりて宮中に入り誤つて天子の近臣となつてゐるのに、君は鸞鳳の荆棘に棲むと同じく、今猶青袍を著て選用を待つてゐる。我は君の賢才を知りながら推薦する能はず、徒に蓬萊宮中に出入し、月に諫奏文二百枚を草し、俸錢三十萬を戴いてゐるのを自ら愧ぢる。併しかかる浮榮は何も言ふに足る値はない。逢ふたびに身の老い行くのは悲みに堪へないから、まア斗酒を傾けて旅愁を慰め、符離縣の昔話でもしよう。北巷の近所の家は大分他に移轉したであらう。東林の舊院には今誰が住んでゐるか。武里の花も幾度か開落したであらう。流溝山の景色は今も昔の通りであらう。こんなことが心中に深く感ぜられたので此詩を作つて君に酬いる。これから君は何處へ往くか知らぬが、窮達は世間普通の事で深く意とするには足らない。浮沈先後も今更嘆息するには及ばない。ただ別れた後は身體を大切にするがよい。年取つてから錦を衣て故郷に歸つた朱買臣のやうな人もあるから、五十になつてから榮達しても決して晩くはないから、あせらない方がよい。

感傷　和錢員外答盧員外早春獨遊曲江見寄長句

和錢員外答盧員外早春獨遊曲江見寄長句

錢員外に和し、盧員外が早春獨り曲江に遊び長句を寄せられしに答ふ

春來有色闇融融。
先到詩情酒思中。
柳岸霏微褒塵雨。
杏園淡蕩開花風。
聞君獨遊心鬱鬱。
薄晚新晴騎馬出。
醉思詩侶有同年。
春歎翰林無暇日。
雲夫首倡寒玉音。
蔚章繼和春搜吟。
此時我亦閉門坐。
一日風光三處心。

雲夫・蔚章、同年及第。時予與蔚章、同在翰林。

春來り色有り闇うして融融、
先づ到る詩情酒思の中。
柳岸霏微たり褒塵の雨、
杏園淡蕩たり開花の風。
聞く君が獨遊んで心鬱鬱たるを、
薄晚の新晴馬に騎つて出づ。
醉うては思ふ詩侶同年有るを、
春は歎く翰林に暇日無きを。
雲夫首に倡ふ寒玉の音、
蔚章繼いで和す春搜の吟。
此時我亦門を閉ぢて坐す、
一日風光三處の心。

【字解】【一】融融　のどかな貌。
【二】霏微　雨の細かに降る貌。褒塵は塵をうるほす。
【三】淡蕩　あはき貌。
【四】詩侶　詩を作る仲間。同年は同じ年に及第した人。
【五】翰林　官名。翰林學士。
【六】寒玉音　美しき詩。
【七】春搜　春色を探る。

【題義】盧員外が早春獨り曲江（長安に在る遊園地）に遊び長篇の詩を作つて樂天に寄せ示したので、樂天が此詩を作つて其れに答へ、又錢員外が盧員外の原作に和したのを、樂天が更に和して此詩を作つたのである。

【詩意】春色が何處からともなく漂つて來て先づ詩情酒思の中に現れる。柳岸に細雨のしとしと降りそそぐ處、杏園に東風のそよそよと吹く時、そこに春が潜んでゐるのである。（盧員外）聞けば君は夕方新晴に乘じ馬に乘つて春色を曲江に探り、醉うて同年の詩友（錢員外）を思うたが、翰林學士は忙しくて俱に遊ぶ暇がない。そこで雲夫（盧員外）が先づ立派な詩を作つて錢員外に寄せたので、蔚章（錢員外）が春を探る詩に和する詩を作つた。此時余は家に閑居してゐた。一日の風光をば三人三樣の心で賞翫したわけだ。

東墟晚歇　時退居渭村

涼風冷露蕭索天。
黄蒿紫菊荒涼田。
遶塚秋花少顏色。
細蟲小蝶飛翻翻。

涼風冷露蕭索たる天、
黄蒿紫菊荒涼たる田。
塚を遶る秋花顏色少く、
細蟲小蝶飛んで翻翻たり。

時に渭村に退居す

【字解】【一】蕭索　物淋しきこと。
【二】黄蒿　黄色なよもぎ。荒涼は荒れはててゐること。

中有騰騰獨行者。
手拄漁竿不騎馬。
晚從南澗釣魚回。
歇此墟中白楊下。
褐衣半故白髮新。
人逢知我是何人。
誰言渭浦棲遲客。
曾作甘泉侍從臣。

中に騰騰として獨行く者有り、
手に漁竿を拄へて馬に騎らず。
晚に南澗より魚を釣つて回る、
此墟中白楊の下に歇めり。
褐衣半故りて白髮新なり、
人逢ふも知んぬ我是れ何人なるを。
誰か言ふ渭浦棲遲の客、
曾て甘泉侍從の臣と作る。

【題義】東墟とは東の方にある昔の墓地であらう。その下で夕方休息したといふのである。

【詩意】涼風が吹き冷露が降り、あたりには枯蓬や野菊が荒れてゐる秋の夕方、古塚を遶る秋草の花も色褪せ、小さい蝶が淋しく飛びかうてゐる。そこを急いで通る一人の男がある。手には釣竿を持ち馬にも乘らない。南澗に釣りに行き今歸る途中、この古墓の白楊の下に休息した。著物も大分古びて白毛頭である。人が逢つても此男は誰であるかわかるであらうか。今は渭村に隱遁してゐるが以前は天子の侍從であつた白居易であるとは恐らく誰も氣がつくまい。

【三】白楊　木の名。多く墓に植う。
【四】渭浦　渭水のほとり。棲遲は隱遁してゐること。
【五】甘泉　宮殿の名。

客中月

客中の月

客從江南來。來時月上弦。
客江南より來る、來る時月上弦。

悠悠行旅中。三見清光圓。
悠悠たる行旅の中、三たび清光の圓なるを見る。

曉隨殘月行。夕與新月宿。
曉に殘月に隨つて行き、夕に新月と宿す。

誰謂月無情。千里遠相逐。
誰か謂ふ月に情無しと、千里遠く相逐ふ。

朝發渭水橋。暮入長安陌。
朝には渭水の橋を發し、暮には長安の陌に入る。

不知今夜月。又作誰家客。
知らず今夜の月、又誰が家の客と作る。

【字解】【一】上弦　陰曆七八日頃の弓張月。【二】悠悠　遙なる貌。

【題義】旅中の月の情味を述べた詩である。

【詩意】自分は嘗て江南から月の上弦の頃に旅立つて來たが、長き旅路の中に三たび滿月に遇つた。朝は宿を出て殘月に伴つて行き、夕には新月の出る頃宿に著いた。月は至つて情の深いもので、千里の間どこまでも自分について來た。今朝自分は渭水の橋を發して今夜長安の都に著いたが、今夜、月はどこに宿るであらうか。

挽歌詞

丹旐何飛揚。素驂亦悲鳴。
丹旐何ぞ飛揚する、素驂亦悲鳴す。

晨光照閭巷。輀車儼欲行。
晨光閭巷を照し、輀車儼に行かんと欲す。

蕭條九月天。哀挽出重城。
蕭條たり九月の天、哀挽して重城を出づ。

借問送者誰。妻子與弟兄。
借問す送る者は誰ぞ、妻子と弟兄と。

蒼蒼上古原。峨峨開新塋。
蒼蒼として古原に上り、峨峨として新塋を開く。

含酸一慟哭。異口同哀聲。
酸を含み一たび慟哭し、異口同じく哀聲す。

舊壠轉蕪絕。新墳日羅別。
舊壠轉た蕪絕し、新墳日に羅列す。

春風秋草北邙山。
春風秋草北邙の山。

此地年年生死別。
此地年年生死別る。

【字解】【一】丹旐　喪家用ふる所の銘旌。【二】素驂　白馬。喪の時に用ふ。【三】輀車　喪の車。【四】蕭條　淋しき貌。【五】哀挽　かなしき挽歌をうたつて喪車をひく。【六】借問　かりに問ふ。【七】蒼蒼　草の青き貌。【八】峨峨　高き貌。新塋は新しき墓。【九】含酸　悲を含む。【一〇】舊壠　古塚。【一一】新墳　新しい塚。【一二】北邙山　洛陽の北に在る山。山上に墓多し。

【題義】挽歌とは柩を牽く時に歌ふ歌で死者を悼むものである。

【詩意】喪の旌が風に飜り白馬が悲み嘶き、旭が町を照すとき、柩を載せた車を儼に牽き、淋しき

秋九月に挽歌を奏しつつ洛陽城を出る。妻子兄弟が之を送り、蒼蒼たる古原を上つて其處に新しき墓を築き、更に悲を含んで異口同音に泣く。あたりには舊塚が段段荒れ頽れ、新しい塚が立ち列ぶ。あ春となく秋となく、此北邙山では死者と生者との別が、年年幾度あるか數を知らないほどある。

長相思

九月西風興。月冷露華凝。
思レ君秋夜長。一夜魂九(一)升。
二月東風來。草拆花心開。
思レ君春日遲。一日腸九廻。
妾住二洛橋北一。君住二洛橋南一。
十五卽相識。今年二十三。
有レ如二女蘿草一。生在二松之側一。
蔓短枝苦高。縈廻上不レ得。
人言人有レ願。願至天必成。

長相思

九月西風興り、月冷にして露華凝る。
君を思うて秋夜長し、一夜魂九升す。
二月東風來り、草拆けて花心開く。
君を思うて春日遲し、一日腸九廻す。
妾は洛橋の北に住し、君は洛橋の南に住す。
十五にして卽ち相識り、今年二十三。
女蘿草の、生じて松の側に在るが如くなるあり。
蔓短うして枝苦だ高し、縈廻すれども上り得ず。
人は言ふ人に願有り、願至れば天必ず成すと。

願作二遠(四)方獸一。步步比レ肩行。願はくは遠方の獸と作り、步步肩を比べて行かん。
願作二深山木一。枝枝連(五)レ理生。願はくは深山の木と作り、枝枝理を連ねて生ぜん。

【字解】【一】九升　九たびのぼる。【二】洛橋　洛陽の橋の名。【三】女蘿草　蔓草の名。女は男にたよりて立つものなる故、自ら此草に喩ふ。【四】遠方獸　比肩獸、一名蠻鼠。二獸相需めて以て生存す。【五】連レ理　一樹の枝が他の樹の枝と相連ること。

【題義】女が男を思ふことを述べた詩である。

【詩意】九月秋風が吹き白露の結ぶ頃になれば、君を思うて夜の長きを感じ、一夜に魂が九たびも飛ぶ。二月春風が吹き花の開く時節になれば、君を思うて日の暮れ難きに苦み、一日に腸が九たびも廻轉する。妾は洛橋の北に住み、君は洛橋の南に住み、十五の時から見識り合つて今は既に二十三になる。妾が身を喩ふれば女蘿が松の側に生じ、いくら這ひ上らうとしても枝が高くて上れないのに似てゐる。人の言ふ所に據れば願が至極に達すれば、天は必ず叶へてくれるものだといふが、願はくは比肩獸となつて二人肩を比べて歩きたいものだ。又深山の奥の木となつて枝と枝とを連ねたいものだ。

山鷓鴣

山鷓鴣。山鷓鴣、
朝朝暮暮啼復啼。朝朝暮暮啼いて復啼く。

啼時露白風凄凄。
黄茅崗頭秋日晩。
苦竹嶺下寒月低。
畠田有レ粟何不レ啄。
石楠有レ枝何不レ棲。
迢迢不レ緩復不レ急。
樓上舟中聲闇入。
夢レ郷遷客展轉臥。
抱レ兒寡婦彷徨立。
山鷓鴣。爾本此郷鳥。
生不レ辭レ巣不レ別レ羣。
何苦聲聲啼到レ曉。
啼到レ曉。唯能愁二北人一。
南人慣レ聞如レ不レ聞。

啼く時露白く風凄凄たり。
黄茅崗頭秋日晩れ、
苦竹嶺下寒月低る。
畠田に粟有り何ぞ啄まざる、
石楠枝有り何ぞ棲まざる。
迢迢として緩ならず復急ならず、
樓上舟中聲闇に入る。
郷を夢みる遷客展轉として臥し、
兒を抱く寡婦彷徨として立つ。
山鷓鴣、爾本此郷の鳥、
生れて巣を辭せず羣に別れず、
何を苦んで聲聲啼いて曉に到る。
啼いて曉に到る、唯能く北人を愁へしむ、
南人は聞くに慣れて聞かざるが如し。

【字解】【一】凄凄　寒き貌。
【二】黄茅　すすき。
【三】苦竹　竹の名。
【四】畠田　新に開墾した田地。
【五】石楠　木の名。
【六】迢迢　遙なる貌。
【七】遷客　貶謫せられた人。展轉　は眠られないで、寐がへりを打つこと。

【題義】山鷓鴣は曲調の名。蓋し其曲は、もと鷓鴣（南方に産する鳥の名。形鶉に似て稍大、其鳴く聲は行不得也哥哥といふが如し。）の聲に倣つて作つたものであらう。

【詩意】鷓鴣が朝に晩に啼き盡す、白露が凝つて風も寒く、黄茅の茫茫と生えた岡の頭に秋の日が沒し、苦竹の亂れ生えた嶺の下に月が傾く時に啼く。田に穀物があつても啄みもせず、石楠の枝があつても棲りもせず、緩ならず急ならず、樓上にゐても舟中にゐても其聲が聞える。故郷を夢みる遷客、子を抱く寡婦は、其聲を聞くと悲に堪へない。鷓鴣よ、お前は此土地に生れた鳥ではないか。巣を失つたわけでもなく仲間を離れたわけでもないのに、なぜ悲しい聲をして夜明まで啼き盡すのであるか。併し鷓鴣の聲も北方の人を悲ませるだけで、南方の人は聞き慣れて何とも思はない。

放旅鴈　元和十年冬作

九江十年冬大雪。
江水生レ氷樹枝折。
百鳥無レ食東西飛。
中有二旅鴈一聲最飢。

放旅鴈　元和十年冬の作

九江十年冬大に雪ふる、
江水氷を生じて樹枝折る。
百鳥食無くして東西に飛ぶ、
中に旅鴈有り聲最も飢ゑたり。

【字解】【一】九江　即ち江州。

雪中啄レ草氷上宿。
翅冷騰レ空飛動遅。
江童持レ網捕將去。
手攜入レ市生賣レ之。
我本北人今譴謫。
人鳥雖レ殊同是客。
見二此客鳥一傷二客人一。
贖レ汝放レ汝飛入レ雲。
鴈鴈汝飛向二何處一。
第一莫レ飛二西北一去。
淮西有レ賊討未レ平。
百萬甲兵久屯聚。
官軍賊軍相守老。
食盡兵窮將レ及レ汝。

雪中草を啄んで氷上に宿す、
翅冷にして空に騰れども飛動すること遅し。
江童網を持つて捕へ將ち去る、
手に攜へて市に入つて生ながら之を賣る。
我は本北人にして今譴謫せらる、
人と鳥と殊なりと雖も同じく是れ客。
此客鳥を見て客人を傷ましむ、
汝を贖ひ汝を放ちて飛んで雲に入らしむ。
鴈鴈汝飛んで何處にか向ふ、
第一に西北に飛んで去ること莫れ。
淮西に賊有り討てども未だ平がず、
百萬の甲兵久しく屯聚す。
官軍賊軍相守つて老いたり、
食盡き兵窮つて將に汝に及ばんとす。

【二】客鳥　旅の鳥。

【三】淮西　地名。時に吳元濟の叛あり。

健兒飢餓射レ汝喫。
拔二汝翅翎一爲二箭羽一。

健兒飢餓して汝を射て喫ひ、
汝が翅翎を拔いて箭羽と爲さん。

【題義】旅鴈を放してやつたことを述べた詩である。元和十年冬、江州司馬に貶せられてゐた時の作

【詩意】元和十年冬、九江には大雪が降つて、江水も凍り樹の枝も折れ、すべての鳥は食物がなくて東西に飛散した。時に旅鴈最も飢ゑ、雪中に食を覓め氷上に棲た。飛び騰らうとしても身動きが十分出來なかつた。すると兒童等が來て之を捕へ、町に賣りに行く所であつた。私はもと北方の生れであるが今貶謫せられて此地にゐる。人と鳥とは類を異にするが旅の空に居ることは同じである。此鳥を見て身につまされて悲しくなり、因つて鴈を買つて放してやつた。鴈よ、お前は何處へ往くか。西北の淮西には往かぬがよい。そこには賊が起つて百萬の兵が聚り、今や官軍賊軍互に睨み合つてゐる。食盡き兵器が乏しくなれば、忽ちお前を捕へて食ひ、お前の羽根を拔いて箭にするであらうから。

送春歸　元和十一年三月三十日作

送春歸。
春の歸るを送る、
三月盡日日暮時。
三月盡日日暮の時。

送春歸　元和十一年三月三十日の作

【字解】【一】盡日　つきる日、卽ち三十日。

去年杏園花飛(二)御溝(三)綠。去年杏園花飛び御溝綠なるとき、
何處送レ春曲(四)江曲。何處にか春を送る曲江の曲。
今年杜鵑(五)花落子規(六)啼。今年杜鵑花落ちて子規啼くとき、
送レ春何處西(七)江西。春を送る何の處ぞ西江の西。
帝城送レ春猶(七)怏怏。帝城春を送るすら猶怏怏たり、
天涯送レ春能不レ加二惆悵一。天涯春を送つて能く惆悵を加へざらんや。
莫二惆悵一。送レ春人。惆悵する莫れ、春を送る人。
冗(八)員無レ替五年罷。冗員替る無く五年にして罷めば、
應レ須二準擬一再送二潯陽(九)春一。應に須らく準擬すべし再び潯陽の春を送るを。
五年炎涼(一〇)凡十變。五年炎涼凡そ十變す、
安知二此身健不健一。安んぞ此身の健不健を知らん。
好去今年江上春。好し去れ今年江上の春、
明年未レ死還相見。明年未だ死せずんば還た相見ん。

【題義】春の去るのを送つた詩である。江州にゐて作つた。

【二】杏園　長安の西に在り。唐の新進士多く此に遊宴す。
【三】御溝　宮城のおほり。
【四】曲江　長安にある遊園地。
【五】杜鵑　ここは花の名。さつき。
【六】西江　江州城の西に當る川。
【七】怏怏　かなしき貌。
【八】冗員　閑散な官。
【九】潯陽　江州なり。
【一〇】炎涼　寒暑。

【詩意】三月三十日の日暮に春の去るのを送る。去年は長安にゐて杏園に花が飛び御溝の水の綠なる時、曲江の曲で春を送つた。今年は杜鵑花が落ち子規の啼く時、西江の西で春を送る。都にゐてさへ春を送るのは悲しいのに、まして天涯萬里の江州にゐて春を送るのは悲に堪へない。併しまだ今悲むのは早からう。今の役目が替らずに五年の期限まで務めるとすれば、まだまだ此上江州の春を送らねばならないのだから。五年といへば寒暑が十回變轉する。それまで此身が健在でゐられるであらうか覺束ない事だ。まあ今年の春よ、去るがよい。來年も壽命があつたら又會はう。

山石榴。寄二元九一　山石榴、元九に寄す

山石榴(一)。　山石榴、

一名山躑躅。一名杜鵑花。一名は山躑躅、一名は杜鵑花。
杜鵑(二)啼時花撲(三)撲。杜鵑啼く時花撲撲たり。
九江(四)三月杜鵑來。九江三月杜鵑來る、
一聲催得一枝開。一聲催し得て一枝開く。
江城(五)上佐閑無事。江城の上佐閑にして無事、

【字解】【一】山石榴　花の名。さつき。
【二】杜鵑　ほととぎす。
【三】撲撲　聚り咲く貌。
【四】九江　江州。樂天、時に江州司馬に貶せられてゐた。
【五】江城　江州城。上佐は司馬をいふ。

山下斷得廳前栽。
爛熳一欄十八樹。
根株有數花無數。
千房萬葉一時新。
嫩紫殷紅鮮麴塵。
淚痕裛損臙脂臉。
剪刀裁破紅綃巾。
謫仙初墮愁在世。
姹女新嫁嬌泥春。
日射血珠將滴地。
風翻火焰欲燒人。
閑折兩枝持在手。
細看不似人間有。
花中此物是西施。

山下に斷り得て廳前に栽う。
爛熳たり一欄十八樹、
根株數有つて花に數無し。
千房萬葉一時に新なり、
嫩紫殷紅麴塵鮮なり。
淚痕裛損す臙脂の臉、
剪刀裁破す紅綃の巾。
謫仙初めて墮ち愁へて世に在り、
姹女新に嫁し嬌として春に泥む。
日血珠を射て將に地に滴らんとす、
風火焰を翻して人を燒かんと欲す。
閑に兩枝を折つて持して手に在り、
細に看れば人間の有に似ず。
花中此物是れ西施、

【七】廳前　役所の前。
【八】爛熳　花の咲き亂るる貌。
【九】千房　澤山の花。
【一〇】嫩紫　やはらかな紫色。殷紅は深紅色。麴塵は山鳩色。
【一一】裛損　うるほしけがす。臙脂臉は、べにおしろいをつけた顏。
【一二】紅綃　紅色の絹。
【一三】謫仙　天上から下界に謫せられた仙人。
【一四】姹女　少女。
【一五】西施　古の美人の女。

芙蓉芍藥皆嫫母。
奇芳絶豔別者誰。
通州遷客元拾遺。
拾遺初貶江陵去。
去時正値青春暮。
商山秦嶺愁殺君。
山石榴花紅夾路。
題詩報我何所云。
苦云色似石榴裙。
當時叢畔唯思我。
今日欄前只憶君。
憶君不見坐銷落。
日西風起紅紛紛。

芙容芍藥皆嫫母。
奇芳絶豔別るる者は誰ぞ、
通州の遷客元拾遺。
拾遺初めて貶せられて江陵に去る、
去る時正に青春の暮るるに値ふ。
商山秦嶺君を愁殺す、
山石榴花紅にして路を夾む。
詩を題して我に報ゆ何の云ふ所ぞ、
苦に云ふ色は石榴裙に似たりと。
當時叢畔唯我を思ふ、
今日欄前只君を憶ふ。
君を憶へども見えず坐に銷落す、
日西し風起つて紅紛紛たり。

【題義】山石榴の花を詠じて通州刺史に貶せられてゐる元稹に寄せたのである。

【一六】嫫母　古の醜婦の名。
【一七】元拾遺　元稹なり。拾遺は官名。稹は時に通州刺史に貶せられてゐた。
【一八】江陵　元稹は元和五年に江陵士曹に貶せられて長安を去つた。
【一九】商山・秦嶺　皆長安の附近に在る山の名。
【二〇】石榴裙　美人の服。
【二一】銷落　意氣銷沈する。

【詩意】山石榴は山躑躅とも杜鵑花ともいひ、杜鵑の啼く頃に花が滿開になる。江州では三月になれば杜鵑が啼き、一聲啼き始めると此花も開き始める。江州司馬たる僕は閑暇だから山の下から掘つて來て役所の前に此花を植ゑた。欄干を結ひ其中に十八株植ゑたが皆爛熳として無數に花が咲き、紫のもあり紅のもあり山鳩色のもある。之を物に譬ふれば淚痕が化粧した美人の顏を裹してゐるが如く、又剪刀で紅の絹を裁ち切つたやうでもあり、仙人が下界に謫せられて愁へてゐるが如く、少女が新に嫁して嬌態を帶びてゐるが如く、日が血珠を射て地に滴るかと思はれ、風が火焰を翻して人を燒くのではないかと思はれる。靜に枝を折つて能く見れば、どうしても俗界のものとは思はれない。先づ花の中の西施ともいふべきであつて、芙蓉や芍藥などは比べ物にならない。かかる奇芳絶豔の花と別れて去つた者は誰か。そは通州の遷客元拾遺である。君が初めて貶せられて江陵に去る時、丁度春の末であつて、商山・秦嶺のあたりに此花が咲き亂れて君を愁へしめた。その時君は詩を書いて僕に贈つたが、その中に花の色は美人の裙のやうだとあつた。當時花叢に對して君は僕を思うたであらうが、今日花欄の前で僕は君を憶うてゐる。いくら憶うても見えないので意氣銷沈した折しも、日は西に傾き風が吹き立つて花がひらひらと散つた。

畫竹歌 幷引

協律郎蕭悅善畫竹。舉世無倫。蕭亦甚自祕重。有終歲求其一竿一枝。而不得者。知予天與好事。忽寫一十五竿。惠然見投。予厚其意。高其藝。無以答貺。作歌以報之。凡一百八十六字云。

【訓讀】協律郎蕭悅、善く竹を畫き、舉世倫無し。蕭亦甚だ自ら祕重し、終歲其一竿一枝を求めて得ざる者あり。予が天與の好事なるを知り、忽ち一十五竿を寫し、惠然として投せらる。予其意を厚しとし、其藝を高しとし、以て答貺するもの無し。歌を作り以て之に報ゆ。凡て一百八十六字と云ふ。

【字解】【一】協律郎　官名。【二】天與　うまれつき。好事は、ものずき。好事家。【三】答貺　返禮する。

植物之中竹難寫。
古今雖畫無似者。
蕭郎下筆獨逼眞。
丹青以來唯一人。
人畫竹身肥擁腫。
蕭畫莖瘦節節竦。
人畫竹梢死羸垂。

植物の中竹寫し難し、
古今畫くと雖も似る者無し。
蕭郎筆を下せば獨眞に逼る、
丹青以來唯一人。
人の畫は竹身肥えて擁腫す、
蕭の畫は莖瘦せて節節竦つ。
人の畫は竹梢死して羸垂す、

【字解】【一】丹青　繪畫。
【二】擁腫　ふしこぶ立つこと。

蕭畫枝活葉葉動。
不レ根而生從レ意生。
不レ筍而成由レ筆成。
野塘水邊碕岸側。
森森兩叢十五莖。
嬋娟(三)不レ失二筠粉態一。
蕭颯(四)盡得二風煙情一。
擧レ頭忽看不レ似レ畫。
低レ耳靜聽疑レ有レ聲。
西叢七莖勁而健。
省向二天竺寺前石上一見。
東叢八莖疎且寒。
曾憶湘妃(五)廟裏雨中看。
幽姿遠思少二人別一。

蕭の畫は枝活きて葉葉動く。
根あらずして生じ意に從つて生ず、
筍せずして成り筆に由りて成る。
野塘の水邊碕岸の側、
森森兩叢十五莖。
嬋娟筠粉の態を失はず、
蕭颯盡く風煙の情を得たり。
頭を擧げて忽ち看れば畫に似ず、
耳を低れて靜に聽けば聲あるかと疑ふ。
西叢七莖勁にして健、
省みれば天竺寺前石上に向つて見る。
東叢八莖疎にして且つ寒し、
曾て憶ふ湘妃廟裏雨中に看たるを。
幽姿遠思少人の別つこと少し、

【三】嬋娟　美しき貌。筠粉は竹の膚についてゐる白粉。
【四】蕭颯　風の音。
【五】湘妃廟　堯の二女、舜の妃を祀りし廟。

君と相顧みて空しく長歎。
蕭郎蕭郎老可レ惜。
手顫眼昏頭雪色。
自言便是絶筆時。
從レ今此竹尤難レ得。

君と相顧みて空しく長歎す。
蕭郎蕭郎老惜しむべし、
手顫ひ眼昏みて頭は雪色。
自ら云ふ便ち是れ絶筆の時と、
今より此竹尤も得難し。

【題義】畫竹をほめた詩である。

【詩意】植物の中で竹が尤も畫きにくい。故に古來竹の名畫は少い。ただ蕭郎の畫だけは眞に逼つてゐる。恐らく畫あつてより以來の第一人であらう。他人の畫いた竹は肉が肥えて節くれだつてゐるが蕭郎の畫いたのは幹が瘦せて節節がしつかりしてゐる。他人の畫いたのは竹の梢が枯れて力なく垂れてゐるが、蕭郎の畫いたのは枝が活きて葉が動いてゐる。根なくして思ふ儘に生じ、筍がなくとも筆の先で畫き成されてゐる。蕭郎は水邊の危岸に二つの叢をなした十五本の竹を畫いてくれたが、よく竹の風情を曲盡し、まるで畫とは思はれず。耳を傾けると風の音が聞えさうに思はれる。西叢のは七本あつて皆勁健である。いつか天竺寺の前の石の上で見た竹のやうだ。東叢のは八本あつて疎寒の趣がある。曾て湘妃廟の中で雨の降る時看た竹のやうだ。併し世に具眼者は稀であるから、幽姿遠思を見別ける人は少い。余の君と相顧みて長嘆する所以である。蕭郎の老いたことは誠に惜しい。手が顫ひ

眼が昏み頭髮は白くなつた。自分でも是れが絶筆だと言つてゐるから、今後は此竹が容易に得られなくなるだらう。

眞娘墓　墓在虎丘寺

眞娘の墓は虎丘寺に在り

(一)眞娘墓。(二)虎丘道。
不識眞娘鏡中面。
唯見眞娘墓頭草。
霜摧桃李風折蓮。
眞娘死時猶少年。
(三)脂膚荑手不牢固。
世間尤物(四)難留連。
難留連。易消歇。
塞北花。江南雪。

眞娘の墓、虎丘の道。
眞娘鏡中の面を識らず、
唯眞娘墓頭の草を見るのみ。
霜は桃李を摧き風は蓮を折る、
眞娘死する時猶少年。
脂膚荑手牢固ならず、
世間の尤物留連し難し。
留連し難く、消歇し易し、
塞北の花、江南の雪。

【題義】眞娘の墓を弔して作つた詩である。

【詩意】眞娘の墓は虎丘の道に在る。余は眞娘の顏を見る機會を得ず、唯其墓の草を見るのみである。霜は桃や李を摧き風は蓮を折る習で、まだ年が少いのに華奢で骨細な美しい眞娘の身もむざむざ斃れた。世間の尤物は皆ながもちがせず、忽ち消え易いものである。塞北の花も、江南の雪も。

【字解】(一)眞娘　唐代の吳の妓なり。墓は虎丘劍池の西に在り。
(二)虎丘　山の名。江蘇省吳縣の西北七里に在り。上に寺あり登眺すれば全城目に在り。蘇州の勝地なり。
(三)脂膚荑手　白き皮膚、柔な手。詩經に、手は柔荑の如く、膚は凝脂の如しとある。牢固は丈夫なこと。
(四)尤物　すぐれたもの。

長恨歌

長恨歌

前進士陳鴻撰。長恨歌傳曰。開元中。(一)泰階平。四海無事。明皇玄宗在位歲久。倦于(二)旰食宵衣。政無小大。始委于(三)右丞相。深居遊宴。以聲色自娛。先是元獻皇后・武淑妃。皆有寵。相次(四)卽世。宮中雖良家子千數。無可悅目者。上心忽忽不樂。時每歲十月。駕幸華淸宮。內外命婦。煒燿景從。浴(五)日餘波。賜以湯沐。春風靈液。淡蕩其間。上心油然。若有顧遇。左右前後。粉色如土。詔高力士潛搜外宮。得弘農楊玄琰女于壽邸。既笄(六)矣。鬢髮膩理。纖穠中度。舉止閑冶。如漢武帝李夫人。別疏湯泉。詔賜澡瑩。既出水。體弱力微。若不任羅綺。光彩煥發。轉動照人。上甚悅。進見之日。奏霓裳羽衣曲。以導之。定情之夕。授金釵鈿合以固之。又命戴步搖。垂金璫。明年冊爲貴妃。半后服用。繇是冶其容。敏其詞。婉孌萬態。以中上意。上益嬖焉。時省風九州。泥金五岳。驪山雪夜。上陽春朝。與上行同輦。宴專席。寢專房。雖有三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻・暨後宮才人。樂府妓女。使天子無顧眄意。自是六宮無復進幸者。非

徒殊豔尤態致レ是。蓋才智明慧。善巧便佞。先レ意希レ旨。有下不レ可二形容一者上。叔父昆弟。皆列在二清貴一。爵爲二通侯一。姊妹封二國夫人一。富埒二王室一。車服邸第。與二大長公主一侔。而恩澤勢力。則又過レ之。出二入禁門一不レ問。京師長史爲側レ目。故當時謠詠有レ云。生レ女勿二悲酸一。生レ男勿二喜歡一。又曰。男不二封侯一女作レ妃。看女却爲二門上楣一。其人心羨慕如レ此。天寶末。兄國忠。盜二丞相位一。愚二弄國柄一。及下安祿山引レ兵向レ闕。以レ討二楊氏一爲上辭。潼關不レ守。翠華南幸。出二咸陽一。道次二馬嵬亭一。六軍徘徊。持戟不レ進。從官郎吏。伏二上馬前一。請二誅レ錯以謝二天下一。國忠奉二詹纓盤水一。死二於道周一。左右之意未レ快。上問レ之。當時敢言者。請下以二貴妃一塞中天下怒上。上知レ不レ免。而不レ忍レ見二其死一。反レ袂掩レ面。使二牽レ之而去一。蒼黃展轉。竟就レ絕二於尺組之下一。既而明皇狩二成都一。肅宗受二禪靈武一。明年大兇歸レ元。大駕還レ都。尊二玄宗一爲二太上皇一。就二養南宮一。遷二于西內一。時移事去。樂盡悲來。每レ至二春之日。冬之夜。池蓮夏開。宮槐秋落。梨園弟子。玉琯發レ音。聞二霓裳羽衣一聲一。則天顏不レ怡。左右獻欷。三載一意。其念不レ衰。求二之夢魂一。杳不レ能レ得。適有二道士自レ蜀來一。知下上皇心念二楊妃一如上是。自言有二李少君之術一。明皇大喜。命致二其神一。方士乃竭二其術一以索レ之。不レ至。又能遊レ神馭レ氣。出二天界一。沒二地府一以求レ之。不レ見。又旁求二四虛上下一。東極二大海一。跨二蓬壺一。見二最高仙山一。上多二樓闕一。西廂下有二洞戶一。東向闔二其門一。署曰二玉妃太眞院一。方士抽レ簪扣レ扉。有二雙童女一。出應レ門。方士造次未レ及レ言。而雙鬟復入。俄有二碧衣侍女一又至。詰二其所レ從。方士因稱二唐天子使者一。且致二其命一。碧衣云。玉妃方寢。請少待レ之。于レ時雲海沈沈。洞天日晚。瓊戶重闔。悄然無レ聲。方士屏レ息斂レ足。拱二手門下一。久レ之而碧衣延入。且曰。玉妃出見。一人冠二金蓮一。披二紫綃一。珮二紅玉一。曳二鳳舄一。左右侍者七八人。揖二方士一問二皇帝安否一。次問二天寶十四年已還事一。言訖惘默。指二碧衣一取二金釵鈿合一。各拆二其半一。授二使者一曰。爲謝二太上皇一。謹獻二是物一。尋二舊好一也。方士受二辭與レ信。將レ行。色有レ不レ足。玉妃因徵二其意一。復前跪致レ辭。請當時一事不レ爲二他人聞一者。驗二於太上皇一。不レ然。恐鈿合金釵。負二新垣平之詐一也。玉妃茫然退立。若レ有レ所レ思。徐而言レ之曰。昔天寶十載。侍レ輦避二暑驪山宮一。秋七月。牽牛織女相見之夕。秦人風俗。是夜張二錦繡一。陳二飲食一。樹二瓜果一。焚二香于庭一。號爲二乞巧一。宮掖間尤尙レ之。夜殆半。休二侍衞於東西廂一。獨侍レ上。上凭レ肩而立。因仰レ天感二牛女事一。密相二誓心一。願世世爲二夫婦一。言畢執レ手各嗚咽。此獨君王知レ之耳。因自悲曰。由二此一念一。又不レ得レ居レ此。復墮二下界一。且結二後緣一。或爲レ天。或爲レ人。決再相見。好合如レ舊。因言。太上皇亦不レ久二人間一。幸唯自安。無二自苦一耳。使者還奏二太上皇一。皇心震悼。日日不レ豫。其年夏四月。南宮晏駕。元和元年冬十二月。太原白樂天。自二校書郎一尉二于盩厔一。鴻與二琅邪王質夫一。家二于是邑一。暇日相攜遊二仙遊寺一。話及二此事一。相與感歎。質夫舉二酒于樂天前一曰。夫希代之事。非下遇二出世之才一潤中色之上。則與レ時消沒。不レ聞二于世一。樂天深二於詩一。多二於情一者也。試爲歌レ之如何。樂天因爲二長恨歌一。意者不三但感二其事一。亦欲下懲二尤物一。窒二亂階一。垂中于將來上也。歌既成。使二鴻傳一焉。世所レ不レ聞者。予非二開元遺民一。不レ得レ知。世所レ知者。有二明皇本紀在一。今但傳二長恨歌一云爾。

【字解】【一】泰階　黄帝泰階六符經に曰く、泰階は天の三階なり。上階を天子となし、中階を諸侯公卿大夫となし、下階を士庶人となす。三階平なれば陰陽和し、天下平なりと。【二】旰食宵衣　政務に勤むること。【三】右丞相　李林甫。【四】卽レ世死すること。【五】命婦　宮中に仕ふる女。【六】浴日　天子の入浴。【七】壽邸　玄宗の皇子壽王の邸。【八】笄　女子の成年になること。【九】李夫人　武帝の寵姫。【一〇】霓裳羽衣　舞曲の名。【一一】鈿合　青貝ずりの香盒。【一二】省二風九州一　天子の巡遊して民風を視察すること。【一三】泥二金五岳一　五岳は泰・華・恒・衡・嵩をいふ。金を泥すとは屑金を以て文字を書くことで、封禪して唐室の功を頌する碑を建てること。【一四】驪山　華清宮の在る山。【一五】上陽　宮殿の名。【一六】才人　宮中に仕ふる女官。【一七】六宮　後宮の稱。【一八】大長公主　天子の諸姑。【一九】門上楣　家の名譽。【二〇】翠華　天子の御旗。【二一】馬嵬亭　驛の名。【二二】六軍　天子の軍。【二三】持戟　兵士。【二四】誅レ錯　漢の景帝の時、晁錯の議を用ひて諸侯の地を削る。吳楚七國遂に叛し、錯を斬るを以て名となす。景帝因つて錯を斬りて、諸侯に謝す。亂始めて平ぐ。ここは楊國忠を晁錯に比す。【二五】蒼黄展轉　あわてころげる。【二六】靈武　地名。【二七】歸レ元　誅せらる。【二八】李少君　漢の武帝の時の方士の名。反魂の術に長ず。【二九】蓬壺　蓬萊山。【二〇】造次　急遽なり。【二一】新垣平　漢の文帝の時の人。豫め人をして玉杯を持して闕下に獻ぜしめ、乃ち文帝に言つて曰く、闕下に寶玉の氣ありと。帝人をして之を視しむれば果して玉杯を獻ずる者あり。明年人あり平の詐を告ぐ。詔して平を誅せり。【二三】晏駕　崩御。【二四】盤厓　縣の名。

【訓讀】前進士陳鴻長恨歌傳を撰して曰く、開元中、泰階平かにして四海無事なり。明皇(玄宗)在位歳久しく旰食宵衣に倦み、政小大となく始めて右丞相に委ね、深居遊宴し聲色を以て自ら娛む。是より先き元獻皇后・武淑妃皆寵あり、相次いで世に卽く。宮中良家の子千數ありと雖も目を悅ばすべき者なし。上心忽忽として樂まず。時に毎歳十月、駕して華清宮に幸す。內外の命婦熠燿として景のごとく從ふ。浴日の餘波賜ふに湯沐を以てす。春風靈液其間に淡蕩たり。上心油然として顧遇あるが若さも、左右前後粉色土の如し。高力士に詔し潛に外宮を搜らしむ。弘農の楊元琰が女を壽邸に得たり。既に笄せり。鬢髮膩理纖穠度に中り、舉止閑冶にして漢の武帝の李夫人の如し。別に湯泉を疏ち詔して澡瑩を賜ふ。既に水を出づ。體弱く力微にして羅綺に任へざるが若く、光彩煥發し轉動して人を照す。上甚だ悅ぶ。進見の日霓裳羽衣の曲を奏し以て之を導く。定情の夕、金釵鈿合を授け以て之を固うす。又命じて步搖を戴き金璫を垂れしむ。明年冊して貴妃となし后の服用を半つ。是に繇りて其容を冶にし、其詞を敏にし、婉孌萬態以て上意に中つ。上益〻嬖す。時に風を九州に省み金を五岳に泥す。驪山の雪夜上陽の春朝、上と行けば室を同うし、宴は席を專にし、寢ぬるに房を專にす。三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻、暨び後宮の才人樂府の妓女ありと雖も、天子をして顧眄の意なからしむ。是れより六宮復た進幸する者なし。徒に殊豔尤態是を致せるのみならず、蓋し才智明慧善巧便佞、意に先だち旨を希ひ、形容すべからざるものあればなり。叔父昆弟皆列せられて淸貫に在り、爵せられて通侯となり、姉妹は國夫人に封ぜられ、富王室に埒しく、車服邸第大長公主と伴しくして、恩澤勢力は則ち又之に過ぐ。禁門に出入すれども問はず。京師の長吏爲に目を側つ。故に當時の謠詠に云へるあり、女を生むも悲酸する勿れ、男を生むも喜歡する勿れと。又曰く、男は封侯たらず女は妃となる、看よ女は却つて門上の楣となると。其の人心の羨慕すること此の如し。天寶の末、兄國忠丞相の位を盜み國柄を愚弄す。安祿山の兵を引いて闕に向ひ、楊氏を討つを以て辭となすに及び、潼關守らず翠華南に幸し、咸陽を出で道馬嵬亭に次る。六軍徘徊し持戟進まず。從官郎吏上の馬前に伏し、錯を誅して

以て天下に謝せんことを請ふ。國忠聳纓盤水を奉じて道周に死す。左右の意未だ快からず。上之を問ふ。當時の敢言する者貴妃を以て天下の怒を塞がんことを請ふ。上免れざるを知る。而かも其の死を見るに忍びず。袂を反し面を掩ひ之を牽いて去らしむ。蒼黄展轉して竟に尺組の下に絶たる。既にして明皇成都に狩し、肅宗禪を靈武に受く。明年大兇元を歸し、大駕都に還り、玄宗を尊んで太上皇となし、南宮に就き養ひ、西内に遷す。時移り事去り樂盡きて悲來る。春の日、冬の夜、池蓮夏開き、宮槐秋落つるに至る毎に、梨園の弟子、玉琯音を發し、霓裳羽衣一聲を聞けば、則ち天顏怡ばず、左右歔欷し、三載一意其念衰へず、之を夢魂に求むるも杳として得る能はず。適〻道士の蜀より來るあり。上皇の心楊妃を念ふこと是の如きを知り、自ら言ふ李少君の術ありと。明皇大に喜び命じて其神を致さしむ、方士乃ち其術を竭して以て之を索むれども至らず。又能く神を遊ばし氣に馭し天界に出で地府に沒して以て之を求むれども見えず。又旁く四虛上下に求め、東は大海を極め蓬壺に跨り、最高仙山を見る。上に樓闕多し。西廂の下に洞戸あり、東に向ひて其門を闔づ、署して玉妃太眞院といふ。方士簪を抽き扉を扣けば雙童女あり出でて門に應ず。方士造次未だ言ふに及ばず。雙鬟復た入る。俄に碧衣の侍女ありて又至り、其の從る所を詰る。方士因つて唐の天子の使者と稱し、且つ其命を致す。碧衣云はく玉妃方に寢ぬ。請ふ少らく之を待てと。時に雲海沈沈として、洞天日晚れ、瓊戸重ねて闔ぢ悄然として聲なし。方士息を屏け足を斂め手を門下に拱す。之を久うして碧衣延き入れ且つ曰く、玉妃出で見ると。一人あり金蓮を冠し紫綃を披、紅玉を珮び鳳舄を曳く。左右の侍者七八人あり。方士に揖して皇帝の安否を問ひ、次に天寶十四年已還の事を問ひ、言訖りて憫默し、碧衣を指し金釵鈿合を取らしめ、各〻其半を拆き、使者に授けて曰く、爲に太上皇に謝せよ、謹んで是物を獻じ舊好を尋むと。方士辭と信とを受け將に行らんとす。色足らざるあり。玉妃因つて其意を徵す。復た前み跪きて辭を致す。請ふ當時の一事他人に聞かれざるもの太上皇に驗せん、然らずんば恐らくは鈿合金釵も新垣平の詐を負はんと。玉妃茫然として退き立ち思ふ所あるが若く、徐に之に言つて曰く、昔天寶十載、輦に侍して暑を驪山宮に避く。秋七月牽牛織女相見るの夕、秦人の風俗に、是夜錦繡を張り、飲食を陳ね瓜果を樹ゑ、香を庭に焚き、號けて乞巧となす。宮掖の間尤も之を尙ぶ。夜殆ど半ならんとす。侍衞を東西廂に休せしめ、獨り上に侍す。上肩に凭りて立ち、因つて天を仰ぎ牛女の事に感じ、密に心に相誓ふ。願くは世世夫婦とならんと。言ひ畢り手を執りて各〻嗚咽す。此れ獨り君王之を知るのみと。因つて自ら悲しんで曰く、此一念に由りて又此に居るを得ず、復下界に墮ち且つ後緣を結ばん。或は天となり或は人となり、決ず再び相見て好合すること舊の如くならんと。因つて言ふ太上皇も亦人間に久しからじ、幸に唯自ら安んぜよ、自ら苦むなからんのみと。使者還りて太上皇に奏す。皇心震悼し、日日豫ばず。其年夏四月南宮に晏駕す。元和元年冬十二月、太原の白樂天、校書郎より盩厔に尉たり。鴻琅邪の王質夫と是邑に家す。暇日相攜へて仙遊寺に遊ぶ。話此事に及び、相與に感歎す。質夫酒を樂天の前に擧げて曰はく、夫れ希代の事は出世の才に遇ひ之を潤色するに非ずんば則ち時と消沒し、世に聞えざらん。樂天は詩に深く情に多き者なり。試に

爲に之を歌はば如何と。樂天因つて長恨歌を爲る。意者但其事に感ずるのみならず、亦尤物を懲らし亂階を窒ぎ將來に垂れんと欲するなり。歌既に成り、鴻をして傳せしむ。世に聞えざる所の者は予聞元の遺民にあらず、知るを得ず。世の知る所の者は明皇本紀の在るあり。今但長恨歌を傳すと云爾。

漢皇重色思傾國。
御宇多年求不得。
楊家有女初長成。
養在深閨人未識。
天生麗質難自棄。
一朝選在君王側。
回眸一笑百媚生。
六宮粉黛無顏色。
春寒賜浴華清池。
溫泉水滑洗凝脂。

漢皇色を重んじて傾國を思ひ、
御宇多年求むれども得ず。
楊家に女あり初めて長成し、
養はれて深閨に在り人未だ識らず。
天生の麗質自ら棄て難し、
一朝選ばれて君王の側に在り。
眸を回らして一笑すれば百媚生じ、
六宮の粉黛顏色無し。
春寒くして浴を賜ふ華清の池、
溫泉水滑にして凝脂を洗ふ。

【字解】【一】漢皇　唐の玄宗のことをいふのだけれども國惡を諱みて漢の天子のやうにしたのである。
【二】傾國　美人をいふ。
【三】御宇　その御世。
【四】長成　をとなになる。
【五】天生　うまれつき。
【六】六宮　三十六宮の略。後宮をいふ。粉黛は白粉や眉墨で化粧した宮女。
【七】華清池　驪山に在る華清宮の池。ここに溫泉あり。
【八】凝脂　白き皮膚。詩經に膚は凝脂の如しとある。

侍兒扶起嬌無力。
始是新承恩澤時。
雲鬢花顏金步搖。
芙蓉帳暖度春宵。
春宵苦短日高起。
從此君王不早朝。
承歡侍宴無閒暇。
春從春遊夜專夜。
後宮佳麗三千人。
三千寵愛在一身。
金屋粧成嬌侍夜。
玉樓宴罷醉和春。
姊妹弟兄皆列土。
可憐光彩生門戶。

侍兒扶け起せども嬌として力無し、
始めて是れ新に恩澤を承くる時。
雲鬢花顏金步搖、
芙蓉帳暖かにして春宵を度る。
春宵短きに苦み日高けて起き、
此より君王早く朝せず。
歡を承け宴に侍して閒暇無し、
春は春遊に從ひ夜は夜を專にす。
後宮の佳麗三千人、
三千の寵愛一身に在り。
金屋粧成つて嬌として夜に侍し、
玉樓宴罷んで醉うて春に和す。
姊妹弟兄皆土を列し、
憐むべし光彩門戶に生ず。

【九】侍兒　附添の少女。
【一〇】金步搖　黃金の髮飾。步けばひらひら搖ぐ故步搖といふ。
【一一】芙蓉帳　芙蓉の模樣を織り出したカーテン。寢臺の側に垂れてあるもの。
【一二】早朝　早くから朝廷に出御になる。
【一三】後宮　宮女の居る御殿。
【一四】金屋　立派な御殿。
【一五】列レ土　封爵を受けたこと。
【一六】可レ憐　あつぱれ。

遂令天下父母心。
不重生男重生女。
驪宮高處入青雲。
仙樂風飄處處聞。
緩歌慢舞凝絲竹。
盡日君王看不足。
漁陽鼙鼓動地來。
驚破霓裳羽衣曲。
九重城闕煙塵生。
千乘萬騎西南行。
翠華搖搖行復止。
西出都門百餘里。
六軍不發無奈何。
宛轉蛾眉馬前死。

遂に天下父母の心をして、男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ。
驪宮高き處青雲に入り、仙樂風に飄つて處處に聞ゆ。
緩歌慢舞絲竹を凝し、盡日君王看れども足らず。
漁陽の鼙鼓地を動かし來り、驚破す霓裳羽衣の曲。
九重の城闕煙塵生じ、千乘萬騎西南に行く。
翠華搖搖として行きて復止まり、西都門を出づること百餘里。
六軍發せず奈何ともする無し、宛轉たる蛾眉馬前に死す。

【七】 驪宮　驪山の華清宮。
【八】 慢舞　ゆるやかな舞。
【九】 盡日　終日。
【一〇】 漁陽　郡名。幽州に屬す。安祿山叛し、兵を此地に起す。鼙鼓は馬上に打つ陣太鼓。
【一一】 驚破　驚かすこと。破は助辭。
【一二】 九重　宮城。
【一三】 都門　長安の都。
【一四】 宛轉　眉の弓形をなして美しき貌。蛾眉は美しき眉、ここは美人卽ち貴妃を指す。

花鈿委地無人收。
翠翹金雀玉搔頭。
君王掩面救不得。
回看血淚相和流。
黃埃散漫風蕭索。
雲棧縈紆登劍閣。
峨嵋山下少人行。
旌旗無光日色薄。
蜀江水碧蜀山青。
聖主朝朝暮暮情。
行宮見月傷心色。
夜雨聞鈴腸斷聲。
天旋地轉廻龍馭。
到此躊躇不能去。

花鈿地に委して人の收むる無し、翠翹金雀玉搔頭。
君王面を掩うて救ひ得ず、回り看て血淚相和して流る。
黃埃散漫として風蕭索、雲棧縈紆劍閣に登る。
峨嵋山下人の行くこと少なり、旌旗光無く日色薄し。
蜀江水碧蜀山青にして蜀山青し、聖主朝朝暮暮の情。
行宮月を見れば心を傷しむるの色、夜雨鈴を聞けば腸斷つの聲。
天旋り地轉じて龍馭を廻し、此に到りて躊躇して去る能はず。

【一五】 花鈿　婦人の首飾。前額に貼りつけるもの。唐の小說に、韋固の妻が眉間の傷を掩ふ爲に花鈿を貼つたとある。
【一六】 翠翹　翡翠の羽の首飾。金雀は黃金の雀、これも首飾。玉搔頭は玉の笄の類、髮を搔く具。
【一七】 蕭索　さびしき貌。
【一八】 雲棧　雲の上の棧。蜀は山國なる故山の中腹に棧を架して往來を通ずる。劍閣は蜀の山の名。
【一九】 峨嵋山　蜀の山の名。
【二〇】 行宮　假御所。
【二一】 天旋地轉　戰亂鎭りて天地の一變したこと。龍馭は天子の車駕。
【二二】 到此　此は馬嵬を指す。

馬嵬坡下泥土中。
不レ見二玉顔一空死處。
君臣相顧盡沾レ衣。
東望二都門一信レ馬歸。
歸來池苑皆依レ舊。
(三三)太液芙蓉未央柳。
芙蓉如レ面柳如レ眉。
對レ此如何不二涙垂一。
春風桃李花開夜。
秋雨梧桐葉落時。
(三四)西宮南内多二秋草一。
宮葉滿レ階紅不レ掃。
(三五)梨園弟子白髮新。
(三六)椒房阿監青娥老。

馬嵬坡下泥土の中、
玉顔を見ず空しく死する處。
君臣相顧みて盡く衣を沾し、
東都門を望み馬に信せて歸る。
歸來池苑皆舊に依る、
太液の芙蓉未央の柳。
芙蓉は面の如く柳は眉の如し。
此に對して如何ぞ涙垂れざらん。
春風桃李花開く夜、
秋雨梧桐葉落つる時。
西宮南内秋草多く、
宮葉階に滿ち紅掃はず。
梨園の弟子白髮新に、
椒房の阿監青娥老ゆ。

【三三】太液　宮中の池の名。未央は宮殿の名。

【三四】西宮・南内　玄宗の蜀より歸りて後の御座所。

【三五】梨園弟子　玄宗は音樂に精通し、樂工數百人を選び自ら法曲を梨園で教へた。之を皇帝梨園弟子といふ。

【三六】椒房　皇妃の居室。阿監は宮女の取締をする女。青娥は青春の美貌。

夕殿螢飛思悄然。(三七)
孤燈挑盡未レ成レ眠。
(三八)遲遲鐘鼓初長夜。
(三九)耿耿星河欲レ曙天。
(四〇)鴛鴦瓦冷霜華重。
(四一)翡翠衾寒誰與共。
(四二)悠悠生死別經レ年。
魂魄不二曾來入一夢。』
(四三)臨邛道士鴻都客。
能以二精誠一(四四)致二魂魄一。
爲レ感二君王一(四五)展轉思。
遂教二方士一(四六)慇懃覓。
排レ空馭レ氣奔如レ電。
升レ天入レ地求レ之遍。

夕殿螢飛んで思悄然、
孤燈挑げ盡して未だ眠を成さず。
遲遲たる鐘鼓初めて長き夜、
耿耿たる星河曙けんと欲する天。
鴛鴦の瓦は冷かにして霜華重く、
翡翠の衾は寒うして誰と共にせん。
悠悠たる生死別れて年を經、
魂魄曾て來りて夢に入らず。
臨邛の道士鴻都の客、
能く精誠を以て魂魄を致す。
君王展轉の思に感ずるが爲に、
遂に方士をして慇懃に覓めしむ。
空を排し氣に馭して奔ること電の如く、
天に升り地に入りて之を求むること遍し。

【三七】悄然　うれふる貌。

【三八】遲遲　時のたつのがおそいこと。

【三九】耿耿　小明の貌。星河はあまのかは。

【四〇】鴛鴦瓦　互に對をなせる瓦をいふ。霜華は霜。

【四一】翡翠衾　翡は雄、翠は雌、鳥の名。翡翠の形を織出した夜具。

【四二】悠悠　遙なる貌。

【四三】臨邛　蜀の地名。道士は仙術を學んだ方士。鴻都は漢の宮門の名。

【四四】致二魂魄一　死人の魂を呼びかへすこと。

【四五】展轉　眠られないで寐がへりを打つこと。

【四六】慇懃　丁寧なり。

上窮碧落下黄泉。
兩處茫茫皆不見。
忽聞海上有仙山。
山在虚無縹渺間。
樓閣玲瓏五雲起。
其中綽約多仙子。
中有一人字太眞。
雪膚花貌參差是。
金闕西廂叩玉扃。
轉教小玉報雙成。
聞道漢家天子使。
九華帳裡夢魂驚。
攬衣推枕起徘徊。
珠箔銀屏邐迤開。

上は碧落を窮め下は黄泉、
兩處茫茫として皆見えず。
忽ち聞く海上に仙山有りと、
山は虚無縹渺の間に在り。
樓閣玲瓏として五雲起り、
其中綽約として仙子多し。
中に一人あり太眞と字す、
雪膚花貌參差として是なり。
金闕の西廂玉扃を叩き、
轉た小玉をして雙成に報せしむ。
聞道漢家天子の使と、
九華帳裡夢魂驚く。
衣を攬り枕を推し起つて徘徊し、
珠箔銀屏邐迤として開く。

【四七】碧落　青空。
【四八】縹渺　遠くかすかな貌。
【四九】玲瓏　光り輝く貌。五雲は五色の雲。
【五〇】綽約　あでやかに美しき貌。仙子は仙女。
【五一】參差　長短齊しからざる貌。ここは全然一致するほどでもないが多少似かよつてゐるといふ意。
【五二】金闕　金殿なり。西廂は西の離れ座敷。玉扃は玉のとぼそ。
【五三】小玉　吳王夫差の侍女の名。因つて太眞の侍女の意に用ふ。雙成は西王母の侍女の名。漢武内傳に見ゆ。ここでは太眞の侍女の意に用ふ。
【五四】九華帳　美しき花の模樣を織出したカーテン。
【五五】珠箔　玉の簾。銀屏は銀の屏風。邐迤は連接する貌。

雲鬢半偏新睡覺。
花冠不整下堂來。
風吹仙袂飄颻舉。
猶似霓裳羽衣舞。
玉容寂寞淚闌干。
梨花一枝春帶雨。
含情凝睇謝君王。
一別音容兩渺茫。
昭陽殿裡恩愛絶。
蓬萊宮中日月長。
回頭下望人寰處。
不見長安見塵霧。
唯將舊物表深情。
鈿合金釵寄將去。

雲鬢半偏いて新に睡覺め、
花冠整はず堂を下りて來る。
風は仙袂を吹き飄颻として擧り、
猶霓裳羽衣の舞に似たり。
玉容寂寞として淚闌干たり、
梨花一枝春雨を帶ぶ。
情を含み睇を凝らして君王に謝す、
一別音容兩ながら渺茫。
昭陽殿裡恩愛絶え、
蓬萊宮中日月長し。
頭を回して下人寰を望む處、
長安を見ずして塵霧を見る。
唯舊物を將て深情を表し、
鈿合金釵寄せて將ち去らしむ。

【五六】玉容　美しき容貌。寂寞は淋しき貌。闌干は涙の流るる貌。
【五七】音容　玄宗の靡幷に形。渺茫は遠く隔たる貌。
【五八】昭陽　生前楊貴妃の居た宮殿の名。
【五九】蓬萊宮　蓬萊山の仙宮。現に楊貴妃の居る處。
【六〇】人寰　人の居る處。下界。
【六一】鈿合　青貝ずりの香盒。

釵留一股合一扇。(六二)　釵は一股を留め合は一扇、
釵擘黃金合分鈿。　釵は黃金を擘き合は鈿を分つ。
但令心似金鈿堅。(六三)　但心をして金鈿の堅きに似せしめば、
天上人間會相見。　天上人間會ず相見ん。
臨別殷勤重寄詞。(六四)　別に臨んで殷勤重ねて詞を寄す、
詞中有誓兩心知。(六五)　詞中に誓あり兩心知る。
七月七日長生殿。(六六)　七月七日長生殿、
夜半無人私語時。　夜半人無く私語の時。
在天願作比翼鳥。(六七)　天に在つては願くは比翼の鳥と作り、
在地願爲連理枝。(六八)　地に在つては願くは連理の枝と爲らん。
天長地久有時盡。(六九)　天長く地久しきも時ありて盡く。
此恨綿綿無絕期。　此恨綿綿として絕ゆる期無からん。

【題義】この篇は玄宗皇帝と楊貴妃との情事を詩化したもので、長恨と題したのは結末に、天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期とあるに由るのである。

【六二】一扇　盒は身と蓋と二つ合せるものであるが、そのどちらか一方を一扇といふ。

【六三】人間　世間。

【六四】殷勤　懇懃に同じ。

【六五】兩心　玄宗と楊貴妃との心。

【六六】長生殿　華淸宮の殿の名。

【六七】比翼鳥　翼を竝べて飛ぶ鳥。

【六八】連理枝　兩樹の枝の互に連ること。

【六九】綿綿　長く續く貌。

【詩意】漢に一人の天子があつた。女色に御執心で、一顧すれば國をも傾けるといふやうな美人を得たいものだと思召して、その御治世の間多年求められたが仲仲得られなかつた。時に楊といふ家に娘があつて既に年頃にもなつたが、深窓の中に養はれてゐる箱入娘であつたから、世間の人は誰も識らなかつた。生れつき非常に美しい器量であつたので、いつとはなしに世に顯れ、忽ち選ばれて天子の御側に事へることになつた。この娘が眸を回らして一たび笑へば愛嬌が滿面に溢れて、數ある宮中の美人も月の前の星のやうに見劣りがした。春まだ寒き時驪山の華淸宮の溫泉に入浴を差許され、滑な溫泉で凝脂のやうな白い肌を洗つた。湯から上つた時は力なき嬌身を僅に侍女に扶けられて起つほどなよなよとしてゐた。これは新に君恩に浴するやうになつた頃の事である。爾來益〻君寵を辱なうするやうになつて、雲のやうな黑髮・花のやうな顏、それに金の步搖を挿し、芙蓉帳を垂れた暖かな閨の中に天子に侍して春の夜を過ごした。春の夜は明け易いので覺えず寢過ごし、日が高く升つてから起きるといふ始末で、遂に天子も早く朝廷に出御にならないやうになつた。かくて君の御機嫌を取り酒宴に侍りなどして一刻の閑暇もなく、春は春の遊に扈從し夜は己獨り枕席に侍するといふ有樣で、大奧の美人が三千人もゐたが、その三千人の寵愛を楊貴妃が獨占してしまつて、金屋の中に美しく化粧をして夜の御相手をなし、玉樓の御宴が終れば醉心地が春風に融和した。楊貴妃が此の如く全盛を極めるやうになつたので、其兄弟姉妹まで諸侯に封ぜられ、あつぱれ一門の光彩を添へることになり、遂に世間の親心を一變し、男を生むよりは寧ろ女を生むに如かずといふ考を起させた。さて驪山の華淸

宮は高く青空の上に聳えてゐる。そこで奏する仙樂の聲が風に飄つて四方に響き渡る。これは歌舞音曲を奏して天子の歡を奉ずるのである。天子は終日之を御覽になつても尙飽き足らなかつた。忽ち漁陽から起つた安祿山の謀叛軍が、天地もどよめくほどに陣太鼓を鳴らして攻め上り、華淸宮中の霓裳羽衣の曲を驚かした。（以上第一段、楊貴妃が寵を擅にするに至つた事を敍した）遂に宮城の內まで賊兵が闖入し煙塵が立ち籠めたので、玄宗皇帝は千乘萬騎を從へ錦の御旗を靡かして西南蜀地を指して蒙塵せられ、長安を距ること西の方百餘里なる馬嵬驛まで落ち延び給うたが、亂の本である楊貴妃を退治せられぬならば御伴することは御免蒙ると言つて軍隊が承知しなかつたので、遂に已むなく楊貴妃に死を賜ふことになり、貴妃を兵士に引き渡したので、あたら花を欺く楊貴妃も馬前に縊り殺され、首飾――花鈿・翠翹・金雀・玉搔頭の類――があたりに散亂しても取り收める者もなく、玄宗皇帝も顏を掩うて救ふ術もなく、回り看て血の涙を流すばかりであつた。風が淋しく黃埃を吹き立てる中を、雲の上の棧を渡つて劍閣に登り、峨嵋山下の行き交ふ人も稀なる處を通つて、日陰者のやうに旗色の揚らぬ樣子で蜀へ御著きになつた。蜀は水碧に山靑く景色のよい處であるが、楊貴妃を失つた玄宗に取つては少しも心を慰むるよすがとはならず、朝な夕なに思に耽り、明月を見ては御心を痛ましめ、雨の夜に鈴の音を聞いては腸を斷つばかりであつた。（以上第二段、楊貴妃に死を賜うた事を敍した）やがて兵亂が鎭定され天地が常態に復したので玄宗は御還幸になつた。その途中馬嵬驛をお通りになつて、立ち去るに忍びられず躊躇徘徊せられたが、楊貴妃の玉顏は復見る由もなく、ただ空しく死んだ跡を留むるのみであつたので、君臣顏を視合せて涙を流し、都を指して御發輦にはなつたが、心が進まないので唯馬の進むに任せ、急ぎ還らうともせられなかつた。さて都に還つて見れば池だの庭だのは以前の通りで、太液池には芙蓉の花が開き、未央宮には柳が綠の絲を垂れてゐる。この芙蓉は楊貴妃の面の如く柳は楊貴妃の眉の如くで、此に對してどうして追懷の涙を流さずにゐられようぞ。春風が吹いて桃李の花の開く時も、秋雨が降つて梧桐の葉の落つる時も、涙にかきくれぬことはなかつた。西宮・南內には秋草が茂り、紅の落葉が階に滿ちてゐても、掃除などもさせ給はず、嘗て親しく御指南なされた梨園の弟子なども白髮になり、後宮の女監も老衰して色香なく、御心を慰め奉るものは何もなかつた。夕方になると淋しく螢の飛ぶのを御覽になつて感慨に耽らせ給ひ、燈心を搔き立て搔き立てして、遂に燃え盡きるまで眠り給はず。遲遲として時刻の移り難く夜の明け難きを嘆きつつ（第一段の春宵苦短日高起に反襯す）天河が薄明るくなつて夜の曙けるまで思に沈んで獨り坐し給ひ、屋根の瓦に霜の白く降る寒き夜を、翡翠の衾を共にする相手もなくて過し給ひ、楊貴妃に死別して久しくなるが、せめては夢にでも會ひたいと思召されたが、貴妃の魂は玄宗の夢にさへ現れなかつた。（以上第三段、玄宗の追懷の情を敍した）時に臨邛の生れの道士で長安の鴻都門のほとりに客寓してゐる者があつて、此人は眞心を以て死人の魂を呼び返すことが出來る。侍臣たちは玄宗の思ひ焦がれて寢ても眠れない御心を氣の毒に思ひ、遂に此道士をして殷勤に楊貴妃の魂を覓めしめることにした。因つて道士は電の如く雲氣を凌いで天に升り、更に下つて地下に入り、遍く搜し索めたが見當ら

なかつたが、忽ち海中の虛無縹渺たる處に仙山があつて、そこには立派な樓閣が建つてゐて五色の雲が棚引き、其處に美しい仙女が澤山ゐるが、中に字を太眞といふのがゐるといふ話を聞き込んだ。話の樣子では、雪の膚、花の顏、現に尋ね求めてゐる楊貴妃に似通つてゐる。因つて道士は金殿の西廂に行つて玉の扃を叩き、侍女から侍女へ取次を賴んで來意を告げた。楊貴妃は漢の天子の御使と聞いて、九華帳の中に寢てゐたが、忽ち驚いて目を覺し、衣を取りのけ、枕を推しやりて起きあがり、珠の簾、銀の屏風を推し開き、寐亂れ髮を繕ひもせずに堂から下つて來た。風が袂を吹いてひらひらと飄り、恰も霓裳羽衣の舞のやうに見える。物をも言はず唯玉の顏に涙を流してゐる。實に一枝の梨花が雨に惱める風情があつた。やがて情を含み睇を据ゑ玄宗の好意を謝して言ふやう、「一たび陛下とお別してから音容に接することが出來ず、生前には昭陽殿中に恩寵を辱なうしたが、その御恩寵も絶えて、今は徒に蓬萊宮中に長き月日を送つて居ります。陛下を思ひ奉つりて頭を回らして下界を望めども、長安の都は見えず、唯塵霧を見るのみであります。ただ私の舊くから持つてゐる品物を差上げて記念に致したいと存じ、鈿盒と金釵とをお屆け申し、釵は一股を盒は一半をこちらに留めて置きます。ただお互の心が黃金や螺鈿の如く堅くさへあれば、天上に於てか或は人間界に於てか必ず相見る機會が來るで御座りませう。」道士の別れ去らんとするに臨み、重ねて玄宗への傳言を賴んだ。その傳言の詞の中には玄宗と貴妃との誓があつて、これは二人の心に知つてゐるだけで他には誰も知る者はない。それはかうである。「七月七日の晚に長生殿で夜半に二人で私語した時、天に在りては比翼の鳥となり、地に在りては連理の枝とならうと固く誓つた」といふのである。さて天は長く地は久しいが此天地が盡きる時があるとも、此誓の實現されずに終つた恨は綿綿と永く續いて盡きる時はないであらう。（以上第四段、道士招魂の事を敍した。）

【餘論】唐宋詩醇に云はく、「古より女禍未だ唐より甚しきものあらず。明皇踐祚、覆轍遠きにあらず。開元精を厲まし、幾んど太平を致す。天寶以後情を牀笫に溺らし、太眞潛納、新臺と譏を同うす。艶妻の煽ぐ處、職として厲階を爲す。倉皇播遷、宗社再造、幸なり。姚宋諸賢臣、之を輔けて足らず。一太眞之を敗りて餘あり。南內歸來、儻し返りて自ら咎めば、恨終に窮まるなし。心を既殞傾城の婦に繫るに遑あらんや。長恨一傳、自ら是れ當時傳會の說、其事殊に謬ずるに足るものなし。居易詩詞特に妙、情文相生じ、沈鬱頓挫、哀艶の中、諷刺を具有す。漢皇重レ色思二傾國一、從レ此君王不二早朝一、君王掩レ面救不レ得、皆微詞なり。養在二深閨一人未レ識、尊者のために諱むなり。欲、縱にすべからず、樂、極むべからず。結想因を成し、幻緣奚ぞ罄きん。總て以て情に發して禮儀に止まる能はざる者の戒めとなす。通首四段に分つ。漢皇重レ色思二傾國一より驚破霓裳羽衣曲に至るまで、楊妃寵を擅にする事を暢敍し、却つて漁陽鼙鼓動レ地來の二句を以て、暗に下意を攝し、一氣直下、轉落の痕を滅去す。九重城闕煙塵生より夜雨聞レ鈴腸斷聲に至るまで、馬嵬死を賜ふ事を敍し、行宮見レ月傷レ心色の二句、暗に下意を攝す。蓋し蜀に幸して日として思はざるなきを以て、京に還りて彷徨舊を念ふことを引起し、一直說去し、中間暗に馬嵬改葬の一節を藏す。此れ行文飛渡の法なり。天旋地轉回二

龍馭」より魂魄不二曾來入一夢に至るまで、上皇南宮舊を思ふの情を敍し、悠悠生死別經レ年の二句、亦暗に下意を攝し、臨邛道士鴻都客より末に至るまで、方士招魂の事を敍し、結處長恨を點清して、一詩の結穴となし、憂然として止む。全勢已に足る。更に必ずしも別に收束を爲さず。」汪立名曰はく、「按ずるに隱居詩話に云ふ。唐人馬嵬の事を詠ずる多し、世稱する所、白居易の六軍不レ發無二奈何一宛轉蛾眉馬前死。此れ乃ち祿山能く官兵をして叛せしめ、明皇に逼迫して已むを得ずして楊妃を誅するを歌詠するなり。豈特文章の體裁を曉らざるのみならんや。而も造語蠢拙、抑も亦臣下君に事ふるの禮を失ふ。老杜は則ち然らず。其北征の詩に曰はく、不レ聞夏殷衰、中自誅二褒妲一と。乃ち明皇夏商の敗に鑒み、天を畏れ禍を悔い、妃子に賜ふに死を以てすることを見る。官軍何ぞ與からんと。此論少陵を推尊するは則ち可なり。若し此を以て樂天を貶するは則ち不可なり。詩を論ずるは須らく題を相るべし。長恨歌は本陳鴻・王質夫と楊妃の始終を話して作る。猶詩未だ詳かならざるあるを慮り、陳鴻又長恨歌傳を作る。所謂特に其事に感ずるのみならず。亦尤物を懲して亂階を窒ぎ將來に垂れんと欲するなり。自ら北征の詩と同じからず。若し馬嵬の事實を諱まば、則ち長恨の二字便ち著落なし。書を讀み、全く作詩の本末を理會せずして、片詞を執り、肆に古人を議す。已に太過に屬す。祿山能く官軍をして云云せしむるを歌詠すと謂ふに至りては則ち尤も鍛鍊に近し。宋人文字吹求の禍多き、皆此等の議論に釀さる。唐人の詩を作る若きは本所謂忌諱無し。忠厚の風自ら慕ふべし。然れども陳の傳中貴妃壽瑯より進むを敍す。而るに白詩之を諱み、但云ふ楊家有レ女初長成、養在二深閨一人未レ識、天生麗質難二自棄一、一朝選在二君王側一と。安んぞ樂天文章の大體を知らずと謂ふを得んや。若し其謬を祖して以て少陵を羅織するものあらば、必ず將に少陵の憶昔詩の張后不レ樂天子忙の句を以て君に事ふるの禮を失ふとなし、百官跳足隨二天王一の句を、吐番代宗を迫逼するを歌詠すとなさん。又豈通論ならんや。」

婦人苦

蟬鬢加レ意梳。蛾眉用レ心掃。
幾度曉粧成。君看不レ言レ好。
妾身重二同穴一。君意輕二偕老一。
惆悵去年來。心知未レ能レ道。
今朝一開レ口。語少意何深。
願引二他時事一。移二君此日心一。
人言夫婦親。義合如二一身一。
及レ至二死生際一。何曾苦樂均。

婦人苦

蟬鬢は意を加へて梳り、蛾眉は心を用ひて掃ふ。
幾度か曉粧成れども、君看て好しと言はず。
妾が身は同穴を重んずれども、君が意は偕老を輕んず。
惆悵す去年來、心に知れども未だ道ふ能はず。
今朝一たび口を開く、語少うして意何ぞ深き。
願はくは他時の事を引き、君が此日の心を移さん。
人は言ふ夫婦の親、義合うて一身の如しと。
死生の際に至るに及びて、何ぞ曾て苦樂均しからん。

婦人一喪夫。終身守孤子。
有如林中竹。忽被風吹折。
一折不重生。枯死猶抱節。
男兒若喪婦。能不暫傷情。
應似門前柳。逢春易發榮。
風吹一枝折。還有一枝生。
爲君委曲言。願君再三聽。
須知婦人苦。從此莫相輕。

婦人一たび夫を喪へば、身を終るまで孤子を守る。
林中の竹の如き有り、忽ち風に吹き折らる。
一たび折れて重ねて生せず、枯死して猶節を抱く。
男兒婦を喪ふが若き、能く暫く情を傷ましめざらんや。
應に門前の柳に似たるべし、春に逢うて榮を發し易し。
風吹いて一枝折るれば、還一枝の生ずる有り。
君が爲に委曲言ふ、願はくは君再三聽け。
須く婦人の苦を知るべし、此より相輕んずること莫れ。

【字解】【一】蟬鬢　婦人の美しき鬢。【二】蛾眉　美人の眉。【三】他時　過去。【四】孤子　寡居。【五】委曲　くはしく。ねんごろに。

【題義】婦人の男子に比して苦心多きことを述べた詩である。

【詩意】鬢を梳るにも眉を掃ふにも夫の氣に入るやうにと注意を拂ひ、朝化粧をしても夫は美しいとは言つてくれない。私は偕老同穴の契を大事と心得てゐるのに夫は深く意に留めてゐないらしい。こんな事を考へて去年このかた悲んでゐたが未だ口に出しては言はなかつたが今朝は一たび口を開いて言つた。言葉は少いが意味は極めて深いのである。願はくはこの言葉によつて夫の心を昔に引き返したいものだ。人は夫婦の交は一身同體だといふが、死生の際に至りては苦樂の相違が甚だしい。婦人は一たび夫を失へば終身寡暮をして、竹藪の竹が風に折られたやうに一度折れては重ねて生えず、枯死するまで節を守るが、男子は妻を失へば暫の間は悲みもするが、門前の柳と同じで春に逢へば又新しい芽を出し、風に折れても又別な枝が生える。君に聽いてもらはうと委しく言ふのであるから、念を入れてお聽き下さい。これに因つて婦人の苦みを理解し、以後は婦人を輕んぜぬがよいぞや。

長安道

花枝缺處青樓開。
豔歌一曲酒一盃。
美人勸我急行樂。
自古朱顏不再來。
君不見外州客長
安道。
一廻來。一廻老。

長安道

花枝缺くる處青樓開く、
豔歌一曲酒一盃。
美人我に勸む行樂を急にせよ、
古より朱顏再び來らず。
君見ずや外州の客、長安の道、
一廻來り、一廻老ゆ。

【字解】【一】青樓　妓樓　【二】豔歌　なまめかしい歌。【三】朱顏　紅顏に同じ、若き顏色。【四】外州客　地方から京に來る人。【五】一廻　一回。一度。

【題義】長安の花街の繁華を述べた詩である。

【詩意】長安の花街には列を成して花が咲き揃ひ、そのあひまあひまに妓樓があつて、飲めや歌への嬌態を演じてゐる。美妓が我に勸めて言ふには、「出來る時に樂をなさるがよい。若い時は二度とはないのです。御覽なさい長安の道を通る外來の客を。來るたび毎に老いるではありませぬか」と。

潛別離

不レ得レ哭。潛別離。
不レ得レ語。暗相思。
兩心之外無二人知一。
深籠夜鏁獨棲鳥。
利劍春斷連理枝。
河水雖レ濁有二清日一。
烏頭雖レ黑有二白時一。
唯有三潛離與二暗別一。
彼此甘心無二後期一。

潛別離

哭することを得ず、潛に別離す。
語ることを得ず、暗に相思ふ。
兩心の外人の知る無し。
深籠夜鏁す獨棲の鳥、
利劍春斷つ連理の枝。
河水濁れりと雖も清む日有り、
烏頭黑しと雖も白き時有り。
唯潛に離るると暗に別るると有つて、
彼此甘心して後期無し。

【字解】【一】兩心　二人の心。

【二】連理枝　別な木の枝が互に連つてゐるのをいふ。

【三】甘心　忍んでゐること。後期　は再會の期。

【題義】潛に相別れた苦況を述べた詩である。

【詩意】聲を立てて泣くことも出來ずに、こつそりと別れた。別れて後は人に語ることも出來ず、唯心に思ひ合ふのみである。此事は二人より外には誰も知る者はない。之を譬ふれば獨寐の鳥を籠に閉ぢ籠めたやうでもあり、鋭い刀で連理の枝を斷ち切つたやうでもある。黃河の濁流も時あつて清むであらう。烏の黑い頭も時節がくれば白くもならう。潛離と暗別との身は、再會の期もなく互にあきらめてゐる外はない。

隔浦蓮

隔レ浦愛二紅蓮一。
昨日看二猶在一。
夜來風吹落。
只得二一回採一。
花開雖レ有二明年期一。
復愁明年還暫時。

隔浦蓮

浦を隔てて紅蓮を愛す、
昨日猶在るを看る。
夜來風吹き落し、
只一回採ることを得たり。
花開くこと明年の期有りと雖も、
復愁ふ明年も還暫時ならんことを。

【題義】向岸の蓮花の散つたのを惜んだ詩である。

【詩意】向岸の紅蓮が昨日まではまだ在つたが、夜來の風に吹き散らされて、もう再び採ることは出來なくなつた。花は來年も咲くではあらうが、花の盛は來年も短いだらう。それが恨めしい。

寒食野望吟

丘墟郭門外。
寒食誰家哭。
風吹曠野紙錢飛。
古墓纍纍春草綠。
棠梨花映白楊樹。
盡是死生離別處。
冥漠重泉哭不聞。
蕭蕭暮雨人歸去。

寒食野望吟

丘墟郭門の外、
寒食誰が家か哭する。
風曠野を吹いて紙錢飛び、
古墓纍纍として春草綠なり。
棠梨花映ず白楊樹、
盡く是れ死生離別の處。
冥漠たる重泉哭すれども聞えず、
蕭蕭たる暮雨人歸り去る。

【題義】寒食の頃、野邊を望んだ景況を述べた詩である。

【詩意】郭外の墳墓に誰か哭泣してゐる者がある。風が野原を吹きまくつて、墓前に供へた紙錢も爲に飛散し、纍纍たる古墳には春草が茂つてゐる。棠梨の花と白楊との互に相映ずる處は、幾多の人が死別の涙を流した處である。如何に聲高く哭するとも、黃泉までは聞えないのを恨むものの如く、淋しき雨の降りそそぐ夕に哭する人は歸り去つた。

【字解】【一】丘墟　墳墓。
【二】寒食　冬至より百五日目をいふ。この時は三日間火を禁ずる習慣あり。誰家は誰なり。
【三】紙錢　紙を剪つて錢となし、束帛に代ふ。
【四】纍纍　かさなり合ふこと。
【五】棠梨　木の名。白楊も木の名。墓上に植う。
【六】冥漠　遠き貌。重泉は黃泉なり。
【七】蕭蕭　淋しき貌。

琵琶引　并序

元和十年。予左遷九江郡司馬。明年秋。送客湓浦口。聞舟中夜彈琵琶者。聽其音。錚錚然有京都聲。問其人。本長安倡女。嘗學琵琶於穆曹二善才。年長色衰。委身爲賈人婦。遂命酒。使快彈數曲。曲罷憫默。自敍少小時歡樂事。今漂淪憔悴。轉徙於江湖間。予出官二年。恬然自安。感斯人言。是夕始覺有遷謫意。因爲長句。歌以贈之。凡六百一十二言。命曰琵琶行。

琵琶引　并に序

【訓讀】元和十年、予九江郡司馬に左遷せられ、明年の秋、客を湓浦口に送り、舟中夜琵琶を彈ずる者を聞く。其音を聽けば、錚錚然として京都の聲あり。其人を問へば、本長安の倡女にして、嘗て琵琶を穆・曹の二善才に學び、年長じて色衰へ、身を委して賈人の婦となると。遂に酒を命じて、快く

數曲を彈ぜしむ。曲罷みて惘默、自ら少小の時歡樂せる事、今漂淪憔悴、江湖の間に轉徙するを敍ぶ。予出でて官すること二年、恬然自ら安んずるも、斯人の言に感じ、是夕始めて遷謫の意あるを覺ゆ。因つて長句を爲り、歌うて以て之を贈る。凡て六百一十二言。命じて琵琶行と曰ふ。

【字解】【一】九江郡　潯陽郡なり。今の江西省九江縣。司馬は刺史の下に屬する官。【二】湓浦口　湓水の長江に注ぐ處。九江縣の西に在り。【三】錚錚　琵琶の音。【四】倡女　歌妓。【五】穆・曹　姓なり。善才とは樂師の稱。【六】漂淪　流浪する。憔悴は瘦せ衰へる。【七】出官　中央政府から地方官になることをいふ。【八】恬然　自ら安んずる貌。【九】二言　六言の誤。

潯陽江頭夜送客。
楓葉荻花秋瑟瑟。
主人下馬客在船。
舉酒欲飲無管絃。
醉不成歡慘將別。
別時茫茫江浸月。
忽聞水上琵琶聲。
主人忘歸客不發。

潯陽江頭夜客を送る、
楓葉荻花秋瑟瑟。
主人は馬より下り客は船に在り、
酒を擧げて飲まんと欲して管絃無し。
醉うて歡を成さず慘として將に別れんとす、
別るる時茫茫江月を浸す。
忽ち聞く水上琵琶の聲、
主人は歸るを忘れ客は發せず。

【字解】【一】潯陽江　湓浦口をいふ。【二】瑟瑟　秋風の淋しく吹く聲。【三】主人　樂天自ら謂ふ。【四】茫茫　廣廣としてゐる貌。

尋聲暗問彈者誰。
琵琶聲停欲語遲。
移船相近邀相見。
添酒回燈重開宴。
千呼萬喚始出來。
猶抱琵琶半遮面。
轉軸撥絃三兩聲。
未成曲調先有情。
絃絃掩抑聲聲思。
似訴平生不得志。
低眉信手續續彈。
說盡心中無限事。
輕攏慢撚抹復挑。
初爲霓裳後六么。

聲を尋ねて暗に問ふ彈ずる者は誰ぞと、
琵琶聲停んで語らんと欲すること遲し。
船を移して相近き邀へて相見る、
酒を添へ燈を回らし重ねて宴を開く。
千呼萬喚始めて出で來る、
猶琵琶を抱いて半面を遮る。
軸を轉じ絃を撥すること三兩聲、
未だ曲調を成さず先づ情あり。
絃絃掩抑す聲聲の思ひ、
平生志を得ざるを訴ふるに似たり。
眉を低れ手に信せて續續彈ず、
說き盡す心中無限の事。
輕く攏へ慢く撚り抹して復挑ぐ、
初は霓裳を爲し後は六么。

【五】千呼萬喚　幾度も呼ぶ。【六】轉ㇾ軸　軸とは絲を捲いてあるもの。撥ㇾ絃とは撥でかき鳴らすこと。【七】掩抑　手で絃をおさへる。【八】輕攏云云　攏・撚・抹・挑は琵琶をひく手法の名。抹は音をかき消す手法。挑は急に音を立てる手法。【九】霓裳・六么　曲の名。

(一〇)大絃嘈嘈如急雨。
(一一)小絃切切如私語。
嘈嘈切切錯雜彈。
大珠小珠落玉盤。(一二)
(一三)間關鶯語花底滑。
(一四)幽咽泉流水下灘。
水泉冷澁絃凝絶。
凝絶不通聲暫歇。
別有幽愁暗恨生。
此時無聲勝有聲。(一五)
銀缾乍破水漿迸。(一六)
鐵騎突出刀槍鳴。
曲終收撥(一七)當心畫。
四絃一聲如裂帛。(一八)

大絃は嘈嘈として急雨の如く、
小絃は切切として私語の如し。
嘈嘈切切錯雜して彈じ、
大珠小珠玉盤に落つ。
間關たる鶯語花底に滑かに、
幽咽せる泉流水灘を下る。
水泉冷澁絃凝絶し、
凝絶して通ぜず聲暫く歇む。
別に幽愁暗恨の生ずるあり、
此時聲無きは聲有るに勝る。
銀缾乍ち破れて水漿迸り、
鐵騎突出して刀槍鳴る。
曲終りて撥を收め心に當てて畫し、
四絃一聲裂帛の如し。

【一〇】大絃　太い絲。嘈嘈は音の騷がしき貌。
【一一】小絃　細い絲。切切は細く急な聲。
【一二】玉盤　玉の盆。
【一三】間關　鶯の啼く聲。花底は花の下。
【一四】幽咽　むせびかなしむ。
【一五】銀缾　銀の瓶。水漿は水汁。
【一六】鐵騎　騎馬武者。
【一七】當心畫　胸のあたりを眞一文字に掻きならす。
【一八】裂帛　絹を裂く。

東船西舫(一九)悄無言。
唯見江心秋月白。(二〇)
沈吟放撥(二一)挿絃中。
整頓衣裳起斂容。
自言本是京城女。(二二)
家在蝦蟇陵下住。(二三)
十三學得琵琶成。
名屬教坊(二四)第一部。
曲罷曾教善才服。
粧成每被秋娘妬。(二五)
五陵年少(二六)爭纏頭。
一曲紅綃不知數。(二七)
鈿頭(二八)銀篦擊節碎。
血色羅裙翻酒汚。(二九)

東船西舫悄として言無く、
唯見る江心秋月の白きを。
沈吟撥を放ちて絃中に挿み、
衣裳を整頓して起つて容を斂む。
自ら言ふ本是れ京城の女、
家は蝦蟇陵下に在りて住す。
十三琵琶を學び得て成り、
名は屬す教坊の第一部。
曲罷みて曾て善才をして服せしめ、
粧成りて毎に秋娘に妬まる。
五陵の年少爭うて纏頭し、
一曲の紅綃數を知らず。
鈿頭の銀篦節を擊ちて碎け、
血色の羅裙酒を翻へして汚る。

【一九】西舫　西の方の舟。
【二〇】江心　江の眞中。
【二一】沈吟　思案に耽けること。
【二二】京城　帝都長安。
【二三】蝦蟇陵　もと漢の大儒董仲舒の墓の在つた所で、漢の武帝は此處を過ぐる毎に馬から下りて敬意を表した。因つて下馬陵といつたのを後世訛つて蝦蟇陵となつたのであるといふ。長安の郊外に在る。
【二四】教坊　唐書百官志に、京都置二左右教坊一、掌二俳優雜伎一、以二中官一爲二教坊使一とある。音樂遊藝を演ずる處。
【二五】秋娘　金陵の名妓。李錡の妾となり、後宮中に入る。
【二六】五陵　長安の郊外の漢の天子

今年歡笑復明年。
秋月春風等閑度。
弟走從軍阿姨死。
暮去朝來顏色故。
門前冷落鞍馬稀。
老大嫁作商人婦。
商人重利輕別離。
前月浮梁買茶去。
去來江口守空船。
遶船明月江水寒。
夜深忽夢少年事。
夢啼粧淚紅闌干。
我聞琵琶已嘆息。
又聞此語重唧唧。

今年歡笑復明年、
秋月春風等閑に度る。
弟は走りて軍に從ひ阿姨は死し、
暮去り朝來りて顏色故り、
門前冷落鞍馬稀なり、
老大嫁して商人の婦と成る。
商人は利を重んじて別離を輕んず、
前月浮梁に茶を買ひ去る。
江口に去來して空船を守る、
船を遶る明月江水寒し。
夜深けて忽ち夢む少年の事、
夢に啼けば粧淚紅闌干。
我琵琶を聞いて已に嘆息し、
又此語を聞いて重ねて唧唧たり。

の陵墓のある處。卽ち高祖の長陵・惠帝の安陵・景帝の陽陵・武帝の茂陵・昭帝の平陵。この邊は富豪の住宅が多い。故に富豪の子弟を五陵年少といふ。纏頭とは妓を聘して祝儀をやること。通鑑註に、舊俗賞歌舞人以錦綵置之頭上。謂之錦纏頭とあ。

【二七】紅綃　紅の絹。

【二八】鈿頭銀篦　靑貝のあたまの鎭の小櫛。擊節とは歌の拍子を取ること。

【二九】血色羅裙　眞紅の薄絹の著物。

【三〇】等閑　なほざりに。氣に留めずに。

【三一】阿姨　母の姉妹をいふ。阿は意味なし。

【三二】顏色故　容貌がふけてくる。

【三三】冷落　さびれ果てる。

【三四】浮梁　茶の產地。今の江西省饒州府浮梁縣。

【三五】闌干　淚の流れる貌。

【三六】唧唧　嘆息の聲。

同是天涯淪落人。
相逢何必曾相識。
我從去年辭帝京。
謫居臥病潯陽城。
潯陽地僻無音樂。
終歲不聞絲竹聲。
住近湓江地低濕。
黃蘆苦竹遶宅生。
其間旦暮聞何物。
杜鵑啼血猿哀鳴。
春江花朝秋月夜。
往往取酒還獨傾。
豈無山歌與村笛。
嘔啞嘲哳難爲聽。

同じく是れ天涯淪落の人、
相逢ふ何ぞ必ずしも曾て相識らん。
我去年帝京を辭せしより、
謫居病に臥す潯陽城。
潯陽地僻にして音樂無し、
終歲聞かず絲竹の聲。
住湓江に近うして地低濕、
黃蘆苦竹宅を遶つて生ず。
其間旦暮何物をか聞く、
杜鵑血に啼いて猿哀鳴す。
春江の花朝秋月の夜、
往往酒を取りて還獨り傾く。
豈山歌と村笛と無からんや、
嘔啞嘲哳聽を爲し難し。

【三七】苦竹　竹の一種。

【三八】嘔啞嘲哳　聲調の粗俗なる貌。

今夜聞君琵琶語。(三九)
如聽仙樂耳暫明。
莫辭更坐彈一曲。
爲君翻作琵琶行。(四〇)
感我此言良久立。
却坐促絃絃轉急。(四一)
凄凄不似向前聲。(四二)
滿座重聞皆掩泣。
座中泣下誰最多。
江州司馬青衫濕。(四三)

今夜君が琵琶の語を聞き、
仙樂を聽くが如く耳暫く明かなり。
辭する莫れ更に坐して一曲を彈せよ、
君が爲翻して琵琶行を作らん。
我が此言に感じて良久しく立ち、
却坐絃を促がして絃轉急なり。
凄凄として向前の聲に似ず、
滿座重ねて聞いて皆泣を掩ふ。
座中泣下る誰か最も多き、
江州の司馬青衫濕ふ。

【題義】引といふも行といふも格別違はないのであるが、序にも詩にも琵琶行とあるから、もとは琵琶行と題したのではあるまいかと思はれる。併し長慶集にも全唐詩にも琵琶引と題してある。

【詩意】潯陽江の頭に夜客を送れば、楓の葉や荻の花に秋風が淋しく吹いてゐた。主人も客も俱に馬から下りて船に乘り、別れの杯を擧げようとしたが、興を添へる音樂もないので、醉うても歡樂を盡すことが出來ず、悲を含んで相別れようとした。時に江水は茫茫として月を浸せる中から、忽ち琵琶の聲が聞えた。其聲に聽き惚れて主人は還るのを忘れ、客は出發を忘れた。(以上第一段、琵琶を聞く由來を敍した。)聲をしるべにあてもなく「彈ずる者は誰ぞ」と問へば、琵琶の聲がはたと止んで頓には返事もしなかつたので、こちらの船を漕ぎ寄せて琵琶の女を迎へ取り、酒を添へ燈を同らして重ねて宴を開かうとすれば、幾度となく呼んだ後やつと出ては來たけれども、猶琵琶で半顏を隱してゐる。やがて軸を轉じて絃を引き締め、絃を撥ふこと二聲三聲、唯調子を合せるだけでまだ曲調を成さないけれども、既に十分の情が籠つてゐる。尋いで四絃を抑へて低く彈ずれば一聲一聲に深い思が含まれ、平生の不平を訴へるやうであり、目を閉ぢ手に任せて續續と搔き鳴らせば、心中の限なき思を說き盡すものの如くである。輕く抑へ慢く撚り聲を消しては又張り上げ、種種の祕法を盡して初には霓裳の曲を彈じ後には六么の曲を彈じた。大絃の音は嘈嘈として風雨の俄に至れるが如く、小絃の音は切切として私語するが如く、嘈嘈たる大絃と切切たる小絃とをこきまぜて雜へ彈ずれば、宛も大きな珠や小さな珠が一時に玉の盆の上に迸り落つるが如き聲を發し、或は玉をころがすやうな鶯の聲が花下に滑に流るるが如く、或は岩に堰かれて咽ぶ泉が忽ち早瀨を下る聲の如くである。やがて泉の流が澁滯したやうに絃聲が暫くとぎれる。其時には別に幽愁暗恨が生じて、聲のある時よりも一層人の感情をそそるくらゐだ。忽ち又聲を發して其勢の急速なことは銀の瓶が破れて水汁の迸るが如く、騎馬武者が刀や槍を鳴らして飛出したやうである。やがて曲も終に近づき撥を執つて

【三九】琵琶語　琵琶の音。語は鶯語・鳳語などの語である。

【四〇】翻　琵琶の曲調を詩に寫すこと。

【四一】却坐　退いて坐す。

【四二】凄凄　淋しき貌。向前はさきほど。向は嚮なり。

【四三】青衫　司馬の服。

胸のあたりを一文字に絃を撥へば、四本の絃が一時に聲を發して帛を裂くが如く、あたり近所の船の客は唯悄然と聞き惚れて物をも言はず。ただ江水の中に明月が白くうつつてゐるのを見るのみであつた。（以上第二段、琵琶を聽いたことを敍した。）一曲を彈じ終つて感慨深さうに撥を放して絃の間に挿み、衣紋をつくろひて容儀を整へて起ちあがり、身の上話しをしていふやう、「妾ももとは都の生れで蝦蟇陵下に住んでゐました。十三の時早くも琵琶の上手ともてはやされ、敎坊の第一部に名籍を揭げて倡女となり、一曲を彈じ終ればいつも師匠からほめそやされ、化粧を施せばいつも朋輩から妬まれるほど藝も達者で顏もよかつたものであります。されば富豪の子弟が爭つて贔屓し、一曲を奏すれば纏頭として貫ふ紅綃が殆ど其數を知らないほどの全盛ぶりでありました。されば物の貴いことを忘れて、鈿頭の銀篦は歌の拍子を取る爲に折れ、眞紅の羅裙は酒を翻して汚れても惜しいとも思はず。年から年を歡笑の間に送り、ついうかうかと歲月を過ごしました。その中に戰爭が起つて弟は出陣、阿姨は續いて病死、我が身は日增に老けて舊の色香が失せますると、金鞍白馬に跨つて我が家を訪ふ貴公子も稀になり、やむなく年取つてから商人の妻になりましたが、商人は金より外に考はなく、利益の前には妻と離れることなどは何とも思はず、夫は先月浮梁縣に茶を買出しに出掛けて今以て歸らず、爾來妾一人で此溢浦口上の空船を守つて居りますが、明月は船を繞りて江水は寒く、夜深けて若い時の榮華を夢み、夢の中に化粧を施した頰を傳つて紅の涙が流れまする。」（以上第三段、女子の身の上話を敍した。）さて自分（樂天）は琵琶の音を聞いて已に嘆息したが、今又身の上話を聞いて更に嘆聲を漏らした。「自分も御身と同じく天涯に淪落してゐる者であるが、見ず識らずの二人が此處で逢ふのも不思議な緣ぢや。自分は去年都を去つてから此潯陽に謫居して病に臥す身である。邊鄙な土地で音樂などもなく一年中管絃の音などは聞かれない。家は溢江の近くの低濕の地に在つて、家のまはりには黃蘆や苦竹が生ひ茂り、聞くものとては杜鵑の血に啼く聲か猿の哀鳴ぐらゐのものである。春の花、秋の月には酒を取りて獨り傾けるが、山歌や村笛を聞くのみで、騷騷しいばかりで聽くに堪へない。所が今夜は御身の琵琶の聲を聞き、天上の仙樂を聞いたやうに耳が爽になつた。どうか辭退せずにもう一曲彈いてはくれまいか。その代り自分も琵琶行の詩を作つて御身に報いるであらう」と言つた。（以上第四段、樂天自ら悲境を述べた。）吾が此言に感じて女は良久しく立つてゐたが、退き坐して再び絃を搔き鳴らすに、其音調が急速で物淋しき感を起させること前曲の比ではなかつた。一座の者が重ねて聞いて皆涙を流した。其中で誰が一番涙を流したかといへば、江州司馬たる自分が隨一で、靑衫の濡れるのを覺えなかつた。（以上第五段、餘波。）

【餘論】唐宋詩醇に云はく、「白公遷謫の感、商婦を借りて以て之を發す。同病相憐むの意あり。比興相緯し寄託遙深なり。其意は微にして以て顯、其音は哀んで以て思ひ、其辭は麗にして以て則。十九首（古詩十九首）に云はく、淸商隨レ風發、中曲正徘徊、一彈再三歎、慷慨有二餘哀一と。及び杜甫の觀三公孫大娘弟子舞二劍器一行、此篇と同じく千秋の絕調たり。必ずしも古近前後を以て分たざるなり」と。林雲銘曰はく、「商婦固より奇なり。恰も樂天が遷謫に感ずるあるに遇ひ、此妙篇を成し能く千古才を

負ひ末路蹭蹬する者をして之を讀み一齊に涕下らしむる所以なり。篇末の翻作三琵琶行一の翻の字は卽ち翻譯の翻にして、其聲を譜して以て文となすなり。首より尾に至るまで句句當に琵琶の聲と作して之を讀むべし。其中勻適の處あり、參差の處あり、遲くして輕きあり、速にして連るあり、微にして斷ゆるあり、壯にして止るあり、矜張あり凄咽あり欣幸あり急促あり。皆當に其意を會して以て聲と爲すべし。末に曼聲を以て之を結ぶ。方に此文の三昧を得たり」と。

簡簡吟

蘇家小女名簡簡。
芙蓉花(一)腮柳葉眼。
十一把鏡學點(二)粧。
十二抽針能綉(三)裳。
十三行(四)坐事調品。
不肯迷(五)頭白地藏。
玲瓏(六)雲髻生花樣。
飄颻(七)風袖薔薇香。

簡簡吟

蘇家の小女簡簡と名く、
芙蓉の花腮柳葉の眼。
十一にして鏡を把つて點粧を學び、
十二にして針を抽いて能く綉裳す。
十三にして行坐調品を事とす。
肯て迷頭白地に藏れず。
玲瓏たる雲髻生花の樣、
飄颻たる風袖薔薇の香。

【字解】【一】花腮　花の如く美しき顏。腮はアゴなり。柳葉眼は細長き目。
【二】點粧　化粧。
【三】綉裳　刺繍。
【四】行坐　あるいたり、すわつたりすること。調品は品行を調ふること、行儀作法を學ぶこと。
【五】迷頭白地藏　捉迷藏とて我邦のカクレンボといふ遊戯ならん。
【六】玲瓏　照り輝く貌。雲髻は雲の如き黑髮。生花は生きた花。

殊(八)姿異態不可狀。
忽忽(九)轉動如有光。
二月繁霜殺桃李。
明年欲嫁今年死。
丈人(一〇)阿母勿悲啼。
此女不是凡夫妻。
恐是天仙謫人世。
只合人間十三歲。
大都好物不堅牢。
綵(一一)雲易散琉璃脆。

殊姿異態狀すべからず、
忽忽として轉動すれば光有るが如し。
二月の繁霜桃李を殺す、
明年嫁せんと欲するに今年死せり。
丈人阿母悲啼する勿れ、
此女は是れ凡夫の妻ならず。
恐らくは是れ天仙の人世に謫せられしならん、
只合に人間十三歲なるべし。
大都好物は堅牢ならず、
綵雲は散り易く琉璃は脆し。

【七】飄颻　風に飄る貌。
【八】殊姿異態　美しき姿。
【九】忽忽　疾速の貌。
【一〇】丈人阿母　父母なり。
【一一】綵雲　美しい雲。琉璃は美しき鑛物の名。

【題義】簡簡と名づくる少女の夭死したのを悲んでゐる兩親を慰めた詩である。
【詩意】蘇氏の少女簡簡は美しい容貌であつて、十一の時に鏡を持つて化粧することを學び、十二の時に針を持つて刺繍することを覺え、十三の時には行儀作法を習つて、外の少女のやうにかくれんぼなどばかりして戲れてはゐなかつた。段段年を取るにつれて美しさが加はり、綠の黑髮は雲の如く、

其姿は生きた花の如く、袖を飄せば薔薇のやうな香を漂はし、身をかはせば光を發するやうであつた。惜しいかな二月の霜が桃や李の花を枯らすやうに、來年は人に嫁するといふ時に夭死してしまつた。兩親の身になれば誠に殘念であらうが、悲み泣かぬがよい。此女は凡夫の妻たるべき身ではない。恐らく天女があまくだつたものであらう。だから此世には、十三年限り居るべき運命であつたのであらう。すべて結構なものは丈夫でないものだ。綵雲は散じ易く琉璃は脆い。人も亦然りである。

花非花　花非花

花非レ花。霧非レ霧。
夜半來。天明去。
來如二春夢一幾多時。
去似二朝雲一無二覓處一。

花か花に非ず、霧か霧に非ず。
夜半に來り、天明に去る。
來ること春夢の如く幾多の時ぞ。
去ること朝雲に似て覓むる處無し。

【題義】夜の霧の樣を詠じた詩である。

【詩意】花かと見れば花でもなく、霧かと思へば霧でもない。夜半に來て天明に去る。その來る時は春の夢の樣に忽ち到り、去る時は朝雲のやうに跡もなく消えて去る。

醉後狂言。酬二贈蕭・殷二協律一　醉後に狂言し、蕭・殷二協律に酬贈す

餘杭邑客多二羈貧一。
其間甚者蕭與殷。
天寒身上猶衣葛。
日高甑中未レ拂レ塵。
江城山寺十一月。
北風吹レ沙雪紛紛。
賓客不レ見二綈(三)袍惠一。
黎庶(四)未レ沾二襦袴恩一。
此時太守(五)自慙愧。
重衣複衾有二餘溫一。
因命染人與二針女一。
先製二兩裘一贈二二君一。
吳綿細軟桂布密。

餘杭の邑客羈貧多し、
其間甚しき者は蕭と殷と。
天寒うして身上猶葛を衣、
日高うして甑中未だ塵を拂はず。
江城山寺十一月、
北風沙を吹いて雪紛紛。
賓客綈袍の惠を見ず、
黎庶未だ襦袴の恩に沾はず。
此時太守自ら慙愧す、
重衣複衾餘溫あり。
因つて染人と針女とに命じ、
先づ兩裘を製して二君に贈る。
吳綿は細軟にして桂布は密なり、

【字解】【一】協律　協律郎、官名。
【二】餘杭　縣名、浙江省杭州府に屬す。羈貧は羈旅して貧窮すること
【三】綈袍　わたいれ。
【四】黎庶　庶民。
【五】太守　樂天自ら謂ふ、時に樂天は杭州刺史であつた。

柔如狐腋白似雲。
勞將詩書投贈我。
如此小惠何足論。
我有大裘君未見。
寬廣和暖如陽春。
此裘非繒亦非纊。
裁以法度絜以仁。
刀尺鈍拙製未畢。
出亦不獨裹一身。
若令在郡得五考。
與君展覆杭州人。

柔なること狐腋の如く白きこと雲に似たり。
勞ふに詩書を將てし我に投贈す、
此の如き小惠何ぞ論ずるに足らん。
我に大裘あり君未だ見ず、
寬廣和暖陽春の如し。
此裘は繒に非ず亦纊に非ず、
裁するに法度を以てし絜は仁を以てす。
刀尺鈍拙にして製未だ畢らず、
出づれば亦獨一身を裹むのみならず。
若し郡に在りて五考を得しめば、
君と展覆せん杭州の人を。

【題義】醉後に大言壯語して以て蕭・殷の二協律郎に酬い贈つた詩である。

【詩意】この餘杭縣に來てゐる客は多くは貧窮であるが、蕭・殷二君は殊に甚だしく、寒空に猶ほ葛衣を纏ひ、日が高く升るまで飯も炊くことが出來ない。時正に北風が雪を吹き捲く十一月であるが、餘杭縣では賓客も絺袍の贈與に預らず、庶民も衣袴の惠に浴しない。此時杭州太守は自分獨り重衣複衾の暖を貪ることを愧ぢ、染人と針女とに命じて兩裘を製せしめて二君に贈つた。吳綿と桂布とで製したものではあるが、柔かなことは狐腋の如く白いことは雲のやうである。所が二君は詩を作つて我に謝恩の意を表した。併しこんな小惠は敢て言ふに足る程のものではない、自分は別に大裘を持つてゐる。それは廣くて暖かなこと陽春のやうである。此裘は絹や綿で作つたのではなく、法度を以て裁し仁を以て綿としたものだ。その製法は拙であるが一たび出せば唯一身を蔽ふのみならず、我をして杭州刺史たること五年ならしめば、終には杭州の人民全部を覆ふに足るであらう。

【七】繒　きぬ。纊は、わた。
【八】絜　綿。
【九】五考　五回考績すること。五年勤續する意。
【一〇】展覆　のべおほふ。

夜哭李夷道

夜李夷道を哭す

逝者絕影響。
空庭朝復昏。
家人哀臨畢。
夜鏁壽堂門。
無妻無子何人葬。
空見銘旌向月翻。

逝く者は影響を絕す、
空庭朝復昏。
家人哀臨し畢り、
夜壽堂の門を鏁す。
妻無く子無くして何人か葬る、
空しく銘旌の月に向つて翻るを見る。

【一】哀臨　靈屋に哭泣すること。
【二】壽堂　靈屋なり。
【三】銘旌　葬式の時の旗。

【題義】夜李夷道の死を弔つた詩である。

【詩意】死んだ人は影も形もなく、明けても暮れても唯空庭を存するのみである。家人は靈屋に哭し畢り、夜になつたので門を閉ぢてしまつた。彼は妻も子もないのに誰が葬つたのであらう。見れば銘旌が月光を受けて淋しく飜つてゐる。

【餘論】通行本には此詩の前に醉歌示二商玲瓏一と題する詩を載せてあるが、それは長慶三年の作で後集に入るべきものである。又十三卷から二十卷に至るまで、通行本では律詩としてあるが、中に古調歌行雜體の誤り收められてゐるのがある。今其等の詩を汪本に據つて此に編入することにした。此詩より以下は通行本の十三卷の內にあるもので、未だ擧に應せざる時の作である。

病中作　時年十八

久爲二勞生事一。不レ學二攝生道一。久しく勞生の事を爲し、攝生の道を學ばず。
年少已多病。此身豈堪レ老。年少うして已に多病、此身豈に老に堪へんや。

【字解】【一】勞生　生を勞する。

【題義】病中に作つた詩である。

【詩意】久しく生を勞することばかりして攝生の法を講せず、少いうちから多病であるから、到底老年になるまでは生きられまい。

秋江晚泊

扁舟泊二雲島一。倚レ棹念二鄉國一。扁舟雲島に泊し、棹に倚りて鄉國を念ふ。
四望不レ見レ人。煙江澹二秋色一。四望人を見ず、煙江秋色澹し。
客心貧易レ動。日入愁未レ息。客心貧しうして動き易し、日入れども愁未だ息まず。

【字解】【一】扁舟　小舟。【二】客心　旅愁なり。

【題義】秋江に夜舟を泊した景況を述べた詩である。

【詩意】雲の棚引いてゐる小島に舟を泊し、棹によりかかつて遙かに故鄉を思うた。何處を見ても人影は見えず、ただ煙波蒼茫として秋氣の淡淡たるを見るばかりだ。懷の金も乏しいので旅愁が殊に深く、日は暮れても愁は息まない。

寒食臥レ病

病逢二佳節一。長歎息。病みて佳節に逢うて長く歎息す、

【字解】【一】寒食　冬至から百五日頃の氣節をいふ、三日間火を禁ず、故に寒食といふ。【二】佳節

春雨濛濛榆柳色。　春雨濛濛たり榆柳の色。
(四)羸坐全非舊日容。　羸坐全く舊日の容に非ず、
(五)杖行半是他人力。　杖行半是れ他人の力。
(六)諠諠里巷(七)蹋青歸。　諠諠たる里巷青を蹋んで歸る、
笑閉柴門度寒食。　笑つて柴門を閉ぢて寒食を度る。

【題義】寒食の頃に病臥してゐたことを述べた詩である。

【詩意】寒食の佳節に折惡しくも病に臥し、獨り長歎してゐる。室外を見れば春雨が煙のやうに榆柳の緑に降りそそいでゐる。痩せ衰へて坐する樣は舊の姿とは思はれず、纔に他人の力を借り杖にすがつて歩くのみである。門外には野邊を散歩して歸る人の談笑の聲が聞えるが、自分は門を閉ぢて空しく寒食を度るのは、自ら苦笑するの外はない。

もの日。祝日。寒食を指す。【三】榆柳　木の名。にれ、やなぎ。【四】羸坐　痩せ衰へて坐す。【五】杖行　杖をついて行く。【六】諠諠　かまびすしき貌。【七】蹋青　春の頃の野邊のそぞろあるき。

(一)寒食月夜。　寒食月夜

風香露重梨花濕。　風香しく露重うして梨花濕ふ、
(二)草舍無燈愁未入。　草舍燈無くして愁未だ入らず。

【字解】【一】寒食　前の詩に見ゆ。【二】草舍　茅屋。

南隣北里歌吹時。　南隣北里歌吹の時、
獨倚柴門月中立。　獨り柴門に倚つて月中に立つ。

【題義】寒食の頃、月夜靜寂の樣を述べた詩である。

【詩意】風は香しく露は繁く梨の花が濕ひ、吾が茅屋の中には燈もないのに月光はまださし込まない。隣近所では歌ふやら吹くやら大騒であるが、自分は獨り淋しく月光を浴びて門外に立つのみだ。

長安早春旅懷　長安早春旅懷

(一)軒車歌吹喧都邑。　軒車歌吹都邑に喧し、
中有(二)一人向隅立。　中に一人の隅に向つて立つあり。
夜深明月卷簾愁。　夜深けて明月簾を卷いて愁へ、
日暮青山望鄉泣。　日暮れて青山鄉を望みて泣く。
風吹新緑草芽拆。　風新緑を吹いて草芽拆け、
雨灑(三)輕黃柳條濕。　雨輕黃に灑いで柳條濕ふ。
此生知負少年春。　此生少年の春に負くを知る、

【字解】【一】軒車　馬車。都邑は長安を指す。【二】一人　白樂天自ら謂ふ。【三】輕黃　草芽の色。

不レ展二愁眉一欲二三十一。愁眉を展べず三十ならんと欲す。

【題義】長安に客寓し、早春に逢うて感懷を述べた詩である。

【詩意】長安の都には馬車の行きかふ音、歌舞音曲の聲が騷がしいが、我は獨り世間を外にして淋しく暮してゐる。夜深に簾を揭げ明月を仰いでは愁へ、日暮に鄕を思ひ青山を望んでは泣いてゐる。今や春が又巡り來て、風に吹かれて草木の芽が萌え、雨が新芽に灑いで柳の絲もぬれてゐる。自分は空しく少年の春に負き、愁眉を展べる間もなく、早くも三十にならんとする。

晚秋夜　晚秋の夜

碧空溶溶月華靜。碧空溶溶として月華靜かなり、
月裏愁人弔二孤影一。月裏愁人孤影を弔ふ。
花開殘菊傍二疎籬一。花開きて殘菊疎籬に傍ひ、
葉下衰桐落二寒井一。葉下ちて衰桐寒井に落つ。
塞鴻飛急覺二秋盡一。塞鴻飛ぶこと急にして秋の盡るを覺え、
鄰鷄鳴遲知二夜永一。鄰鷄鳴くこと遲くして夜の永きを知る。
凝レ情不レ語空所レ思。凝して語らず空しく思ふ所。

【字解】【一】溶溶　深廣の貌。月華は月。
【二】月裏　月光の中に立つこと。愁人は樂天自ら謂ふ。
【三】塞鴻　北方の邊塞から飛んで來る鴈。

風吹二白露一衣裳冷。風白露を吹いて衣裳冷かなり。

【題義】晚秋の夜の景況を述べた詩である。

【詩意】青空がひろびろとして月が冴えてゐる中に、其光を浴びて愁人が淋しく立つてゐる。あたりを見れば殘菊の花が籬の傍に咲き、梧桐の葉が井戸の邊に落ちる。北から飛び來る鴈の急なるを見ては秋の盡きなんとするを覺り、雞の鳴くのが遲いので夜の永いことが知られる。獨り物も言はずに感慨に耽つてゐると、風が白露を吹いて著物がつめたくなつた。

【餘論】此詩から以下は通行本の十四卷の內に收めてあるものである。

和錢員外早冬翫二禁中新菊一

錢員外が早冬禁中の新菊を翫ぶに和す

禁署寒氣遲。孟冬菊初拆。禁署寒氣遲く、孟冬菊初めて拆く。
新黃間二繁綠一。爛若二金照碧。新黃繁綠に間り、爛として金の碧を照すが若し。
仙郎小隱日。心似二陶彭澤一。仙郎小隱の日、心は陶彭澤に似たり。
秋憐二潭上看一。日慣二籬邊摘一。秋は潭上に看るを憐み、日に籬邊に摘むに慣へり。
今來此地賞。野意潛自適。今此地に來りて賞す、野意潛に自適す。

金馬門內花。玉山峯下客。
寒芳引清句。吟翫煙景夕。
賜酒色偏宜。握蘭香不敵。
凄凄百卉死。歲晚氷霜積。
唯有此花開。殷勤助君惜。

【字解】〔一〕禁署　禁裏なり。〔二〕孟冬　初冬。〔三〕仙郎　翰林學士。錢員外は時に翰林學士であつた。小隱は未だ出仕せざる時をいふ。王康琚の詩に小隱隱二陵藪一、大隱隱二朝市一。〔四〕陶彭澤　陶淵明。彭澤縣令となりし故かくいふ。〔五〕金馬門　宮門の名。漢の武帝學士をして金馬門に待詔せしむ。〔六〕玉山　藍田山。山に美玉を產するを以てなり。〔七〕握レ蘭　宮中に仕ふること。〔八〕凄凄　寒き貌。百卉は百草。〔九〕殷勤　ねんごろに。惜は愛憐なり。

【題義】錢員外（前に見ゆ）が早冬禁中に在りて新菊の花を賞した詩に和したものである。

【詩意】禁裏は寒氣の催すことが遲いので冬になつて菊の花が開いた。黃色の花が綠の葉の間に錯り黃金の碧玉と相映ずるやうである。君の未だ出仕せぬ頃は陶淵明と其心を同じうし、秋は潭上に此花を愛翫し、日に籬邊に此花を採つたが、今は禁中に在りて其心を樂ませてゐる。さて玉山峰下の人が金馬門內の花に對し、清新な詩句を吐き夕方まで吟翫し、美酒を賜はりて其色殊に宜しく、蘭を握りて香氣敵する物もない。今や冬のことで百草も枯れ氷雪の積む時に當り、獨り菊の花が盛に開いて君が愛憐の情を助けてゐる。

贈別宣上人

上人處二世界一。清淨何所レ似。
似二彼白蓮花一。在レ水不レ著レ水。
性眞悟二泡幻一。行潔離二塵滓一。
修レ道來幾時。身心俱到レ此。
嗟予牽二世網一。不レ得二長依止一。
離念與二碧雲一。秋來朝夕起。

【字解】〔一〕世界　俗世間。〔二〕泡幻　泡沫夢幻。〔三〕塵滓　世間の穢。〔四〕世網　世俗の煩累。〔五〕離念　別れ去らうとする心。

【題義】宣上人に別れて去る時贈つた詩である。

【詩意】宣上人の此世に居るのは清淨無垢で、白蓮の花が泥に在りて泥に染まらないのと同じである。性質天眞を失はず人世の泡沫夢幻に等しきを悟り、其行が潔白で少しも世の穢を受けない。道を修めてから幾年たつて、身心の修養が今日の境地まで進んだのであらう。愧かしいことに自分は世の煩累に牽かれて、長く上人の許に止まる能はず。この秋より以來別れ去らんとする念が碧雲と俱に朝に夕べに起る。

夢遊春の詩に和す一百韻　幷に序

和夢遊春詩一百韻　幷序

微之(一)既到江陵。又以夢遊春詩七十韻寄予。且題其序曰。斯言也。不可使不知吾者知。知吾者亦不可使不知。樂天知吾也。吾不敢不使吾子知。予辱斯言。三復其旨。大抵悔既往而悟將來也。然予以爲苟不悔不寤則已。若悔於此。則宜悟於彼也。反於彼而悟於妄。則宜歸於眞也。況與足下。外服儒風。內宗梵行者。有日矣。而今而後非覺路之返也。非空(二)門之歸也。將安反乎。將安歸乎。今所和者。其章旨卒歸於此。夫感不甚則悔不熟。感不至則悟不深。故廣足下七十韻爲一百韻。重爲足下陳夢遊之中所以甚感者。敍婚仕之際所以至感者。欲使曲盡其妄。周知其非。然後返乎眞。歸乎實。亦猶法華經序火宅(三)偈(四)化城。維摩經入姪舍過酒肆之義也。微之微之。予斯文也。尤不可使不知吾者知。幸藏之云爾。

【訓讀】微之既に江陵に到り、又夢遊春の詩七十韻を以て予に寄す。且つ其序を題して曰はく、斯言や、吾を知らざる者をして知らしむべからず。吾を知る者には亦知らざらしむべからず。樂天は吾を知れり。吾敢て吾子をして知らしめずんばあらずと。予斯言を辱なうし、三たび其旨を復す。大抵既往を悔いて將來を悟るなり。然れども予以爲らく、苟くも悔いず寤らずんば則ち已まん、若し此に悔ゆるときは則ち宜しく彼に悟るべきなり。彼に反して妄を悟るときは、則ち宜しく眞に歸すべきなり。況んや足下と外には儒風を服し內には梵行を宗とする者日あり。而して今より後覺路にも返るにあらず、空門にも歸するにあらずんば、將た安くにか反らんや、將た安くにか歸せんや。今和する所は、其章旨卒に此に歸せり。夫れ感甚だしからざるときは、則ち悔熟せず。感至らざるときは、則ち悟深からず。故に足下の七十韻を廣めて一百韻と爲し、重ねて足下の爲に夢遊の中に甚だ感ずる所以のものを陳べ、婚仕の際至つて感ずる所以のものを敍するは、曲に其妄を盡し、周く其非を知つて、然して後に眞に返り實に歸せしめんと欲す。亦猶法華經の火宅を序し化城を偈し、維摩經の姪舍に入り酒肆を過ぎし義のごとし。微之よ微之よ、予が斯文や、尤も吾を知らざる者をして知らしむべからず。幸に之を藏せと云爾。

【字解】【一】微之　元稹、字は微之。元和五年江陵士曹に貶せらる。【二】空門　佛門。【三】火宅　佛家にて煩惱世界に喩ふ。法華經譬喩品に出づ。【四】化城　法華經化城喩品に出づ。徐陵の文に、無色之外、方爲化城、非想之中、猶稱火宅とある。【五】酒肆　酒を賣る家。

昔君夢遊春。夢遊仙山曲。　昔君夢に春に遊び、夢に仙山の曲に遊ぶ。
恍若有所遇。似愜平生欲。　恍として遇ふ所あるが若く、平生の欲に愜へるに似たり。

因尋菖蒲水。漸入桃花谷。
到一紅樓家。愛之看不足。
池流渡清泚。草嫩蹋綠蓐。
門柳闇全低。簷櫻紅半熟。
轉行深深院。過盡重重屋。
烏龍臥不驚。青鳥飛相逐。
漸聞玉珮響。始辨珠履躅。
遙見窓下人。娉婷十五六。
霞光抱明月。蓮豔開初旭。
縹緲雲雨仙。氛氳蘭麝馥。
風流薄梳洗。時世寬粧束。
袖輭異文綾。裾輕單絲穀。
裙腰銀線壓。梳掌金筐蹙。
帶纈紫蒲萄。袴花紅石竹。

因て菖蒲の水を尋ね、漸く桃花の谷に入る。
一紅樓の家に到り、之を愛して看れども足かず。
池流れて清泚を渡り、草嫩かにして綠蓐を蹋む。
門の柳闇うして全く低れ、簷の櫻紅にして半熟せり。
深深たる院を轉行し、重重たる屋を過盡す。
烏龍は臥して驚かず、青鳥は飛びて相逐ふ。
漸く玉珮の響を聞き、始めて珠履の躅を辨ふ。
遙に窓下の人を見れば、娉婷十五六。
霞光明月を抱き、蓮豔初旭に開く。
縹緲たり雲雨の仙、氛氳たり蘭麝の馥。
風流梳洗を薄うし、時世粧束を寬にす。
袖は輭かなり異文の綾、裾は輕し單絲の穀。
裙腰は銀線壓し、梳掌は金筐蹙る。
帶の纈は紫蒲萄、袴の花は紅石竹。

凝情都未語。付意微相矚。
眉斂遠山青。鬟低片雲綠。
帳牽翡翠帶。被解鴛鴦襆。
秀色似堪飡。穠華如可掬。
半卷錦頭席。斜鋪繡腰褥。
朱脣素指勻。粉汗紅綿撲。
心驚睡易覺。夢斷魂難續。
籠委獨棲禽。劍分連理木。
存誠期有感。誓志貞無黷。
京洛八九春。未曾花裏宿。
壯年徒自棄。佳會應無復。
鸞歌不重聞。鳳兆從茲卜。
韋門女清貴。裴氏甥賢淑。
羅扇夾花燈。金鞍攢繡轂。

情を凝して都て未だ語らず、意を付けて微に相矚る。
眉は遠山の青を斂め、鬟は片雲の綠を低る。
帳は翡翠の帶を牽き、被は鴛鴦の襆を解く。
秀色は飡するに堪ふるが似く、穠華は掬すべきが如し。
半錦頭の席を卷き、斜に繡腰の褥を鋪く。
朱脣素指勻ひ、粉汗紅綿撲つ。
心驚きて睡覺め易く、夢斷えて魂續ぎ難し。
籠は獨棲の禽を委ね、劍は連理の木を分つ。
誠を存して期感あり、志に誓つて貞黷るる無し。
京洛八九の春、未だ曾て花裏に宿せず。
壯年徒に自ら棄つ、佳會應に復すること無かるべし。
鸞歌重ねて聞かず、鳳兆茲よりトふ。
韋門女清貴なり、裴氏甥賢淑なり。
羅扇は花燈を夾み、金鞍は繡轂を攢む。

既傾南國貌。遂坦東床腹。
既に南國の貌を傾け、遂に東床の腹を坦かにす。

劉阮心漸忘。潘楊意方睦。
劉阮心漸く忘れ、潘楊意方に睦じ。

新修履信第。初食尚書祿。
新たに履信の第を修め、初めて尚書の祿を食む。

九醞備聖賢。八珍窮水陸。
九醞は聖賢を備へ、八珍は水陸を窮む。

秦家重蕭史。彥輔憐衞叔。
秦家蕭史を重んじ、彥輔衞叔を憐む。

朝饌饋獨盤。夜醪傾百斛。
朝饌獨盤を饋り、夜醪百斛を傾く。

親賓盛輝赫。妓樂紛曄煜。
親賓盛にして輝赫し、妓樂紛として曄煜たり。

宿醉纔解醒。朝歡俄枕麴。
宿醉纔かに醒を解き、朝歡俄に麴を枕にす。

飲過君子爭。令甚將軍酷。
飲は君子の爭ひに過ぎ、令は將軍の酷よりも甚だし。

酩酊歌鷓鴣。顛狂舞鴝鵒。
酩酊して鷓鴣を歌ひ、顛狂して鴝鵒を舞ふ。

月流春夜短。日下秋天速。
月流れて春夜短く、日下りて秋天速なり。

謝傅隙過駒。蕭娘風送燭。
謝傅隙過の駒、蕭娘風送の燭。

全凋葬花折。半死梧桐禿。
全く凋みて葬花折れ、半死れて梧桐禿なり。

闇鏡對孤鸞。哀弦留寡鵠。
闇鏡孤鸞に對ひ、哀弦は寡鵠を留む。

凄凄隔幽顯。冉冉移寒燠。
凄凄として幽顯を隔て、冉冉として寒燠を移す。

萬事此時休。百身何處贖。
萬事此時休みぬ、百身何れの處にか贖はん。

提攜小兒女。將領舊姻族。
小兒女を提攜し、將に舊姻族を領せんとす。

再入朱門行。一傍青樓哭。
再び朱門に入りて行き、一たび青樓に傍うて哭す。

櫪空無廐馬。水涸失池鶩。
櫪空しうして廐馬なく、水涸れて池鶩を失ふ。

搖落廢井梧。荒涼故籬菊。
搖落たる廢井の梧、荒涼たる故籬の菊。

莓苔上几閣。塵土生琴筑。
莓苔几閣に上り、塵土琴筑に生ず。

舞榭綴蠨蛸。歌梁聚蝙蝠。
舞榭は蠨蛸綴り、歌梁は蝙蝠聚まる。

嫁分紅粉妾。賣散蒼頭僕。
嫁して紅粉の妾を分ち、賣りて蒼頭の僕を散ず。

門客思徬徨。家人泣呼噢。
門客思うて徬徨し、家人泣いて呼噢す。

心期正蕭索。宦序仍拘跼。
心期正に蕭索たり、宦序仍ほ拘跼す。

懷策入崤函。驅車辭郟鄏。
策を懷いて崤函に入り、車を驅りて郟鄏を辭す。

逢時念既濟。聚學思大畜。
時に逢うて既濟を念ひ、學を聚めて大畜を思ふ。

端詳筮仕著。磨拭穿楊鏃。
仕へんことを筮ふ蓍を端詳にし、楊を穿つ鏃を磨拭す。

始從(五〇)讎校職。首中賢良目。
一拔侍(五一)瑤墀。再升紆(五二)繡服。
誓酬君王寵。願使朝廷肅。
(五三)密勿奏封章。清明操憲牘(五四)。
鷹韝(五五)中病下。豸(五六)角當邪觸。
糺謬靜東周。申冤動南蜀。
危言(五七)詆閻寺。直氣忤(五八)鈞軸。
不忍曲作鉤。乍能折爲玉。
捫心無愧畏。騰口有謗讀(五九)。
只要明是非。何曾虞禍福。
車摧太(六〇)行路。劍落酆(六一)城獄。
襄漢(六二)問修途。荆蠻指殊俗。
謫爲江府掾。遣事荆(六三)州牧。
趨走謁麾(六四)幢。喧煩視鞭(六五)扑。
簿書常自領。縲(六六)囚每親鞫。
竟(六七)日坐官曹。經旬曠休(六八)沐。
宅荒渚(六九)宮草。馬瘦畬(七〇)田粟。
薄俸等涓(七一)毫。微官同桎梏。
月中照形影。天際辭骨肉。
鶴病翅羽垂。獸窮爪牙縮。
行看鬢間白。誰勸盃(七二)中綠。
時傷大(七三)野麟。命同長(七四)沙鵬。
夏(七五)梅山雨漬。秋瘴海雲毒。
巴水白茫茫。楚山青簇簇。
吟君七十韻。是我心所蓄。
既去誠莫追。將來幸當勗。
欲除憂惱病。當取禪經讀。
須悟事皆空。無令念將屬。

始めて讎校の職に從ひ、首めて賢良の目に中る。
一たび拔れて瑤墀に侍し、再び升りて繡服を紆ふ。
君王の寵に酬いんことを誓ひ、朝廷をして肅ならしめん。
密勿封章を奏し、清明憲牘を操る。
鷹韝は病に中りて下り、豸角は邪に當つて觸る。
謬を糺して東周を靜め、冤を申べて南蜀を動かす。
危言閻寺に詆られ、直氣鈞軸に忤ふ。
曲りて鉤と作るに忍びず、乍ち能く折れて玉と爲る。
心を捫ちて愧畏ること無く、口を騰げて謗讀ること有り。
只是非を明かにせんことを要す、何曾ぞ禍福を虞らん。
車は太行の路に摧け、劍は酆城の獄に落つ。
襄漢に修途を問ひ、荆蠻に殊俗を指す。
謫せられて江府の掾となり、遣されて荆州の牧に事ふ。
趨走して麾幢に謁し、喧煩にして鞭扑を視る。
簿書常に自ら領し、縲囚每に親ら鞫ふ。
竟日官曹に坐し、旬を經て休沐を曠うす。
宅は渚宮の草に荒れ、馬は畬田の粟に瘦す。
薄俸涓毫に等しく、微官は桎梏に同じ。
月中形影を照し、天際に骨肉を辭す。
鶴病みて翅羽垂れ、獸窮りて爪牙縮る。
行くゆく鬢間の白きを看、誰か盃中の綠を勸めん。
時は大野の麟を傷み、命は長沙の鵬に同じ。
夏梅山雨漬し、秋瘴海雲毒す。
巴水白うして茫茫たり、楚山青くして簇簇たり。
君が七十の韻を吟ず、是れ我が心に蓄ふる所なり。
既に去るをば誠に追ふ莫れ、將に來らんとするをば幸に當に勗むべし。
憂惱の病を除かんと欲せば、當に禪經を取りて讀むべし。
須く事の皆空なるを悟るべし、念をして將屬せしむる無れ。

請思遊春夢。此夢何閃倏(七六)。
豔色卽空花。浮生乃焦穀。
良姻在佳偶。頃(七七)刻爲單獨。
入仕欲榮身。須臾成黜辱。
合者離之始。樂兮憂所伏。
愁恨僧祇(七八)長。歡榮刹那促。
覺悟因傍(七九)喩。迷執由當局。
膏明誘闇蛾。陽焰奔癡鹿(八〇)。
貪爲苦聚落。愛是悲林麓。
水蕩無明波。輪廻死生輻。
塵應甘露灑。垢待醍醐(八一)浴。
障要智燈燒。魔須慧刀戮。
外熏性易染。內戰心難衂(八二)。
法句與心王。期君日三復。

請ふ遊春の夢を思へ、此夢何ぞ閃倏なる。
豔色は卽ち空花、浮生は乃ち焦穀。
良姻は佳偶に在れども、頃刻にして單獨と爲る。
入り仕へて身を榮せんと欲すれども、須臾にして黜辱を成しぬ。
合ふは離るるの始め、樂みは憂の伏する所。
愁恨は僧祇に長し、歡榮は刹那に促まる。
覺悟は傍喩に因り、迷執は當局に由る。
膏明は闇蛾を誘き、陽焰は癡鹿を奔らしむ。
貪は苦の聚落たり、愛は是れ悲の林麓なり。
水は無明の波を蕩し、輪は死生の輻を廻らす。
塵は甘露の灑ぐに應じ、垢は醍醐の浴を待つ。
障は智燈をもて燒かんことを要し、魔は須らく慧刀をもて戮すべし。
外熏性染まり易く、內戰心衂し難し。
「せんことを期す。君が日に三復」
法句と心王と、

徵之常以法句及心王頌陀經相示。故市言以卒其志也。

【字解】【一】清泚　清き流。【二】烏龍　狗の名。搜神記に見ゆ。【三】青鳥　西王母の使をする鳥。【四】玉琳　腰に佩ぶる玉。【五】嫋婷　美しき貌。【六】縹緲　微に見ゆる貌。雲雨は巫山の神女の故事。【七】氛氳　氣の盛なる貌。【八】粧束　みどしらへ。【九】繡　しぼり染。紫蒲萄は葡萄色。【一〇】紅石竹　赤い撫子の花。【一一】襆頭巾。【一二】穠華　美しきこと。【一三】粉汗　おしろいの汗。【一四】素指　白き指。【一五】翡翠　鳥の名。羽毛甚だ美し。【一六】羅扇　薄絹の扇。【一七】東床腹　晉の郗鑒門生をして女婿を王氏に求めしむ。王氏の子弟皆自ら矜持す。唯羲之のみ坦腹して東床に臥す。鑒曰く此れ佳婿なりと。女を以て之に妻す。【一八】鸞歌　鸞鳳は伉儷に喩ふ。【一九】劉阮　漢の劉晨・阮肇、天台山に入りて藥を採る。溪邊に二女子あり。忻然として舊相識の如し。【二〇】潘楊　潘岳の楊仲武誄に、藉三三葉世親之恩、而子之姑、余之伉儷焉。潘楊之陸、有自來矣とある。【二一】履信　長安の里名。【二二】九醞　酒。聖賢は清酒と濁酒。【二三】八珍　色色の佳肴。【二四】蕭史　よく簫を吹き鳳鳴をなす。秦の穆公女弄玉を以て之に妻す。【二五】彥輔　晉の樂廣、字は彥輔。衞叔は晉の衞玠、字は叔寶。玠の妻は廣の女なり。【二六】獨盤　獨占の盤飧。【二七】夜醪　夜の酒。百斛は榜目の名。【二八】曄煜　盛なる貌。【二九】宿醉　二日醉。枕麴は晉書劉伶傳に、奮髯箕踞、枕麴藉糟とある。【三〇】君子爭　論語に、君子無所爭。必也射乎。揖讓而升下而飲。其爭也君子とある。【三一】鷓鴣　宋史樂志に、太宗親製四、中呂調・傾杯樂・菩薩蠻・瑞鷓鴣とある。【三二】顚狂　跳り狂ふこと。鴟鴞は舞曲の名。【三三】謝傅　晉の謝安卒して太傅を贈らる。ここは妻の父に喩ふ。【三四】蕣花　朝顏の花。妻に喩ふ。【三五】幽顯　幽明なり。【三六】冉冉　時の漸く進む貌。【三七】百身　詩經に、如可贖兮、人百其身とある。【三八】琴瑟　樂器の名。【三九】蠨蛸　蜘蛛の一種。【四〇】悲歎　悲しむ聲。【四一】蒼頭　奴僕をいふ。【四二】嘽咦　二關の名。【四三】蕙索　さびれること。【四四】嘽函　郊郭　洛陽の古名。【四六】旣濟　易の卦の名。【四七】穿楊鏃　楊葉を射る鏃。及第し得る學力に喩ふ。【四八】著　卜筮に用ふる草の名。【四九】犀角　獬豸といふ獸は人の鬪ふを見れば不直なる者に觸る。之に象りて法冠となし、御史之を服用す。【五〇】糾彈　憲牘　糾彈の文書。【五一】校書郎。【五二】瑤墀　禁裏。【五三】繡服　監察御史の服。【五四】密勿　天子に親近すること。【五五】鷹鸇　校職　鷹を擬をとまらせる臂衣。ここは指彈の意。【五六】多角　獬豸といふ獸。【五七】鈞軸　要路の大官。【五八】謗讟　そしる。【五九】太行　山の名。【六〇】危言　正言なり。【六一】關寺　宦官。

【六一】酆城獄　吳未だ滅びざる時。斗牛の間常に紫氣あり。張華、雷煥に問ふ。煥曰く、是れ寶劍の精上りて天に徹するのみと。華卽ち煥を補して酆城の令となす。煥縣に到り、獄屋の基を掘り一石函を得たり。中に雙劍あり。竝に刻題す。一を龍泉といひ一を太阿といふ。【六二】襄漢　襄陽、漢陽。竝に湖北省の地名。修途は長途。【六三】荊州牧　荊州の長官。【六四】麾幢　旌旗の類。【六五】鞭扑　罪人を鞭つこと。【六六】縲囚　罪人。鞫は拷問すること。【六七】寃日　終日。官曹は役所。【六八】休沐　休暇。【六九】渚宮　湖北省江陵縣城内の西北隅に在り、春秋楚の別宮なり。【七〇】畬田　新に開墾した田地。【七一】涓毫　しづくと毛。微少なるをいふ。【七二】盃中綠　美酒。【七三】大野麟　左傳哀公十四年に、西狩ニ於大野一叔孫氏之車子鉏商獲ル麟とある。【七四】長沙鵩　漢の賈誼長沙王の大傅に貶せらる。鵩あり其舍に入る。賈誼以て不吉となして之を悲む。【七五】夏梅　梅雨。【七六】閃倏　速なること。【七七】頃刻　暫時。【七八】僧祇　多數なり。【七九】傍喩　あまねくさとる。【八〇】陽焱　かげろふ。【八一】聚落　集る處。【八二】醍醐　酥の上に浮べる油の如きもの。【八三】法句、心王　禪經の名。

【題義】元稹が江陵士曹に貶せられて後、夢遊春と題する詩を作つて樂天に寄せたので、樂天が其れに和したのである。

【詩意】昔君は夢に仙山の隈に遊び、心恍惚として樂み、平生の願に愜ふことを感じた。因つて更に菖蒲の水、桃花の谷に進み入り、紅樓の在る所に往き、之を愛して飽くことを知らずに眺めた。池は水清き流を湛へ草は綠の蓐を敷き、門の柳は烟を罩め、簷の櫻は半紅を呈してゐる。尙ほ奥深く進み往けば、狗は臥して驚かず、鳥は飛んで相逐うてゐる。忽ち玉珮の音を聞き珠履の躅を見たと思ふ間もなく、窓の下に十五六の美人が現れた。霞罩めたる明月か、旭を受けた蓮花かと疑はるるばかりの美人で、縹緲たる雲雨の仙女の如く、蘭麝の馥があたりに漂つてゐる。薄化粧を加へた當世風の身ごしらへで、袖柔に裙輕き綾絹の衣裳をまとひ、裙の腰には銀絲の刺繍があり、掌中の梳櫛には金篦の象眼がある。帶には葡萄の纈染が施され、袴には撫子の花が織出されてゐる。思を祕めて物をも言はず心ありげにこちらを眺めてゐる。遠山の眉、綠の黑髮、眞に繪の中からでも拔け出したやうな美人である。さて閨に入りて翡翠の帳を垂れ、鴛鴦の被を擁すれば、穠艷誠に掬するに足り、起つて褥に坐しては白い手で朱脣を匂へ、紅綿で汗を拭ひなどした。併し巫山の夢破れ易く斷夢續ぎ難くして惜しき別をなし、心に誓つて貞誠を後日に期し、京洛に遊んで八九年を經るも未だ曾て色里などには足踏もしなかつた。壯年になるまで誓を守つたが、再會の機を得なかつた。所へ俄に緣談がもちあがつた。其相手は韋氏の娘で血統も正しく身分も貴く、相婿の裴氏も賢淑であつた。淑女貴人が數多參會した席上で披露があつて、遂に韋氏の婿となり、二姓姻緣を結ぶに至り、長安の履信街に新邸を修め、初めて尙書の祿を食むことになつた。かくて豐な生活も出來るやうになり、韋氏からは益〻寵愛を受けるやうになり、したい放題な豪奢を窮めることも出來るやうになつた。所が其れも束の間で岳父も世を去り君の妻女も風の前の燭のやうに消え去つて、(元稹の祭ニ亡妻韋氏一文に況攜手於千里、忽分レ形而獨飛とあるから、韋氏の死は稹が江陵に貶せられた後である。)君は半死の梧桐のやうに獨り殘され、少兒女を攜へて舊姻族に託せんとして、朱塗の門にはひり行き高樓に傍つて哭泣した。見れば昔とは打つて變つた零落ぶりで、厩は空あきで馬はゐず、池の水も涸れて鶩もゐず、籬の菊も荒れ果て、歌舞の堂には蜘蛛が巢を張り蝙蝠が住み、あまたの婢僕も皆暇を出し、家人も悲嘆にくれてゐるといふ有樣で、豫ての豫期は全く裏切られ、官階も遲遲として進まないといふ破目に陷つた。初め

君は河南の鄉里を離れ崤函を越えて長安に入り、試に應じて及第の譽を荷ひ、始めて校書郎を授けられ、やがて制科に應じて首席で及第し、拾遺より監察御史となり、君寵に報い忠勤を擢んでようとして、嚴格に其職を奉じ、或は東都(東周)に分司となり、或は東川(南蜀)に使し、剛直で諱み憚る所がなかつたので、要路の大官の讒に遇つたが、君は何處までも己の正義を立て通さうとしたので、遂に貶謫の憂目に遇ひ、江陵に士曹となり、簿書の取調に忙殺され、罪人の拷問をも親らせねばならなくなつた。おまけに其宅は荒れ其祿は薄く、遠く骨肉にも離れて苦勞し、鬢が白くなつても酒を勸めて慰める者もなく、時を得ない麒麟の野原にさまよふが如く誰も認めてくれる者はない。予は君の夢遊春七十韻の詩を吟じたが、實に我が心に抱いてゐる考と同じだ。過去の事は今更考へるな、ただ將來に向つて努力するがよい。心の惱みを除くには禪經を取つて讀み、萬事の空なるを悟り世事に氣を取られぬやうにするがよい。彼の遊春の夢も實に一場の夢と消えたではないか。良姻を得たかと思へば、忽ちに孤獨となつてしまつた。官に仕へて榮進を圖らうとすれば却つて黜辱を被るに至つた。合ふは離れる始、樂みの影には憂へが潛んでゐるのだ。愁恨は長く歎榮は短い。覺悟は萬事の空なるを喩るに在り、局に當れば迷執の本となる。貪慾は苦の集る處で愛は悲みの林である。須らく心の障害を一掃せんことを期し、禪經を取つて毎日之を三復すべきである。

秋晚

籬菊花稀砌桐落。
樹陰離離日色薄。
單幕疎簾貧寂寞。
涼風零露秋蕭索。
光陰流轉忽已晚。
顏色凋殘不如昨。
萊妻臥病月明時。
不搗寒衣空搗藥。

【題義】秋の夕暮の景況を述べた詩である。

【詩意】籬の菊は花が少くなり砌に立てる桐の葉も落ち、木の陰に傾いた夕日の光も薄い。吾が家は單幕疎簾を垂れて寂寞として立ち、風も冷かに白露が墜ちて物淋しさを感ずる。光陰は水の流るるが如く忽ち去り、吾が顏色も衰へて昔の樣はない。特に妻は病に臥し此月明に當り砧を搗く代りに藥を搗いてゐるやうな始末だ。

【字解】【一】離離　親まぬ貌。離れ去る貌。

【二】零露　白露の落ちること。蕭索は淋しき貌。

【三】凋殘　衰へること。

【四】萊妻　老萊子の妻。樂天の妻に比していふ。

【餘論】これから以下の詩は通行本の十六卷に收めてある。

謫居

面瘦頭斑四十四。
遠謫江州爲郡吏。
逢時棄置從不才。
未老衰羸爲何事。
火燒寒澗松爲燼。
霜降春林花委地。
遭時榮悴一時間。
豈是昭昭上天意。

【題義】江州に謫せられたことを述べた詩である。

【詩意】顏は瘦せ頭は胡麻鹽になり、四十四の齡を重ねて、遠く江州司馬に貶せられた。昭代に生れて片田舍に棄てられたのは吾が不才の致す所であるが、まだ老いたといふ程でもないのに瘦せこけて

謫居

面瘦せ頭斑なり四十四、
遠く江州に謫せられて郡吏となる。
時に逢ひて棄置せらるるは不才に從る、
未だ老いざるに衰羸するは何事の爲なる。
火寒澗を燒けば松燼となり、
霜春林に降れば花地に委す。
時の榮悴に遭ふは一時の間のみ、
豈是れ昭昭たる上天の意ならんや。

【字解】【一】燼　燃え殘りの火。
【二】榮悴　盛衰なり。

しまつたのは何故であらうか。火が寒澗を燒けば操の高い松でも燒き盡し、霜が春林に降れば花も地に落ちてしまふもので、時世と時節で止むを得ないが、それは唯一時のことで、昭昭たる上天の意ではあるまいから、また好運にめぐり遇ふこともあるであらう。

偶然二首

楚懷邪亂靈均直。
放棄合宜何惻惻。
漢文明聖賈生賢。
謫向長沙堪歎息。
人事多端何足怪。
天文至信猶差忒。
月離于畢合霧霪。
有時不雨誰能測。

【題義】世には偶然の出來事が多いものだといふことを述べた詩である。

偶然　二首

楚懷は邪亂にして靈均は直なり、
放棄せらるるは合に宜なり何ぞ惻惻せん。
漢文は明聖にして賈生は賢なり、
謫せられて長沙に向ふは歎息するに堪へたり。
人事多端何ぞ怪むに足らん、
天文至信猶ほ差忒す。
月畢に離れば合に霧霪たるべきも、
時ありて雨ふらず誰か能く測らん。

【字解】【一】靈均　屈原なり。楚の懷王に仕へて疏んぜられた。
【二】惻惻　悲む貌。
【三】賈生　賈誼。漢の文帝に仕へて長沙王の大傅に貶せられた。
【四】差忒　ちがひが起ること。
【五】月離于畢　月が畢星にかかれば雨がふるといふ傳說がある。
霪霪は雨の降ること。

【詩意】楚の懷王は邪亂で屈原は正直であつた。だから屈原が放棄されたのは當然であつて何も悲むには當らない。漢の文帝は明聖で賈誼は賢であつた。然るに長沙に謫せられたのは實に案外で歎息するに足る。人事の變は千差萬別であるが何も怪むには足らない。天文のやうな確なものでも時として、くるひの生ずることがあるのだから。現に月が畢星に離れば雨が降る筈だが、時として降らないこともある。そこは人智で測ることは出來ない。卽ち偶然である。

〔二〕

火發城頭魚水裏。
救火竭池魚失水。
乖龍藏在牛領中。
雷擊龍來牛枉死。
人道蓍神龜骨靈。
試卜魚牛那至此。
六十四卦七十鑽。
畢竟不能知所以。

〔二〕

火發す城頭魚水の裏、
火を救ひ池を竭して魚水を失ふ。
乖龍藏在す牛領の中、
雷龍を擊ち來りて牛枉死す。
人は道ふ蓍は神に龜骨は靈なりと、
試に卜せよ魚牛那ぞ此に至れるかを。
六十四卦七十鑽、
畢竟所以を知る能はず。

【字解】【一】乖龍　北夢瑣言に乖龍は行に苦み、雨多ければ古木及び薺楡の內に竄匿す。雷神之を捕ふとある。藏在は、かくれてゐること。牛領は牛の頸。

【二】蓍　占筮に用ふる草。龜骨も卜筮に用ふるもの。

【三】六十四卦　易に六十四卦あり。七十鑽は龜卜に七十種あるをいふ。

【詩意】城の頭の魚の住む水の近所に火事が出來て、火を救ふ爲に池の水を竭したので魚は水を失つて死んだ。乖龍が牛の頸の中に匿れてゐたが、雷が乖龍を擊つ拍子に牛が枉死した。人は卜筮は不思議に能く中るといふが、試に魚と牛とは何の理由を以て死んだのか卜つて見給へ。蓍でも龜でも恐らく其理由を判斷することは出來まい。ただ偶然の結果といふより外はない。

喜山石榴花開 去年自廬山移來

山石榴花の開くを喜ぶ　去年廬山より移し來る

忠州州裏今日花。
廬山山頭去年樹。
已憐根損斬新栽。
還喜花開依舊數。
赤玉何人少琴軫。
紅纈誰家合羅袴。
但知爛熳恣情開。
莫怕南賓桃李妬。

忠州州裏今日の花、
廬山山頭去年の樹。
已に憐む根損じて斬新に栽ゑしを、
還喜ぶ花開いて舊數に依るを。
赤玉は何人か琴軫を少かん、
紅纈は誰が家か羅袴に合せん。
但だ知る爛熳情を恣にして開くを、
怕るる莫れ南賓桃李の妬むを。

【字解】【一】山石榴　やまつつじ。

【二】斬新　極めて新しきこと。

【三】琴軫　ことぢ。

【四】紅纈　赤いしぼり染。羅袴は薄絹の袴。

【五】南賓　忠州の縣名。

【題義】去年廬山から移し植ゑた山石榴の花の咲いたのを喜んだ詩である。

【詩意】忠州に今日咲き誇つてゐる花は去年廬山の頂から移したものだ。根を損じて新に栽ゑ易るのを憐れに思つたが、もとのやうに立派に咲き揃つたのは實に嬉しい。花の色は赤玉のやうで琴柱にでもしたいやうで、しぼり染のは薄絹の袴かと思はれる。ただ思のままに爛熳と咲き亂れてゐる。桃李の妬などは怕れずに咲け。

【餘論】これから以下の詩は通行本の十八卷に收めてある。

惻惻吟

(一)惻惻復惻惻。
(二)逐臣返二鄉國一。
前事難二重論一。
少年不二再得一。
(三)泥塗絳老頭斑白。
(四)炎瘴靈均面黎黑。
六年不レ死却歸來。

惻惻吟

惻惻復た惻惻、
逐臣鄉國に返る。
前事重ねて論じ難し、
少年再び得ず。
泥塗の絳老頭斑白、
炎瘴の靈均面黎黑。
六年死せず却つて歸り來る、

【字解】【一】惻惻　悲む貌。
【二】逐臣　逐ひ拂はれた臣。謫臣なり。
【三】泥塗　泥途なり。絳老は絳縣の老人。左傳襄公三十年に見ゆ。斑白は胡麻鹽あたま。
【四】炎瘴　炎熱の惡氣。靈均は楚の屈原。黎黑は黑きこと。

(五)道二著姓名一人不レ識。

【題義】心の悲を述べた詩である。姓名を道著すれども人識らず。

【詩意】悲の心を抱いて謫臣が故鄉に歸つた。昔の事は重ねて論じ難く、再び少年時代に遇ふことも出來ない。泥途の絳老と同じく頭髮は白くなり、炎瘴の屈原と同じく面色が黑い。六年ぶりで歸つて見れば、自分の姓名を告げても誰も識る者がない。

【五】道著　言ふこと。

獨眠吟　二首

獨眠吟　二首

夜長無レ睡起二階前一。
(一)寥落星河欲レ曙天。
十五年來明月夜。
何曾一夜不二孤眠一。

夜長くして睡ること無く階前に起つ、
寥落たる星河曙けんと欲する天。
十五年來明月の夜、
何ぞ曾て一夜か孤眠せざらん。

【字解】【一】寥落　まばらに物淋しき貌。星河は、あまのがは。

【題義】秋夜に獨り寢ね愁へて眠られないことを述べた詩である。

【詩意】夜が長くて眠られず起きて階前を徘徊し、天河の影が薄らぎ夜が明ける頃まで立ち盡した。十五年このかた明月の夜に、獨り寢て愁に鎖されない晩は一晩でもない。

〔二〕

獨眠客。
夜夜可ㇾ憐長寂寂。
就中今夜最愁ㇾ人。
涼月清風滿(一)牀席。

〔二〕

獨眠の客、
夜夜憐む可し長く寂寂たり。
就中今夜最も人を愁へしむ。
涼月清風牀席に滿つ。

【詩意】獨寢の客たる我は、毎夜長き夜を獨り淋しく過ごしてゐる。特に今夜は最も愁が深い。涼月清風が我が寢臺に滿ちてゐるから。

【字解】【一】牀席　寢臺。

期不ㇾ至

紅燭青樽久延(一)佇。
出ㇾ門入ㇾ門天欲ㇾ曙。
星稀月落竟不ㇾ來。
煙柳曨曨鵲飛去。

期して至らず

紅燭青樽久く延佇す、
門を出で門に入り天曙けんと欲す。
星稀に月落ちて竟に來らず、
煙柳曨曨鵲飛び去る。

【字義】【一】延佇　久しく立つて待つ。

【三】曨曨　日初めて出で未だ明ならざる貌。

【題義】人と會合を約して待つてゐたが、終に來なかつたことを述べた詩である。

【詩意】明燭を張り酒の用意までして久しく待つたが來ないので、門を出たりはひつたりして夜の明け方になり、星が少くなり月が沈んでもまだ來ない。竟に靄のかかつた柳の影に朝日がぼんやりと現はれ鵲が飛び去るに至つた。

代謝好答崔員外　謝好妓也

青娥(一)小謝娘。白髮老崔郎。
謾愛胸前雪。其如頭上霜。
別後曹(二)家碑背上。
思量好字斷君腸。

謝好に代りて崔員外に答ふ　謝好は妓なり

青娥の小謝娘、白髮の老崔郎。
謾に胸前の雪を愛す、其れ頭上の霜を如んせん。
別後曹家碑背の上、
好字を思量して君が腸を斷たん。

【字解】【一】青娥　わかき美女。【二】曹家碑　碑の名。【三】思量　思に耽ること。

【題義】謝好といふ美妓に代つて崔員外に答へた詩である。

【詩意】白髮の崔員外郎は若き美妓謝好に心を寄せ、やたらに其胸の白さに現をぬかしてゐるが、己の頭上の霜を顧みて自ら愧づる所があるであらう。然るに曹家碑の後で別れてから後も謝好に焦れて斷腸の思をしてゐる。

【餘論】此詩は通行本の十九卷に收めてある。

律詩　五言七言凡九十二首

代書詩一百韻寄微之

憶在貞元歲。初登典校司。　憶ふ貞元の歳に在り、初めて典校の司に登る。
身名同日授。心事一言知。　身名同日に授けらる、心事一言にして知る。
貞元中、與微之同登科第、俱授秘書省校書郎、始相識也。
肺腑都無隔。形骸兩不羈。　肺腑都て隔無く、形骸兩ながら羈されず。
疎狂屬年少。閒散爲官卑。　疎狂年の少きに屬し、閒散官の卑きが爲なり。
分定金蘭契。言通藥石規。　分は金蘭の契を定め、言は藥石の規を通ず。
交賢方汲汲。友直每偲偲。　賢に交つて方に汲汲、直を友として每に偲偲。
有月多同賞。無盃不共持。　月有れば多くは同賞し、盃の共に持せざるなし。

秋風拂琴匣。夜雪卷書帷。
高上慈恩塔。幽尋皇子陂。
唐昌玉蕊會。崇敬牡丹期。
笑勸迂辛酒。閑吟短李詩。
辛大立度、性迂嗜酒、李二十紳、形短能詩、故當時有迂辛・短李之號。
儒風愛敦質。佛理賞玄師。
劉三十二敦質、有儒風、庾七玄師、談佛理、有可賞者。
度日曾無悶。通宵靡不爲。
雙聲聯律句。八面對宮棊。
雙聲聯句、八面宮棊、皆當時事。
往往遊三省。騰騰出九逵。
寒銷直城路。春到曲江池。
樹暖枝條弱。山晴彩翠奇。
峯攢石綠點。柳宛麴塵絲。
岸草煙鋪地。園花雪壓枝。
早光紅照耀。新溜碧逶迤。

秋風琴匣を拂ひ、夜雪書帷を卷く。
高く慈恩の塔に上り、幽に皇子の陂を尋ぬ。
唐昌觀・玉蕊・崇敬寺牡丹、花時多與微之有期。
唐昌玉蕊の會、崇敬牡丹の期。
笑つて迂辛が酒を勸め、閑に短李が詩を吟ず。
儒風敦質を愛し、佛理玄師を賞す。
日を度りて曾て悶する無く、通宵爲さざる靡し。
雙聲律句を聯ね、八面宮棊に對す。
往往三省に遊び、騰騰として九逵を出づ。
寒は銷す直城の路、春は到る曲江の池。
樹暖にして枝條弱く、山晴れて彩翠奇なり。
峯は石綠の點を攢め、柳は麴塵の絲を宛す。
岸草煙地に鋪き、園花雪枝を壓す。
早光紅照耀、新溜碧逶迤たり。

幄幕侵堤布。盤筵占地施。
幄幕堤を侵して布き、盤筵地を占めて施す。
徵伶皆絕藝。選妓悉名姬。
伶を徵して皆絕藝、妓を選んで悉く名姬。
粉黛凝春態。金鈿耀水嬉。
粉黛春態を凝し、金鈿水嬉を耀かす。
風流誇墮髻。時世鬬啼眉。
貞元末、城中復爲墮馬髻・啼眉妝。
風流墮髻を誇り、時世啼眉を鬬はす。
密坐隨歡促。華樽逐勝移。
密坐歡に隨うて促し、華樽勝を逐うて移す。
香飄歌袂動。翠落舞釵遺。
香飄つて歌袂動き、翠落ちて舞釵遺つ。
籌挿紅螺椀。觥飛白玉巵。
籌は紅螺の椀に挿み、觥は白玉の巵を飛ばす。
打嫌調笑易。飲訝卷波遲。
打は調笑の易きを嫌ひ、飲は卷波の遲きを訝かる。
拋打曲有調笑令。飲酒曲有卷白波。
殘席諠譁散。歸鞍酩酊騎。
殘席諠譁散じ、歸鞍酩酊して騎る。
酡顏烏帽側。醉袖玉鞭垂。
酡顏烏帽側ち、醉袖玉鞭垂る。
紫陌傳鐘鼓。紅塵塞路岐。
紫陌鐘鼓を傳へ、紅塵路岐に塞がる。
幾時曾暫別。何處不相隨。
幾時か曾て暫く別れ、何處にか相隨はざらん。
荏苒星霜換。廻環節候推。
荏苒として星霜換り、廻環して節候推す。

兩衙多請告。三考欲成資。
兩衙多く告を請ひ、三考資を成さんと欲す。
運啓千年聖。天成萬物宜。
運は千年の聖を啓き、天は萬物の宜しきを成す。
皆當少壯日。同惜盛明時。
皆少壯の日に當つて、同じく盛明の時を惜む。
光景嗟虛擲。雲霄竊暗窺。
光景虛しく擲つを嗟き、雲霄暗に窺ふを竊む。
攻文朝矻矻。講學夜孜孜。
文を攻めて朝に矻矻、學を講じて夜孜孜たり。
策目穿如札。時與微之集策略之目、其數至百十。
策目穿つて札の如く、
毫鋒銳若錐。時與微之各有纖鋒細管筆、攜以就試、相顧輒笑、自爲毫錐。
毫鋒銳きこと錐の若し。
繁張獲鳥網。堅守釣魚坻。
繁く張る獲鳥の網、堅く守る釣魚の坻。
謂自冬至夏、頻改試期、竟與微之、堅待制試也。
竝受夔龍薦。齊陳晁董詞。
竝に夔龍の薦を受け、齊しく晁董が詞を陳ぶ。
萬言經濟署。三策太平基。
萬言經濟の署、三策太平の基。
中第爭無敵。專場戰不疲。
中第爭ふに敵無く、場を專にして戰疲れず。
輔車排勝陣。掎角搴降旗。
輔車勝陣を排し、掎角降旗を搴る。
雙闕紛容衛。千僚儼等衰。
雙闕容衛紛たり、千僚等衰を儼にす。
並謂同鋪席、共競筆硯。
謂制舉人欲相顧輒笑之時也。

恩隨紫泥降。名向白麻披。
恩は紫泥の降に隨ひ、名は白麻の披に向ふ。
既在高科選。還從好爵縻。
既に高科の選に在り、還つて好爵に從つて縻がる。
東垣君諫諍。西邑我驅馳。
東垣に君諫諍し、西邑に我驅馳す。
元和元年、同登制科、微之拜拾遺、予授盩厔尉。
再喜登烏府。多慙侍赤墀。
再び烏府に登るを喜び、多く赤墀に侍するを慙づ。
四年、微之復拜監察、予爲拾遺・學士也。
官班分內外。遊處遂參差。
官班內外を分ち、遊處遂に參差たり。
每列鵷鸞序。偏瞻獬豸姿。
鵷鸞の序に列する每に、偏に獬豸の姿を瞻る。
簡威霜凛冽。衣綵綉葳蕤。
簡威霜凛冽、衣綵綉葳蕤。
正色摧强禦。剛腸嫉喔咿。
正色强禦を摧き、剛腸喔咿を嫉む。
常憎持祿位。不擬保妻兒。
常に祿位を持するを憎んで、妻兒を保んずるを擬せず。
養勇期除惡。輸忠在滅私。
勇を養つて惡を除かんことを期し、忠を輸すは私を滅するに在り。
下韝驚燕雀。當道懾狐狸。
韝を下つて燕雀を驚かし、道に當つて狐狸を懾れしむ。
南國人無怨。東臺吏不欺。
南國人怨無く、東臺吏欺かず。
微之使東川、奏冤八十餘家。詔從而平之。因分司東都。
理冤多定國。切諫甚辛毗。
冤を理むること定國より多く、諫を切にするは辛毗より甚し。

造次行於是。平生志在茲。
道將心共直。言與行兼危。
水暗波翻覆。山藏路險巇。
未爲明主識。已被倖臣疑。
木秀遭風折。蘭芳遇霰萎。
千鈞勢易壓。一柱力難支。
騰口因成痏。吹毛遂得疵。
憂來吟貝錦。謫去詠江蘺。
邂逅塵中遇。殷勤馬上辭。
賈生離魏闕。王粲向荆夷。
水過清源寺。山經綺季祠。
心搖漢皋珮。淚墮峴亭碑。
驛路緣雲際。城樓枕水湄。
思鄉多繞澤。望闕獨登陴。

造次の行は是に於てし、平生の志は茲に在り。
道は心と共に直く、言は行と兼ねて危うす。
水暗うして波翻覆し、山藏れて路險巇なり。
未だ明主に識られざるに、已に倖臣に疑はる。
木秀でて風に遭うて折れ、蘭芳しうして霰に遇うて萎む。
千鈞の勢壓し易く、一柱の力支へ難し。
口を騰げて因つて痏を成し、毛を吹いて遂に疵を得たり。
憂來つて貝錦を吟じ、謫去して江蘺を詠ず。
邂逅して塵中に遇ひ、殷勤に馬上に辭す。
賈生魏闕を離れ、王粲荆夷に向ふ。
水には清源の寺を過ぎ、山には綺季の祠を經。
心は搖く漢皋の珮、淚は墮つ峴亭の碑。
驛路雲際に緣り、城樓水湄に枕む。
鄉を思ひて多くは澤を繞り、闕を望んで獨陴に登る。

（造次行於是）造次の行は是に於てし。
（平生志在茲）平生の志は茲に在り。
（道將心共直）道は心と共に直く。
（言與行兼危）言は行と兼ねて危うす。
（水暗波翻覆）水暗うして波翻覆し。
（山藏路險巇）山藏れて路險巇なり。
（未爲明主識）未だ明主に識られざるに。
（已被倖臣疑）已に倖臣に疑はる。
（木秀遭風折）木秀でて風に遭うて折れ。
（蘭芳遇霰萎）蘭芳しうして霰に遇うて萎む。
（千鈞勢易壓）千鈞の勢壓し易く。
（一柱力難支）一柱の力支へ難し。
（騰口因成痏）口を騰げて因つて痏を成し。
（吹毛遂得疵）毛を吹いて遂に疵を得たり。
（憂來吟貝錦）憂來つて貝錦を吟じ。
（謫去詠江蘺）謫去して江蘺を詠ず。
（邂逅塵中遇）邂逅して塵中に遇ひ。
（殷勤馬上辭）殷勤に馬上に辭す。
（賈生離魏闕）賈生魏闕を離れ。
（王粲向荆夷）王粲荆夷に向ふ。
（水過清源寺）水には清源の寺を過ぎ。
（山經綺季祠）山には綺季の祠を經。
（心搖漢皋珮）心は搖く漢皋の珮。
（淚墮峴亭碑）淚は墮つ峴亭の碑。
（驛路緣雲際）驛路雲際に緣り。
（城樓枕水湄）城樓水湄に枕む。
（鄉思多繞澤）鄉を思ひて多くは澤を繞り。
（望闕獨登陴）闕を望んで獨陴に登る。

（造次行於是）造次の行は是に於てし、平生の志は茲に在り。
（道將心共直）道は心と共に直く、言は行と兼ねて危うす。
（水暗波翻覆）水暗うして波翻覆し、山藏れて路險巇なり。
（未爲明主識）未だ明主に識られざるに、已に倖臣に疑はる。
（木秀遭風折）木秀でて風に遭うて折れ、蘭芳しうして霰に遇うて萎む。
（千鈞勢易壓）千鈞の勢壓し易く、一柱の力支へ難し。
（騰口因成痏）口を騰げて因つて痏を成し、毛を吹いて遂に疵を得たり。
（憂來吟貝錦）憂來つて貝錦を吟じ、謫去して江蘺を詠ず。
（邂逅塵中遇）邂逅して塵中に遇ひ、殷勤に馬上に辭す。
（賈生離魏闕）賈生魏闕を離れ、王粲荆夷に向ふ。
（水過清源寺）水には清源の寺を過ぎ、山には綺季の祠を經。
（心搖漢皋珮）心は搖く漢皋の珮、淚は墮つ峴亭の碑。
（驛路緣雲際）驛路雲際に緣り、城樓水湄に枕む。
（鄉思多繞澤）鄉を思ひて多くは澤を繞り、闕を望んで獨陴に登る。

林晚青蕭索。江平綠渺瀰。
野秋鳴蟋蟀。沙冷聚鸕鷀。
官舍黃茅屋。人家苦竹籬。
白醪充夜酌。紅粟備晨炊。
寡鶴摧風翮。鰥魚失水鬐。
闇雛啼渴旦。涼葉墜相思。
一點寒燈滅。三聲曉角吹。
藍衫經雨故。駿馬臥霜羸。
念涸誰濡沫。嫌醒自斟醨。
耳垂無伯樂。舌在有張儀。
負氣衝星劒。傾心向日葵。
金言自銷鑠。玉性肯磷緇。
伸屈須看蠖。窮通莫問龜。
定知身是患。應用道爲醫。

林晚れて青蕭索たり、江平かにして綠渺瀰たり。
野秋にして蟋蟀鳴き、沙冷かにして鸕鷀聚る。
官舍黃茅の屋、人家苦竹の籬。
白醪夜酌に充て、紅粟晨炊に備ふ。
寡鶴風翮を摧き、鰥魚水鬐を失ふ。
闇雛渴旦に啼き、涼葉相思を墜す。
一點寒燈滅え、三聲曉角吹く。
藍衫雨を經て故り、駿馬霜に臥して羸る。
涸を念うて誰か沫に濡はん、醒むるを嫌うて自ら醨を斟む。
耳垂れて伯樂無く、舌在りて張儀有り。
氣を負ふ星を衝く劒、心を傾く日に向ふ葵。
金言自ら銷鑠し、玉性肯て磷緇す。
伸屈須く蠖を看るべし、窮通龜に問ふこと莫れ。
定めて知る身是れ患なるを、應に道を用ひて醫と爲すべし。

想子今如彼。嗟予獨在斯。
無憀(八八)當歲杪。有夢到天涯。
坐阻連襟帶。行乖接履綦(八九)。
潤銷衣上霧。香散室中芝(九〇)。
念遠傷遷貶。驚時歎別離。
素書三往復。明月七盈虧。
舊里非難到。餘歡不可追。
樹依興善老。草傍靖安衰。
微之宅在靖安坊西、近興善寺。

想ふに子今彼が如し、嗟予獨斯に在り。
無憀にして歲杪に當り、夢有り天涯に到る。
坐は阻つ襟帶を連ぬるを、行は乖ふ履綦を接するを。
潤は銷す衣上の霧、香は散ず室中の芝。
遠きを念うて遷貶を傷み、時に驚いて別離を歎く。
素書三たび往復し、明月七たび盈虧す。
舊里到り難きに非ず、餘歡追ふ可からず。
樹は興善に依つて老い、草は靖安に傍うて衰ふ。

前事思如昨。中懷寫向誰。
北村尋古柏。南宅訪辛夷(九一)。
開元觀西北院、卽隋時龍村佛堂、有古栢一株、至今存焉、微之宅中、有辛夷兩樹、常與微之遊息其下。
此日空搔首。何人共解頤(九二)。
病多知夜永。年長覺秋悲。
不飲長如醉。加飡亦似飢。

前事思へば昨の如く、中懷寫して誰にか向はむ。
北村古柏を尋ね、南宅辛夷を訪ふ。
此日空しく首を搔き、何人と共に頤を解かん。
病多く知りて夜の永きを知り、年長うして秋の悲きを覺ゆ。
飲まざれども長く醉ふが如く、飡を加へても亦飢うるに似たり。

狂吟一千字。因使寄微之。

狂吟一千字、因つて微之に寄せしむ。

【字解】【一】貞元　德宗の年號。【二】典校司　祕書省校書郎を授けられたこと。【三】金蘭　交の堅きこと。易經に二人同心、其利斷金。同心之言、其臭如蘭とある。【四】偲偲　相責むるの切なること。【五】書帷　書齋のとばり。【六】慈恩寺の名。【七】皇子陂　長安の南に在り。陂北の原上に秦の皇子の冢あり。因つて此名あり。【八】雙聲　二人で聲韻を弄すること。【九】宮棊　圍棊なり。【一〇】三省　中書・尙書・門下の三省。【一一】九逵　都城の大道。【一二】曲江　長安の池の名。【一三】麴塵　淡黃色。宛は柔弱の貌。【一四】新溜　新春の水溜。【一五】逶迤　斜に續く貌。【一六】伶　音樂家。【一七】金鈿　金華なり。水嬉は水上の嬉戲。【一八】時世　當時の流行。【一九】籌　酒籌なり。酒令を行ふ時用ひて以て數を記するもの。紅螺は紅の貝。【二〇】觥　さかづき。巵も同じ。【二一】諠譁　かまびすしき騷。【二二】酡顏　醉うて赤き顏。烏帽は冠なり。【二三】紫陌　長安の市街。【二四】茫茫　歲月の移る貌。【二五】節候　氣候。【二六】兩衙　朝晚の二衙。朝と晚と二度屬吏を召集して事務を視ることをいふ。告は休暇。【二七】三考　三科の試に應ずること。【二八】盛明時　太平の世。【二九】光景　歲月といふが如し。【三〇】雲霄　宮闕に喩ふ。【三一】矻矻　孜孜に同じ。【三二】札　よろひのさね。【三三】夔龍　竝に舜の臣の名。【三四】晁董　漢初の文臣、晁錯及び董仲舒。【三五】經濟　經國濟民。【三六】中第　及第なり。【三七】專場　試驗場を獨占すること。【三八】輈車　輈は車の兩傍に在りて車を夾む木。【三九】掎角　掎は一脚を牽きて獸を捕ふること、角は兩角を持ちて捕ふること。【四〇】容衞　警衞なり。【四一】千僚　百官といふが如し。等衰は及落なり。【四二】紫泥　詔書なり。【四三】白麻　詔書をいふ。【四四】高科　擧科の高等なるもの。【四五】烏府　御史府をいふ。【四六】赤墀　宮闕。【四七】參差　分散すること。【四八】鵷鸞序　朝官の列。【四九】獬豸　御史の冠。【五〇】簡威　御史の彈劾文の威力。【五一】衣綵　御史は綉衣を著る。蔵蕤は垂るる貌。【五二】强禦　强梗なる者。【五三】喔咿　お世辭笑をすること。【五四】講　腕に卷きて鷹をとまらせるもの。【五五】定國　漢の于定國。【五六】辛毗　三國魏の文帝の臣。【五七】造次　僅の時間。【五八】險巇　危險な貌。【五九】倖臣　寵臣なり。【六〇】成痏　瘕を成す。【六一】貝錦　詩經小雅巷伯篇に、成是貝錦とある。讒を傷みて作りし詩なり。【六二】

江蘺　香草の名。【六三】邂逅　期せずして會すること。【六四】殷勤　ねんごろに。【六五】賈生　漢の賈誼、長沙の太傅に貶せらる。魏闕は宮闕。【六六】王粲　三國魏の人、亂を避けて劉表に荊州に依る。【六七】綺季　商山の四皓の一人。【六八】漢皋　山の名、湖北省襄陽の西北に在り。鄭交甫、將に楚に往かんとす。漢皋臺下に遵つて二女の兩珠を珮ぶるに遇ふ。交甫、目して之を挑む。二女珮を解いて之に贈る。【六九】峴亭　峴山なり。湖北省襄陽の南に在り。晉の羊祜、襄陽を鎮せし時常に之に登る。祜卒するに及び後人碑を其地に立つ。望む者悲んで淚を垂る。之を墮淚碑といふ。【七〇】水湄　水のほとり。【七一】陴　城の垣。【七二】蕭索　淋しき貌。【七三】渺瀰　ひろびろとしてゐる貌。【七四】鷓鴣　鳥の名。【七五】苦竹　竹の一種。【七六】白醪　濁酒。【七七】紅粟　古くて變色した米。【七八】鰈魚　獨り住む魚。【七九】曉角　曉に吹く角笛。【八〇】藍彩　藍色の上衣。地方官の服。【八一】驄馬　馬の青白色なるもの。【八二】醨　薄き酒。【八三】伯樂　よく馬を相する人の名。【八四】張儀　嘗て楚に遊ぶ。楚相の辱むる所となる。妻慍りて復た遊說せざらんことを乞ふ。儀曰く吾が舌を視よ、尙在りや否やと。【八五】磷緇　磷は薄くなること。緇は黑くなること。論語に、磨而不ㇾ磷、涅而不ㇾ緇とある。【八六】蠖　しやくとり蟲。【八七】問ㇾ龜　龜の甲を燒いて卜ふこと。【八八】無憀　愁悶なり。歲杪は歲暮。【八九】履綦　履の飾。【九〇】芝　香草。【九一】辛夷　木の名。【九二】俯顧　笑ふこと。

【題義】元和五年、元稹（字は微之）は監察御史から江陵士曹に貶せられ、樂天は京兆戶曹參軍に除せられた。此詩は書狀に代へて江陵に在る元稹に寄せたのである。

【詩意】憶へば貞元年中に、君と僕とは同日に祕書省校書郎を授けられ、爾來心に隔なき親友となり、俱に風月を賞し與に酣醉を共にした。慈恩寺の塔にも上れば皇子陂にも遊び、唐昌觀や玉蕊寺・崇敬寺の牡丹見にも一緒に往き、或は詩を鬪はしたり棊を圍んだりもした。また相攜へて都の郊外の曲江のあたりまで乘出したこともある。丁度春のことで岸の草の煙の如く地上に鋪き、園中の花の雪の如く枝を壓する處に、幕を張り筵を敷き、藝の達者な美妓を聘して歡を助け、歌舞につれて香氣が飄り金釵が落ち、飲めや歌への大騷をして、初夜の鐘の鳴る頃に都大路に歸り著いたこともあつた。此の如くにして荏苒と日を送つてゐたが、制科に應じ昇進の資を成さうと考へ、朝晩の官衙にも休暇を願つて勉學した。適〻曠古の明主が君臨せられ萬物皆光輝に浴することになつた。君と僕とは此機に乘じて榮達を圖らうと、朝から晩まで孜孜と努力して對策の筆を煉り、遂に試に應じた處が忽ち及第の榮譽を荷ひ、君は拾遺に任ぜられ僕は盩厔縣尉に任ぜられたが、やがて又君は監察御史に任ぜられ、僕は左拾遺、翰林學士に任ぜられた。此から後は役所が別になつて交遊も少しく遠のいたが、百官の整列する毎に、獬豸の冠を戴いてゐる君を仰ぎ視た。君は何處までも嚴格に役目を遵奉して、百官の不正を見ては少しも假借する所なく、勇を養ひ忠を輸して、惡を除き私を滅することを務めた。また東川に使したり東都に分司となつたりして、民の寃苦を理め君を切諫した。處が君の態度があまりに剛直嚴正であつたので、忽ち寵臣の讒を被り、江陵士曹に貶せられることになつた。そこで君は長沙に貶せられた賈誼や、荊州に奔馳した王粲の如く、幾多の山川を過ぎて任地に到著した。故鄕を思ひ宮闕を望んで常に心を傷ましめ、春の鳥、秋の蟲を聞いては淚を流した。まして妻を喪ひ兒を擁して、坐に艱苦を嘗めた。君は常に英氣を負ひ忠心を抱いてゐても、誰も認めてはくれず、金言玉性も空しく埋沒した。此憂を除くには唯佛道に賴る外はない。予は君と遠く隔つてゐて相遇ふ機會なく、七個月の中に三度君から書信を貰つた。併し舊時の餘歡は、復俱にすることは出來ない。時時君の舊

宅のあたりを訪うて、遙に君を憶ふのみである。茲に一千字の狂詩を作り、書狀に代へて遠く君に寄せる。

【餘論】馮班（鈍吟）曰く「勻細整贍、力自ら餘あり。長詩には敍置次第あり。起承轉合知らざるべからざるも、卻つて拘はり得ず。須らく變化飛動するを佳となすべし。此篇勻整の至、卻つて細膩省淨疊辭累句妃紅媲紫の病なし。長詩は詞の太だ煩しきを忌む。此の如くにして最も善し」と。唐宋詩醇に曰く「長律百韻は杜甫の夔府詠懷一篇より始まる。之に繼ぐ者は元微之・白居易なり。居易集中、百韻の詩凡て三篇。杜甫は排奡沈鬱、局陣變化す。その才氣筆力自ら居易の及ぶ所にあらず。居易は法律井然、條暢流美、實に後來の法となすべし。學者未だ杜の閫奧を闚ふ能はずんば、且らく此種より津を問へ。自ら艱澁凌亂の病なからん」と。甌北詩話に云はく「五言排律長篇、亦香山の多きに如く者あるなし。渭上退居一百韻・謫江州有東南行一百韻・微之以夢遊春七十韻見寄廣爲一百韻報之・又、代書詩寄微之一百韻・赴忠州舟中示弟行簡一五十韻・和微之投簡陽明洞五十韻・想東遊一五十韻・逢蕭徹話長安舊遊一五十韻・敍德抒情上宣城崔相公一四十韻・新昌新居四十韻、此外三十二十韻の如きもの更に勝げて計るべからず。此れ亦古來未だあらざる所なり」と。

和鄭元及第後。秋歸洛下閒居

同高侍郎下、隔レ年及第。

鄭元が及第の後、秋洛下に歸りて閒居するに和す

同じく高侍郎の下に年を隔てて及第す

勤苦成レ名後。優遊得レ意間。
玉憐同匠琢。桂恨隔年攀。
山靜豹難レ隱。谷幽鷽暫還。
微吟詩引レ步。淺酌酒開レ顏。
門迴暮臨レ水。窓深朝對レ山。
雲衢日相待。莫誤許身閑。

勤苦名を成して後、優遊意を得る間。
玉は同匠の琢つを憐み、桂は隔年に攀づるを恨む。
山靜かにして豹隱れ難く、谷幽かにして鷽暫く還る。
微吟して詩步を引き、淺酌して酒顏を開く。
門迴かにして暮に水に臨み、窓深うして朝に山に對す。
雲衢日に相待つ、誤つて身の閑なるを許す莫れ。

【字解】〔一〕鄭元　一に鄭方に作る。〔二〕雲衢　宮中。

【題義】鄭元は樂天が及第した翌年（貞元十七年）樂天と同じく高郢の主司の下に及第した人である。此詩は鄭元が及第の後、洛陽に歸つて閒居してゐる時の作に和したのである。

【詩意】勤苦の功空しからず、首尾よく及第して鄉里に歸つて優遊してゐる。君の得意想ふべしである。君と僕とは同じ試驗官の下に、年を隔てて及第した間柄であるから、何となく親みの深さを感ずる。君は非常の材を抱いてゐる身であるから、長く鄉里に埋もれてゐる人ではない。ただ暫く閒步して詩を吟じ淺酌して愁を遣り、暮には水に臨み、朝には山を見て樂んでゐるのであらう。予は宮闕に事へて毎日君の出仕を待つてゐる。いつまでも閒居に耽つて身を誤つては宜しくない。

與諸同年賀座主侍郎新拜太常同宴蕭尚書亭

子座主於蕭尚書下及第、得羣字韻。

諸同年と座主侍郎が新に太常に拜せられしを賀し、同じく蕭尚書の亭子に宴す　坐主蕭尚書の下に於て及第す、羣字の韻を得たり

寵新卿典禮。會盛客徵文。寵新にして卿禮を典り、會盛んにして客文を徵す。
不失遷鶯侶。因成賀燕羣。遷鶯の侶を失はず、因つて賀燕の羣を成す。
池臺晴間雪。冠蓋暮和雲。池臺晴れて雪を間へ、冠蓋暮に雲に和す。
共仰曾攀處。年深桂尚薰。共に曾て攀ぢし處を仰げば、年深うして桂尚薰ず。

【字解】【一】諸同年　同じ年に文官試驗に及第した仲間をいふ。【二】座主　主司ともいふ、試驗官なり。侍郎は高郢を指す。【三】太常　官名。拜は任命されること。【四】蕭尚書　高郢の受驗の時に座主たりし人、蕭昕なり。亭子は亭なり。【五】遷鶯　幽谷を出で喬木に遷る鶯。及第者に喩ふ。【六】賀燕　燕は宴に同じ。祝賀の宴。【七】冠蓋　冠と車蓋。衣冠といふが如し。

【題義】同年に及第した仲間が集つて、當時の試驗官であつた高郢の新に太常に任ぜられたのを祝賀する爲に、高郢の時の試驗官であつた蕭尚書の亭に宴會を開き、其席上互に韻字を分けて詩を作り樂天は羣の字を得たといふのである。

【詩意】吾等の座主が新に君寵に浴して太常に任ぜられたので、蕭尚書が祝賀の會を催され、今日の盛會に於て一座の人が各〻詩を作つた。當時の及第者が悉く會して祝賀の宴を成すことは實に悅ばしいことだ。池殿には晴れてちらちら雪を降らし、衣冠を著けた人人が夕暮の雲に和樂する。嘗て及第した時の座主を仰ぎ望めば、年德の愈〻高きを感ずる。

東都冬日會諸同年宴鄭家林亭得先字

東都冬日諸同年に會して鄭家の林亭に宴す　先の字を得

盛時陪上第。暇日會羣賢。盛時上第に陪し、暇日羣賢を會す。
桂折因同樹。鸞遷各異年。桂折つて樹を同じうし、鸞遷各〻年を異にす。
賓階紛組珮。妓席儼花鈿。賓階組珮紛たり、妓席花鈿を儼にす。
促膝齊榮賤。差肩次後先。膝を促けて榮賤を齊しうし、肩を差して後先を次づ。
助歌林下水。銷酒雪中天。歌を助く林下の水、酒を銷す雪中の天。
他日升沈者。無忘共此筵。他日升沈する者、忘るる無かれ此筵を共にせしことを。

【字解】【一】東都　洛陽。【二】諸同年　前の詩を見よ。【三】盛時　昭代といふが如し。上第は及第なり。【四】桂折　及第すること。【五】鸞遷　前詩の遷鶯を見よ。【六】賓階　客の登る階段。組珮は印綬幷に玉佩。【七】花鈿　長恨歌に見ゆ。【八】榮賤　貴賤なり。【九】差肩　肩をならべる。【一〇】他日　後日。升沈は升進する者と零落する者。

【題義】冬、洛陽で、同年に及第した仲間を會して鄭氏の林亭に宴を開いたことを述べた詩である。

【詩意】幸に昭代の惠に遇ひ、皆及第の榮譽を荷ひ、茲に羣賢相會して宴を開いた。席に列する者は年こそちがへ、皆同じ主司（試驗官）の下に及第した人人である。衆賓の席には印綬や玉佩が入り亂れ、美妓の席には髮飾がきらびやかに列んでゐる。貴賤齊しく膝を交へ、先輩後輩肩を比べ、林下の水流は歌聲を助け、中天の寒雪が酒氣を銷する。他日或は升進する者もあり零落する者もあるであらうが、今日此筵を共にした好みを忘れぬやうに致さうではないか。

敍德書情四十韻。上宣歙崔中丞

宣州薦送及第後、重投二此書一。

德を敍し情を書す四十韻。宣歙の崔中丞に上る　宣州薦送及第して後重ねて此書を投ず

元聖生乘運。忠賢出應期。
還將稽古力。助立太平基。
土控吳兼越。州連歙與池。
山河地襟帶。軍鎭國藩維。
廉察安江甸。澄淸肅海夷。
股肱分外守。耳目付中司。
楚老歌來暮。秦人詠去思。
望如時雨至。福似歲星移。
政靜民無訟。刑行吏不欺。
撝謙驚主寵。陰德畏人知。
白玉慙溫色。朱繩讓直辭。
行爲時領袖。言作世著龜。
盛幕招賢士。連營訓銳師。
光華下鵷鷺。氣色動熊羆。
出入麾幢引。登臨劍戟隨。
好風迎解榻。美景待搴帷。
晴野霞飛綺。春郊柳宛絲。
城烏驚畫角。江鴈避紅旗。
藉草朱輪駐。攀花紫綬垂。
山宜謝公屐。洲稱柳家詩。

元聖生れて運に乘じ、忠賢出でて期に應ず。
還稽古の力を將ひ、助けて太平の基を立つ。
土は吳と越とを控へ、州は歙と池とを連ぬ。
山河は地の襟帶、軍鎭は國の藩維。
廉察江甸を安んじ、澄淸海夷を肅す。
股肱は外守を分ち、耳目は中司に付す。
楚老は歌來暮を歌ひ、秦人は去思を詠ず。
望は時雨の至るが如く、福は歲星の移るに似たり。
政靜かにして民訟なく、刑行はれて吏欺かず。
撝謙主の寵に驚き、陰德人の知るを畏る。
白玉溫色に慙ぢ、朱繩直辭を讓る。
行は時の領袖となり、言は世の著龜と作る。
盛幕賢士を招き、連營銳師を訓ふ。
光華鵷鷺を下し、氣色熊羆を動かす。
出入麾幢引き、登臨劍戟隨ふ。
好風迎へて榻を解き、美景待ちて帷を搴ぐ。
晴野霞綺を飛ばし、春郊柳絲を宛す。
城烏畫角に驚き、江鴈紅旗を避く。
草を藉いて朱輪駐り、花を攀ぢて紫綬垂る。
山は謝公の屐に宜しく、洲は柳家の詩に稱ふ。

酒氣和芳杜。(二六)絃聲亂子規。
分毬齊馬首。列舞匝蛾眉。(二七)
醉惜年光晚。歡憐日影遲。
廻塘排玉棹。歸路擁金羈。
自顧龍鍾者。嘗蒙(二八)噢咻之。(二九)
仰山塵不讓。涉海水難爲。
身忝鄉人薦。名因國士推。(三〇)
提攜增善價。拂拭長妍姿。
射策端心術。(三一)遷喬整羽儀。(三二)
幸穿楊遠葉。(三三)謬折桂高枝。(三四)
佩德潛書帶。(三五)銘仁暗勒肌。
鞠躬趨館舍。(三六)拜手挹階墀。
霄漢程雖在。(三七)風塵迹尚卑。(三八)
弊衣羞素布。敗屋厭茅茨。(三九)
養乏晨昏膳。(四〇)居無伏臘資。(四一)
盛時貧可恥。壯歲病堪嗤。
擢第名方立。(四二)耽書力未疲。(四三)
磨鉛重剸割。(四四)策蹇再奔馳。(四五)
相馬須憐瘦。呼鷹正及飢。
扶搖重卽事。(四六)會有答恩時。

酒氣芳杜に和し、絃聲子規を亂る。
毬を分ちて馬首を齊しうし、舞を列ねて蛾眉を匝らす。
醉うては年光の晩るるを惜み、歡びては日影の遲きを憐む。
廻塘玉棹を排し、歸路金羈を擁す。
自ら顧みるに龍鍾たる者、嘗て之を噢咻するを蒙る。
山を仰げば塵讓らず、海を涉れば水爲し難し。
身は鄉人の薦を忝うし、名は國士の推に因る。
提攜して善價を增し、拂拭して妍姿を長ず。
策を射て心術を端し、喬きに遷りて羽儀を整ふ。
幸に楊の遠葉を穿ち、謬つて桂の高枝を折る。
德を佩びて潛に帶に書し、仁を銘じて暗に肌に勒す。
鞠躬して館舍に趨り、拜手して階墀に挹ふ。
霄漢程在りと雖も、風塵迹尚卑し。
弊衣素布を羞ぢ、敗屋茅茨を厭ふ。

養は晨昏の膳に乏しく、居は伏臘の資無し。
盛時貧恥づべし、壯歲病嗤ふに堪へたり。
第を擢んでて名方に立ち、書に耽りて力未だ疲れず。
鉛を磨して重ねて剸割し、蹇に策つて再び奔馳せん。
馬を相するには須く瘦せたるを憐むべく、鷹を呼ぶには正に飢に及ぶ。
扶搖して重ねて事に卽き、會ず恩に答ふる時あらん。

【字解】【一】宣歙　安徽省宣州の地。【二】元聖　大聖といふが如し。書經に「隶に元聖を求む」とある。伊尹を謂ふなり。ここは崔中丞を指す。【三】稽古　古道を考ふること。【四】歙與レ池　並に州の名。【五】襟帶　要害の地なるをいふ。【六】藩維　藩は籬、維は繫なり。國のかため。【七】廉察　按察といふが如し。【八】股肱　重臣。外守は地方官。【九】中司　中央政府の大官。【一〇】來朞　後漢書廉范傳に、蜀郡太守に遷る。舊制民の夜作を禁じ以て火災を防ぐ。范先令を毀創し、ただ嚴に水を儲へしむるのみ。百姓便となし之を歌つて曰く、廉叔度來ること何ぞ暮き、火を禁ぜず民作を安んず。平生孺なし今五袴と。【一一】秦人　長安の民。去思は去つて後之を思慕すること。【一二】歲星　木星なり。木星の在る所を凶方となす。故に其の去るを悅ぶなり。【一三】撝謙　謙遜なこと。【一四】朱繩　まつすぐな繩。【一五】領袖　かしら。【一六】著龜　めどぎ、かめ。並に卜筮に用ふるもの。【一七】鋭師　精鋭な軍兵。【一八】鵷鷺　官吏をいふ。【一九】熊羆　勇士。【二〇】麾幢　指揮する旌旗。【二一】榻こしかけ。【二二】宛レ絲　枝を卷くこと。【二三】畫角　つのぶえの音。【二四】紫綬　公侯の印綬。【二五】謝公屐　謝靈運山を尋ね嶺に陟るに、嘗て木屐を著け、山に上るには其前齒を去り、山を下るには其後齒を去る。【二六】芳杜　杜は杜若、香草なり。【二七】蛾眉　美人。【二八】龍鍾　潦倒失意の貌。【二九】噢咻　痛念すること。【三〇】國士推　崔中丞の推薦。【三一】射レ策　進

士の試に應ずること。【三二】遷喬　幽谷を出でて喬木に遷る意。及第をいふ。羽儀は高位に陞りて世の儀表となること。【三三】穿二楊遠葉一　及第に喻ふ。【三四】折二桂高枝一　前に同じ。【三五】鞠躬　身をかがめて敬ふこと。【三六】拜手　敬禮すること。【三七】霄漢　青雲なり、高位高官に喻ふ。程は道程。【三八】風塵　道路に奔馳するをいふ。【三九】茅茨　茅葺き屋根。【四〇】晨昏膳　朝晩親に進むる食膳。【四一】伏臘　伏は夏、臘は冬の祭。【四二】盛時　昭代といふが如し。【四三】擢レ第　及第なり。【四四】鉛　鉛刀なり。【四五】策レ蹇　駑馬にむちうつ。【四六】扶搖　羽ばたきすること。

【題義】樂天は宣州から薦送せられて進士の試に應じ、中書舍人高郢の下で第四番で及第した。時に貞元十六年二月であつた。此詩は及第してから後江南に遊び復宣州に至り、德を敍し情を書して宣歙の崔中丞（名は衍）に上り、暗に辟舉を求めたものである。

【詩意】崔公は良い時に生れ合せ、時の期待に應じて忠賢を盡し、よく古道を修めて太平の基を助け立てた。御史中丞として天子の耳目となつてゐたが、轉じて宣歙の太守となり要害の地を鎭守することになつたので、楚地の人は來るの晩きを嘆じ、長安の人は去つて後まで慕つてゐる。されば時雨の至るが如き人望を得、歲星の去つたやうに福を齎し、民に訟なく吏は欺かず、治績が大に擧つた。また崔公は謙遜で君寵を得れば却つて驚き、陰德を施しては人に知らるるを畏れ、白玉も溫潤を讓り朱繩も其直に及ばない。其行は時の領袖たるに足り、其言は世の標準とするに足る。特に部下には文武の賢士を召集し、衆士を率ゐて山水の間に遊賞することもあり、馬首を齊うして打毬を演じたり、美妓を列ねて舞伎を賞したりすることもある。予は嘗て潦倒失意の時、公の推薦を蒙ることを得た。塵埃をも棄てず細流をも擇ばぬ山海の如き其度量の程が察せられる。そのおかげで予は進士の試に應じて首尾よく及第することが出來た。その恩德は永く肝に銘じて忘れず。恭しく其館舍に拜趨して其恩を謝する所以である。吾が官途は遼遠で今は世路に奔走してゐる。親を養ふことも出來ず、自活の資にも乏しいが、昭代に生れて永く貧賤に居るのは恥づべきことであるから、一層努力して榮達を圖らうと思つてゐる。馬を相するは瘦せた所がよく、（馬の價値は肉に在るのでなくて、骨に在るのであるから。）鷹を呼ぶには飢ゑた時がよい。（鷹は食に飽けば鳥を捕へようとはせずして飛び去つてしまふから。）予は此から羽ばたきをして飛躍を試み、必ず公の恩に報いようと思ふ。

和渭北劉大夫借二便秋遮虜一。寄二朝中親友一

渭北の劉大夫が便を秋遮虜に借りて、朝中の親友に寄するに和す

巨鎭爲二邦屏一。全材作二國楨一。巨鎭は邦の屏と爲り、全材は國の楨と作る。
韜鈐漢上將。文墨魯諸生。韜鈐は漢の上將、文墨は魯の諸生。
豹虎關西卒。金湯渭北城。豹虎は關西の卒、金湯は渭北の城。
寵深初受レ棨。威重正揚レ兵。寵深うして初めて棨を受け、威重うして正に兵を揚ぐ。
陣占二山河一布。軍由二水草一行。陣は山河を占めて布き、軍は水草に由つて行く。
夏苗侵二部落一。宵遁失二藩營一。夏苗部落を侵し、宵遁藩營を失ふ。

雲隊攢戈戟。風馳卷旆旌。
堠空烽火滅。氣勝鼓鼙鳴。
胡馬辭南牧。周師罷北征。
廻頭問天下。何處有欃槍。

【字解】【一】渭北　渭水の北。【二】秋遮虜　遮虜とは夷狄の侵入を防ぐこと。【三】巨鎭　重鎭なり。屏は藩屏。【四】全材　賢才といふが如し。楨は根本。【五】韜鈐　軍略。【六】文罍　文章。【七】豹虎　勇士に喩ふ。後漢の諺に「關西は將を出し、關東は相を出す」とある。【八】金湯　金城湯池。堅固な城。【九】棨　ほこ。【一〇】夏苗　夏の苗。【一一】宵遁　夜逃る。【一二】雲隊　雲の如き大軍。【一三】風馳　風の如く奔馳すること。【一四】堠　堡壘。【一五】鼓鼙　鼙は馬上で打つ鼓。【一六】胡馬　えびすの馬。南牧は南方で牧畜する。【一七】周師　周の軍。ここは唐の軍をいふ。【一八】欃槍　彗星なり。彗星が出れば兵戰が起るといふ傳說あり。

【題義】渭北を鎭護してゐる劉大夫が遮虜の使を利用して朝中の親友に寄せた詩に和した作である。

【詩意】君が今居る渭北の鎭臺は國家の藩屏であつて、君の賢才は國家の根幹である。軍略は漢の上將にも比すべく、文章は魯の諸生と技を爭ふに足り、關西の勇士を率ゐて金城湯池を守備し、山河を占めて陣を布き、水草を逐うて軍を進め、夏は部落の耕地を侵略し、夷狄は營を棄てて夜走る。雲霞の如き大軍が戈を攢めて進擊すれば、夷狄は旗を卷いて風の如く奔馳する。かくて烽火も消えて凱歌を奏し、胡馬は南方に牧することを罷め、吾が軍は北征を罷むるに至り、何處を見ても彗星などは見えず、天下が始めて泰平になるであらう。

題故曹王宅　宅在檀溪。

甲第何年置。朱門此地開。
山當賓閣出。溪繞妓堂廻。
覆井桐新長。蔭窓竹舊栽。
池荒紅菡萏。砌老綠莓苔。
捨館梁王去。思人楚客來。
西園飛蓋處。依舊月徘徊。

故の曹王の宅に題す　宅は檀溪に在り

甲第何れの年か置ける、朱門此地に開けり。
山は賓閣に當つて出で、溪は妓堂を繞つて廻る。
井を覆うて桐新に長じ、窓を蔭うて竹舊より栽う。
池荒れて紅菡萏あり、砌老いて綠莓苔あり。
館を捨てて梁王去り、人を思うて楚客來る。
西園飛蓋の處、舊に依つて月徘徊す。

【字解】【一】甲第　大邸宅をいふ。【二】朱門　朱塗の門。【三】菡萏　蓮花。【四】莓苔　こけ。【五】梁王　漢の賢王。ここは曹王に比していふ。【六】楚客　樂天自ら謂ふ。【七】飛蓋　車蓋を飛ばす。

【題義】唐の太宗の皇子曹王明の故宅に題した詩である。宅は湖北省襄陽縣の西南なる檀溪に在る。

【詩意】この大邸宅は何時建てたものか、今でも朱塗の門が儼然と開かれ、山に當つて賓閣が聳え、溪を繞らして妓堂が建てられ、桐は井戸の上を覆ひ、竹が窓の外に茂り、荒れた池には紅の蓮花が開き、古びた砌には綠の苔が生えてゐる。今曹王が薨去した後、王の遺風を慕つて來り訪へば、王存

生の頃車を飛ばした西園のあたりに、昔ながらの月が徘徊してゐる。

自江陵之徐州路上作。寄兄弟。

江陵より徐州に之く路上の作、兄弟に寄す

岐路南將北。離憂弟與兄。
岐路南と北と、離憂弟と兄と。

關河千里別。風雪一身行。
關河千里の別れ、風雪一身行く。

夕宿勞鄉夢。晨裝慘旅情。
夕に宿して鄉夢に勞し、晨に裝うて旅情を慘ましむ。

家貧憂後事。日短念前程。
家貧しうして後事を憂へ、日短うして前程を念ふ。

煙鴈翻寒渚。霜烏聚古城。
煙鴈寒渚に飜り、霜烏古城に聚る。

誰憐陟岡者。西楚望南荆。
誰か憐む岡を陟る者、西楚より南荆を望むを。

【字解】【一】岐路　わかれみち。　おひわけ。【二】離憂　離別の憂。【三】關河　山川といふが如し。【四】前程　前途。【五】西楚　徐州の地方。南荆は江陵の地方。孟康曰く、江陵を南楚となし、吳を東楚となし、彭城を西楚となす。項羽西楚の覇王となり、彭城に都すと。

【題義】江陵（湖北省荆州府治。）から徐州（江蘇省徐州府。）に行く途中で作り、兄弟に寄せた詩である。

【詩意】岐路に當つて各〻憂を抱き、兄弟が南と北とに手を分ち、吾は風雪を冒し千里の山河を過ぎて獨旅に上つた。夜は故郷の夢を見て心を勞し、朝は早く起きて旅の裝に思を焦す。家が貧乏なので後の事が氣にかかり、日が短いので行先を急がねばならぬ。夕方になれば雁が寒渚に飛び烏が古城に聚つて鳴いてゐる。急足で山阪を登りつつ、遙に西楚から南荆を望んで心を痛めてゐる吾を誰が憐れと思ふであらう。

酬哥舒大見贈　去年與哥舒等八人、同登科第。今敘會散之意。

哥舒大が贈られしに酬ゆ　去年に登る。今會散の意を敍す。

去歲歡遊何處去。
去歲歡遊して何の處にか去る、

曲江西岸杏園東。
曲江の西岸杏園の東。

花下忘歸因美景。
花下歸るを忘るるは美景に因り、

樽前勸酒是春風。
樽前酒を勸むるは是れ春風。

各從微官風塵裏。
各〻微官に從ふ風塵の裏、

共度流年離別中。
共に流年を度る離別の中。

今日相逢愁又喜。
今日相逢ひ愁へて又喜ぶ、

【字解】【一】曲江　長安の苑池の名。國史補に「既に捷ち、名を慈恩寺の塔に列する、之を題名といひ、大に曲江の亭子に醼する、之を曲江會といひ、又之を關醼といふ」とある。杏園は長安の西に在り、秦の宜春下苑の地なり。唐の新進士は多く此に遊宴す。【二】微官　卑官なり。風塵は道路に奔走すること。

八人分散兩人同。八人分散し兩人同じ。

【題義】同年に及第した仲間の一人なる哥舒大から詩を贈られたのに酬いた作である。

【詩意】去年は八人一緒に及第し、得意になつて、曲江や杏園に遊びあるいた。美景に見とれては花下に歸るを忘れ、春風に臨んでは互に樽酒を勸めた。それから卑官に任ぜられて世上に奔走し、東西に相別れて夢のやうに一年を送つた。今日君と相遇うて一つには愁へ一つには喜ぶ。卽ち八人の分散したのは愁ふるに足り、君と僕との遇つたのは喜ぶに足る。

和談校書秋夜感懷呈朝中親友

談校書が秋夜感懷に和し、朝中の親友に呈す

遙夜涼風楚客悲。
清砧繁漏月高時。
秋霜似鬢年空長。
春草如袍位尙卑。
詞賦擅名來已久。
煙霄得路去何遲。

遙夜涼風楚客悲む、
清砧繁漏月高き時。
秋霜鬢に似て年空しく長じ、
春草袍の如く位尙ほ卑し。
詞賦名を擅にしてより來已に久し、
煙霄路を得て去ること何ぞ遲き。

【字解】【一】遙夜　長夜といふが如し。
【二】清砧　きぬたの聲。繁漏は水時計の響のしげきこと。
【三】煙霄　青雲といふが如し。官位に喩ふ。
【四】漢庭　漢の朝廷。實は唐なれども漢を借りて言ふ。

【三】流年　流るるが如き歲月。

漢庭卿相皆知己。漢庭の卿相皆知己、
不薦揚雄欲薦誰。揚雄を薦めずして誰をか薦めんと欲する。

【題義】談校書（談は姓、校書郎は官名）の秋夜感懷と題する詩に和して朝廷に仕ふる親友に呈した詩である。

【詩意】夜も長く風も寒く、楚人悲愁の時節となり、砧の聲は澄み、水時計の響は繁く、月が天上に冴えてゐる。年老いて鬢毛は秋霜のやうに白いが、官袍の色は春草のやうに青く、官位は一向に進まず、詞名は徒に高いが青雲に登ることは遲く、いつまでも下僚に沈淪してゐる。朝廷の卿相は皆君の知己であるのに、揚雄にも比すべき君を推薦せず、一體誰を推薦しようと思つてゐるのであらう。實に心得ぬことだ。

【餘論】三四の句は倒裝法を用ひたので、鬢似秋霜一年空長、袍如春草一位尙卑といふ意味である。

感秋寄遠

秋に感じて遠きに寄す

惆悵時節晚。兩情千里同。
離憂不散處。庭樹正秋風。
燕影動歸翼。蕙香銷故叢。

惆悵す時節の晚、兩情千里同じ。
離憂散せざる處、庭樹正に秋風。
燕影歸翼を動し、蕙香故叢に銷す。

佳期與芳歲。牢落兩成空。

【字解】【一】兩情　君と僕と兩人の心。【二】離憂　離居の憂。【三】故叢　ふるきくさむら。【四】佳期　會合の時。芳歲は陽春の候。【五】牢落　さびしき貌。

【題義】秋の淋しさに感じて遠方の人に寄たせ詩である。

【詩意】今や悲哉の秋の晩となり、千里を隔てて君と僕とは同じく悲を抱いてゐる。離居の憂は常に散せず、庭樹は正に秋風を傳へ、燕も南方に歸り蕙草も枯れた。かくて相會ふことも出來ず、陽春の好季節も空しく去つて、徒に惆悵するのみである。

春題華陽觀

觀卽華陽公主故宅、有舊內人存焉

春華陽觀に題す

觀は卽ち華陽公主の故宅なり、舊の內人の存する有り

帝子吹簫逐鳳皇。空留仙洞號華陽。
落花何處堪惆悵。頭白宮人掃影堂。

【題義】春華陽觀に題した詩である。この道觀（道教の寺院）は唐の太宗の皇女華陽公主の舊宅で、

【字解】【一】帝子　皇女なり。吹簫は秦の穆公の女弄玉が蕭史といふ簫の名人に嫁し、遂に簫を吹き鳳に乘つて昇天した故事。【二】仙洞　仙人の住む洞、卽ち公主の舊宅。【三】宮人　宮女。影堂は公主の像を祀つてある堂。

もとの宮女が尙ほ生存してゐる。

【詩意】華陽公主は簫を吹き鳳皇に乘つて昇天し（薨去したこと）、その舊宅が華陽觀といふ道觀になつてゐる。吾今來り訪ひ、春老い花落つる處、公主に奉仕した宮女が白髮の老婆になつて、影堂を掃除してゐるのを見て、最も惆悵を感じた。

秋雨中贈元九

秋雨中元九に贈る

不堪紅葉青苔地。又是涼風暮雨天。
莫怪獨吟秋思苦。比君校近二毛年。

【題義】秋の雨の降る日に元稹に贈つた詩である。

【詩意】秋の夕暮、紅葉青苔の地に風寒く雨降りそそぐに遇ひては、實に悲に堪へない。獨り詩を吟じつつ秋思に苦んでゐるのを怪み給ふな。君に比して僕の方が較二毛の年に近いのだから固より悲むのは當然であらう。（樂天は元稹より三歲年長である。）

【字解】【一】二毛年　二毛は頭髮の斑白なこと。晉の潘岳の秋興賦に、余三十有二、始見二毛とある。

城東閑遊

城東閑遊

寵辱憂歡不レ到レ情。
任他朝市自營營。
獨尋秋景城東去。
白鹿原頭信レ馬行。

寵辱憂歡情に到らず、
任他れ朝市自ら營營たり。
獨秋景を尋ねて城東に去り、
白鹿原頭馬に信せて行く。

【題義】長安城東の郊外を閑遊したことを述べた詩である。

【詩意】寵辱も憂歡も全く忘れて我が心を侵すことがない。世上の俗人は名利に汲汲としてゐるが、そんなことはどうでもよい。吾は獨り秋色を探りつつ長安城東に去り、白鹿原の頭を馬の進むに任せて閑遊した。

【字解】【一】任他　ままよ、どうでもよいといふ意。朝市は俗人輩を指し言ふ。營營は、あくせくすること。
【二】白鹿原　卽ち霸上なり。終南山の麓に在り。

答韋八

麗句勞相贈。佳期恨有違。
早知留酒待。悔不趂花歸。
春盡綠醅老。雨多紅蕚稀。

韋八に答ふ

麗句相贈るを勞し、佳期違ふ有るを恨む。
早く酒を留めて待つを知らば、花を趂うて歸らざりし[を悔いん。]
春盡きて綠醅老い、雨多くして紅蕚稀なり。

【題義】韋八（韋は姓、八は排行）に答へて來遊を促した詩である。

【詩意】麗しき詩を贈つてくれたのは有りがたいが、顏を見せてくれないのは遺憾である。酒を留めて君の來るのを待つてゐたと知つたら、如何に君でも花を追つて來り會しなかつたことを悔いるであらう。今や春も盡きんとして濁酒も老い、雨が多いので花も大分散つた。併し今朝でも來て一醉すれば、まだ春の花に間に合うであらう。早く來て春に後れぬがよい。

【字解】【一】佳期　會合の時。【二】綠醅　濁酒。【三】紅蕚　紅の花。【四】芳菲　花草香美の貌。

華陽觀桃花時。招李六拾遺飲

華陽觀の桃花さく時、李六拾遺を招いて飲む

華陽觀裡仙桃發。
把酒看花心自知。
爭忍開時不同醉。
明朝後日卽空枝。

華陽觀裡仙桃發く、
酒を把り花を看て心自ら知る。
爭でか忍びん開時醉を同じうせざるに、
明朝後日卽ち空枝たらん。

【題義】華陽觀の桃の花の咲く頃、李六拾遺（六は排行、拾遺は官名）と俱に飲まんとして招請した

【字解】【一】華陽觀　道觀の名、前に見ゆ。
【二】仙桃　桃なり。道觀にある桃だから仙の字を冠した。

詩である。

【詩意】華陽觀の桃の花が開いた。酒を把り花を看れば自然と心も悟道に入るであらう。今花の盛に俱に飲まないのは誠に遺憾である。明日明後日となつては全く散り失せてしまふであらう。

和友人洛中春感

友人の洛中の春感に和す

莫悲金谷園中月。　悲む莫れ金谷園中の月、
莫歎天津橋上春。　歎く莫れ天津橋上の春。
若學多情尋往事。　若し多情を學びて往事を尋ねば、
人間何處不傷神。　人間何の處か神を傷ましめざらん。

【題義】友人が洛陽に遊び春に感じて作つた詩に和したのである。

【詩意】金谷園の月を見ても悲むな。天津橋上の春を見ても歎かぬがよい。若し多情の人に倣つて昔の事などを追想したらば、どこへ往つても傷神の種ならぬはないから。

【字解】【一】金谷園　洛陽の西に在り、晉の石崇の別莊のありし處。【二】天津橋　洛陽の橋の名。隋の煬帝都を遷し、洛水都を貫き天漢の象あるを以て、此橋を建てた。【三】人間　世間。

送張南簡入蜀

張南簡が蜀に入るを送る

昨日詔書下。求賢訪陸沈。　昨日詔書下り、賢を求めて陸沈を訪ら。
無論能與否。皆起徇名心。　能と否とを論ずることなく、皆徇名の心を起せり。
君獨南遊去。雲山蜀路深。　君獨南遊し去つて、雲山蜀路深し。

【字解】【一】陸沈　俗間に隠れてゐる者。【二】徇名　名を求めること。漢書に貪夫徇ㇾ財、烈士徇ㇾ名とある。

【題義】張南簡の蜀に遊ぶのを送つた詩である。

【詩意】先頃詔が下つて俗間に隠れてゐる賢者を求めることになつたので、才能のあるなしに拘らず、皆名を求め宦仕に就かうと志すやうになつた。然るに君は南方の雲山遠き蜀地に去つて遊び、敢て宦仕に心を奪はれないのは感心なことだ。

寄陸補闕　前年同登科

陸補闕に寄す　前年同じく登科す

忽憶前年科第後。　忽ち憶ふ前年科第の後、
此時鷄鶴蹔同羣。　此時鷄鶴蹔く羣を同じうせしことを。
秋風惆悵須吹散。　秋風惆悵して須らく吹き散ずべし、
鷄在中庭鶴在雲。　鷄は中庭に在り鶴は雲に在り。

【題義】前年一緒に及第した仲間の一人なる陸補闕（陸は姓、補闕は官名）に寄せた詩である。

【字解】【一】科第　登第、即ち及第。【二】鷄鶴　鈍才と俊才とに喩ふ。

【詩意】憶へば前年及第した時には、君の如き俊才も僕の如き鈍才も、暫らく名譽を倶にしたが、悲しいかな秋風の爲に吹き拂はれて、鷄の如き鈍才は下僚に沈淪してゐるが、鶴の如き俊才は高く青雲に飛揚してゐる。

華陽觀中。八月十五日夜。招友翫月

華陽觀中、八月十五日夜、友を招きて月を翫ぶ

人道中秋明月好。　人は道ふ中秋明月好しと、
欲邀同賞意如何。　邀へて同じく賞せんと欲す意如何。
華陽洞裏秋壇上。　華陽洞裏秋壇の上、
今夜清光此處多。　今夜清光此處多し。

【題義】八月十五日の夜に華陽觀に友を招き俱に月を賞せんとする詩である。

【詩意】中秋は明月を賞するによいとは皆人の言ふ所である。君を邀へて俱に今夜の月を賞翫したいと思ふが御意は如何であるか。特に華陽觀の壇上は最も月色の清い處であるから、此處で賞しようと思ふ。

【字解】【一】華陽觀　道觀の名、前に見ゆ。
【二】中秋　八月十五夜。

曲江憶元九

曲江にて元九を憶ふ

春來無伴閑遊少。　春來伴無くして閑遊少なく、
行樂三分減二一分。　行樂三分二分を減ず。
何況今朝杏園裏。　何ぞ況んや今朝杏園の裏、
閑人逢盡不逢君。　閑人逢ひ盡せども君に逢はず。

【題義】曲江に遊び元稹を憶つて作つた詩である。

【詩意】春になつて以來よい道伴がないので、閑遊することも少なく、行樂の度數も以前に比すれば三分の二を減じた。殊に今朝杏園に遊んだが、他の閑人にはやたらに逢つたが、君に逢はなかつたのは遺憾であつた。

【字解】【一】曲江　長安の遊園地。秦の宜春下苑の中に在り。其水曲折する故此名あり。
【二】杏園　これも宜春下苑の地なり。

過劉三十二故宅

劉三十二の故宅に過る

不見劉君來近遠。　劉君を見ざりしより來近遠、
門前兩度滿枝花。　門前兩度滿枝の花。
朝來惆悵宣平過。　朝來惆悵す宣平に過るを、

【字解】【一】近遠　近は帶説で意味を持たない。久しくなるといふ意。【二】宣平　三輔黃圖に、「長安ヨリ東ニ出ヅル北頭第一ノ城門、宣平門ト名ヅク」とある。【三】柳巷

柳巷當頭第一家。柳巷當頭第一の家。

【題義】劉三十二（名は敦質、校書郎たり。卷五に見ゆ）の舊宅の前を通つて作つた詩である。

【詩意】劉君と相見ざること久しく、門前を通つて二度春花の滿開なるを見た。今朝も宣平門外の道を過ぎ、柳巷のつきあたりの最初の家なる君が故宅を見て心を痛ましめた。

【字解】柳巷　柳の列び植ゑられてゐる街路。當頭　頭は、つきあたり。眞正面。

下邽莊南桃花　下邽莊南の桃花

村南無限桃花發。　村南限無く桃花發く、
唯我多情獨自來。　唯我多情にして獨自ら來る。
日暮風吹紅滿地。　日暮れ風吹きて紅地に滿つ、
無人解惜爲誰開。　人の誰が爲に開くかを解惜するなし。

【題義】下邽村南の桃花を見て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】下邽村南には無限に桃花が開いてゐる。余は唯獨り此花を慕つて見に來た。今や日暮れ風吹き落花地に敷けども、我等を慰める爲に開いた花の本意を解し、その散るのを愛惜する者もないとは實に不人情な人だちだ。

【字解】下邽莊　陝西省渭南縣の東北。莊は村邑なり。

三月三十日題慈恩寺　三月三十日、慈恩寺に題す

慈恩春色今朝盡。　慈恩の春色今朝盡く、
盡日徘徊倚寺門。　盡日徘徊して寺門に倚る。
惆悵春歸留不得。　惆悵す春歸りて留め得ず、
紫藤花下漸黃昏。　紫藤花下漸く黃昏。

【題義】三月三十日、春の盡くる日に慈恩寺に遊んで壁に題した詩である。

【詩意】慈恩寺の春も今日を以て終を告げるので、之を惜んで終日寺門のあたりを徘徊した。如何に悲んでも逝く春を引留めることは出來ず、遂に藤の花の下に立つて夕暮に及んだ。

【字解】【一】慈恩寺　長安の曲江池の畔に在る。【二】盡日　終日。

看揮家牡丹花戲贈李二十　揮家の牡丹花を看、戲に李二十に贈る

香勝燒蘭紅勝霞。　香は蘭を燒くに勝り紅は霞に勝れり、
城中最數令公家。　城中最も數ふ令公の家。
人人散後君須看。　人人散じて後君須らく看るべし、
歸到江南無此花。　歸つて江南に到らば此花無からん。

【字解】【一】揮家　揮は姓なり。一に渾に作る、亦姓なり。【二】令公　揮氏は嘗し中書令たり。故に令公と稱するならん。

【題義】 惲氏の家の牡丹の花を見て、戯に李二十(李文略)に贈つた詩である。

【詩意】 牡丹花の香は蘭麝を焚くに勝り、紅の色は霞に勝る。特に長安の城下では惲家の牡丹が最も名高い。人人が退散した後でゆつくり賞翫せられよ。江南に歸つては復と再び此花を見ることは出來まいから。

春中與盧四周諒(一)華陽觀同居

春中盧四周諒と華陽觀に同じく居る

性情懶慢好相親。　性情懶慢好く相親み、
門巷蕭條稱作鄰。　門巷蕭條鄰を作すに稱ふ。
背燭共憐深夜月。　燭を背けて共に憐む深夜の月、
蹋花同惜少年春。　花を蹋んで同じく惜む少年の春。
杏壇住僻雖宜病。　杏壇住僻にして病に宜しと雖も、
芸閣官微不救貧。　芸閣官微にして貧を救はず。
文行如君尚憔悴。　文行君の如くにして尚ほ憔悴す、
不知霄漢待何人。　知らず霄漢何人をか待つ。

【字解】 【一】 華陽觀　道觀の名、前に見ゆ。
【二】 蕭條　物淋しき貌。
【三】 杏壇　杏花の咲く花壇の意か。
【四】 芸閣　藏書の處をいふ。
【五】 憔悴　やせおとろへる。
【六】 霄漢　天上なり。朝廷に喩ふ。

【題義】 春、盧周諒(一本周鯨に作る、四は排行)と華陽觀に同居したことを述べた詩である。

【詩意】 君と僕とは疎懶の性質が似てゐるので善く氣心が合ひ、あたりが淋しいので遂に交際を結ぶことになつた。因つて燈を背けて共に月を賞したり、花に歩して共に少年の春を惜んだりしてゐる。杏花の咲く華陽觀は病を養ふに宜しいが、芸閣の官が卑く貧を救ふことの出來ぬのは氣の毒である。(盧周諒は校書郎であらう。)文章行儀が君のやうに立派であるのに、尚ほ下僚に沈淪してゐるのは誠に心得ぬことであるが、一體朝廷では如何なる人を拔擢する積りなのであらうか。

自城東至以詩代書戯招李六拾遺・崔二十六先輩

城東より至り、詩を以て書に代へ、戯に李六拾遺・崔二十六先輩を招く、

青門(一)走馬趂心期。　青門馬を走らせて心期を趂ふ、
惆悵歸來已校遲。　惆悵歸來已に校遲し。
應過唐昌玉蘂後。　應に唐昌玉蘂の後を過ぎ、
猶當崇敬牡丹時。　猶崇敬牡丹の時に當るべし。
暫遊還憶崔先輩。　暫く遊び還つて憶ふ崔先輩、
欲醉先邀李拾遺。　醉はんと欲して先づ邀ふ李拾遺。

【字解】 【一】 青門　長安城の東南の門。もと霸上門と名づく。色青きを以て青門といふ。心期は善く氣心の合ふ友。
【二】 唐昌　道觀の名。玉蘂は花の名。唐人甚だ此花を重んず。唐昌觀は此花の名所なり。
【三】 崇敬　寺の名。牡丹を以て名高し。

尚殘半月芸香俸。尚殘る半月芸香の俸、
不レ作二歸粮一作二酒貲一。歸粮と作さずして酒貲と作す。

【題義】長安城東から來て、詩を以て書簡に代へ、李拾遺と崔先輩とを招き、俱に飲まんとした詩である。

【詩意】青門に馬を驅り親友を訪うた處が、折惡しく逢ふことが出來ないで遲くなつて歸つた。既に唐昌觀の玉蘂は見頃を過ぎたが、崇敬寺の牡丹は丁度今が見頃であらう。暫く遊んで尚ほ足らずに崔先輩とも逢ひたくなり、李拾遺を呼び出して俱に一杯飲みたくもなつた。幸に半月分の俸祿がまだ殘つてゐるから、歸鄉の食糧にするよりは寧ろ酒代にしようと思ふ。

【四】芸香俸　校書郎の俸祿。此時樂天は校書郎であつた。
【五】酒貲　さかで。

盩厔縣北樓望レ山　自レ此後詩、爲二畿尉一時作

盩厔縣の北樓にて山を望む　此より後の詩、畿尉たる時作る

一爲二趨走吏一。塵土不レ開レ顏。一たび趨走の吏と爲つて、塵土顏を開かず。
孤負平生眼。今朝始見レ山。平生の眼に孤負して、今朝始めて山を見る。

【字解】盩厔　縣の名。陝西省西安府に屬す。【二】趨走吏　縣尉となりしこと。【三】孤負　そむく。

【題義】盩厔縣の北樓の上から山を望んで作つた詩である。此から後の詩は盩厔縣尉となつてからの作である。

【詩意】一たび縣尉となつてから、世の塵にまみれて顏も爲に汚れたが、今朝は久振りで平生に異り、始めて山を眺めて樂んだ。

縣西郊秋。寄二贈馬造一　縣の西郊の秋、馬造に寄贈す

紫閣峯西清渭東。紫閣峯の西清渭の東、
野煙深處夕陽中。野煙深き處夕陽の中。
風荷老葉蕭條綠。風荷の老葉蕭條として綠に、
水蓼殘花寂寞紅。水蓼の殘花寂寞として紅なり。
我厭二宦遊一君失意。我は宦遊を厭ひ君は失意、
可レ憐秋思兩心同。憐む可し秋思兩心同じ。

【題義】盩厔縣の西郊の秋色を賦して馬造に寄贈した詩である。

【詩意】紫閣峯の西渭水の東、野煙の深き處に夕陽の照す時、秋風に搖く蓮の葉が物淋しく綠を存し、水邊に咲く蓼の殘花が寂寞と紅を留めてゐる。今や我は官吏生活を厭ひ、君は失意を嘆じ、秋色を見て二人同じく心を痛めてゐる、誠に憐むべきことだ。

【餘論】甌北詩話に「六句にして七律一首を成すは青蓮(李白)集中已に之あり。香山最も多し。而し

【字解】【一】紫閣峯　陝西省鄠縣の東南に在る。清渭は清き渭水。【二】風荷　風に吹かるる蓮。蕭條は物淋しき貌。【三】水蓼　水邊に咲く蓼の花。【四】宦遊　官吏生活。

て其體又一ならず。此詩及び忠州種二桃杏一の如きは、前後單行、中間對を成す。此れ六句律の正體なり。櫻桃花下招レ客　詩の如きは前四句兩聯を作し、末二句對せざるなり。蘇州柳の如きは前二句對を作し、後四句對せざるなり。板橋路の如きは此れ通首對せず。而るに亦編して六句律詩中に在り。又一體なり。」とある。

別二韋蘇州一

韋蘇州に別る

百年愁裏過。萬感醉中來。
惆悵城西別。愁眉兩不レ開。

百年愁裏に過ぎ、萬感醉中より來る。
惆悵す城西の別れ、愁眉兩つながら開かず。

【字解】〔一〕韋蘇州　名は應物。貞元元年出されて蘇州刺史となる。其詩閑澹簡遠、人之を陶淵明に比し、稱して陶韋といふ。〔二〕百年　一生涯をいふ。

【題義】韋應物に別れたことを述べた詩である。

【詩意】君は殆ど一生を愁裏に過ごし、（韋應物は太和中年九十餘とあるから開元末年の生れで此時は年七十餘である）醉へば萬感更に胸中から湧いて來る。君と悲愁して城西に別れてから、相俱に愁の霽れる時がない。

戲題二新栽薔薇一　時尉二盩厔一

戲に新栽の薔薇に題す　時に盩厔に尉たり

移レ根易レ地莫二憔悴一。　根を移し地を易ふるも憔悴する莫れ、
野外庭前一種春。　野外庭前一種の春。
少府無レ妻春寂寞。　少府妻無くして春寂寞、
花開將レ爾當二夫人一。　花開かば爾を將つて夫人に當てん。

【題義】戲に新に栽ゑた薔薇に題した詩である。

【詩意】地を易へて移し植ゑても憔悴するには及ばぬ。野外にあつても庭前にあつても春に異ひはないのだから。特に縣尉殿はまだ獨身で春が來ても淋しいから、花が開いたらお前を妻にしよう程に。

【字解】〔一〕憔悴　やせ衰へる。〔二〕少府　縣尉の別稱、樂天自ら言ふ。

酬二王十八・李大見招一遊レ山

王十八・李大が山に遊ぶに招かれしに酬ゆ

自憐幽會心期阻。　自ら憐む幽會心期の阻るを、
復愧嘉招書信頻。　復愧づ嘉招書信の頻なるを。
王事牽レ身去不レ得。　王事身を牽いて去り得ず、
滿山松雪屬二他人一。　滿山の松雪他人に屬す。

【字解】〔一〕幽會　靜かなる會合。心期は氣心の合つた友。〔二〕嘉招　よき招き。

【題義】王十八（質夫）李大の兩人が山に遊ばうと招待の手紙をよこしたに就いて此詩を贈つて答へたのである。

【詩意】自ら親友と相會することの出來ないのを恨み、又折角招待の手紙をくれたことを辱く存ずる。生憎職務上の差支があつて往かれないので、滿山の松雪の景を他人に任せるのを惜んでゐる。

縣南花下。醉中留劉五

縣南花下、醉中劉五を留む

百歲幾廻同酩酊。
一年今日最芳菲。
願將花贈天台女。
留取劉郎到夜歸。

【字解】【一】百歲　一生涯をいふ。
【二】芳菲　花草香美の貌。
【三】天台女　天台山は浙江省天台縣の北に在り。漢の劉晨・阮肇、此山に入りて藥を採る。二女子に遇ふ。留まること半歲にして歸らんことを求む。家に抵れば已に七世なりと。【四】留取　ひきとめておくこと。劉郎は劉五なり。

【題義】盩厔縣南の花の下で、醉うて劉五を引留めた詩である。

【詩意】一生の中に幾回君と醉を俱にすることが出來よう。恐らく多くはあるまい。況んや今日は一年中の花の盛なのだから、そんなに歸りを急がぬがよい。願はくは此花を天台の仙女に贈り、仙女をして君を引留めさせて、夜になつてから歸したいものだ。

【餘論】劉晨と劉五と同姓だから天台仙女の故事を用ひたのである。

宿楊家

楊家に宿す

楊氏弟兄俱醉臥。
披衣獨起下高齋。
夜深不語中庭立。
月照藤花影上堦。

【字解】【一】高齋　高樓。

【題義】楊氏の家に宿泊したことを述べた詩である。

【詩意】楊氏兄弟は俱に醉ひつぶれてしまつたが、やがて衣を整へ起きて高樓を下り、夜深けに默然として中庭に立てば、月は藤花を照して階上に影をうつしてゐた。

醉中留別楊六兄弟

三月二十日別　醉中楊六兄弟に留別す　三月二十日に別る

春初攜手春深散。
無日花間不醉狂。

春初に手を攜へて春深けて散じ、
日として花間に醉狂せざるは無し。

別後何人堪共醉。　別後何人か共に醉ふに堪へん、
猶殘十日好風光。　猶殘る十日の好風光。

【題義】醉うて楊六兄弟に別るる時記念に留めた詩である。

【詩意】春の初から君等兄弟と俱に遊び、今春深けて手を分つに至るまで、一日も花の下に醉狂せぬことはなかつた。君等と別れて後は、まだ春が十日殘つてゐるが、誰と酣醉を共にすることが出來るであらう。

醉中歸盩厔

醉中盩厔に歸る

金光門外昆明路。　金光門外昆明の路、
半醉騰騰信馬廻。　半醉騰騰として馬に信せて廻る。
數日非關王事繫。　數日王事の繫に關るに非ず、
牡丹花盡始歸來。　牡丹花盡きて始めて歸り來る。

【題義】醉うて長安から盩厔縣に歸つたことを述べた詩である。

【詩意】金光門外の昆明池畔の路をば、半酒に醉うて馬の進むに任せて歸つた。數日間は全く職務上の繫累を離れ牡丹を賞して日を送り、花が盡きたので歸つて來たのである。

【字解】〔一〕金光　長安城門の名。昆明は長安の西南に在る池の名。
〔二〕騰騰　をどりあがる貌。

遊雲居寺。贈穆三十六地主

雲居寺に遊び、穆三十六地主に贈る

亂峯深處雲居路。　亂峯深き處雲居の路、
共蹋花行獨惜春。　共に花を蹋みて行き猶春を惜む。
勝地本來無定主。　勝地本來定主無し、
大都山屬愛山人。　大都山は山を愛する人に屬す。

【題義】雲居寺に遊んで地主たる穆氏（三十六は排行）に贈つた詩である。

【詩意】亂峯の竝び峙つ所の雲居寺に至る路をば、花を蹋みつつ行つて獨り春色を賞した。本來勝地には定まつた持主はない。要するに愛賞する人の所有と謂つてよいのである。

【字解】〔一〕地主　所在地の主人。
〔二〕勝地　景色のよい土地。

和王十八薔薇澗花時。有懷蕭侍御。兼見贈

王十八が薔薇澗の花時、蕭侍御を懷ふあり、兼ねて贈らるるに和す

霄漢風塵俱是繫。　霄漢風塵俱に是れ繫がる、
薔薇花委故山深。　薔薇花委ちて故山深し。
憐君獨向澗中立。　憐む君が獨澗中に向つて立つことを、

【字解】〔一〕霄漢　天上。宮中に喩ふ。風塵は俗世間。

一把紅芳三處心。一たび紅芳を把る三處の心。

【題義】王十八（質夫）が薔薇澗の花の咲く時、蕭侍御を懷ひ、且又余にも詩を贈られた。因つて其詩に和したといふ意である。

【詩意】或は宮中に仕へ、或は俗界に在りて皆職責に繫られてゐるが、故郷では今や薔薇の花が深く地に落ち、君が獨り薔薇澗中に立つて、紅芳を把り遙かに三個處に分れてゐる吾吾の心を思ひやつてゐるのを憐む次第である。

【餘論】卷五の「招王質夫」と題する詩によれば、王質夫は一閑人であるらしく、又「見蕭侍御憶舊山草堂」詩上、因以繼和」と題する詩によれば、蕭侍御は盩厔縣の人らしい。

【字解】【一】紅芳　薔薇の花。

再因公事到駱口驛

今年到時夏雲白。　今年到る時夏雲白し、
去年來時秋樹紅。　去年來りし時秋樹紅なり。
兩度見山心有愧。　兩度山を見て心に愧づる有り、
皆因王事到山中。　皆王事に因つて山中に到る。

【題義】今年此驛に來た時は夏であり、去年來た時は秋であつた。二度此驛の山を見て自ら心に愧ぢた。そは他ではない。いつも公用で山に來るので、遊賞の爲に來るのでないからである。

【餘論】卷五の「祇役駱口驛、因與王質夫同遊秋山、偶題三韻」の詩を參照せられよ。

【字解】【一】駱口驛　驛の名。

期李二十文署・王十八質夫不至。獨宿仙遊寺

文署也從牽吏役。　文署也吏役に從牽し、
質夫何故戀囂塵。　質夫は何故ぞ囂塵を戀ふる。
始知解愛山中宿。　始めて知る解く山中の宿を愛するは、
千萬人中無一人。　千萬人中一人無きを。

【題義】李文署・王質夫と俱に仙遊寺に遊ばうと約して置いたが、兩人とも約に背いて至らず、因つて獨り仙遊寺に宿泊したといふ意である。

【詩意】文署は役目の爲に妨げられ、質夫は何故か俗塵を囂つて、共に約に背いて來ない。因つて眞に山中に宿することを好む人は、千萬人中一人もないといふことを知つた。

酬趙秀才贈新登科諸先輩

趙秀才が新登科の諸先輩に贈りしに酬ゆ

【字解】【一】囂塵　俗世間。

莫レ羨蓬萊鸞鶴侶。　羨む莫れ蓬萊鸞鶴の侶、
道成羽翼自生レ身。　道成つて羽翼自ら身に生ず。
君看名在二丹臺一者。　君看よ名の丹臺に在る者、
盡是人間修道人。　盡く是れ人間修道の人。

【題義】趙秀才が新に登第した先輩に贈つた詩に答へた作である。

【詩意】蓬萊の仙山に居る鸞鶴を羨むな。道さへ成れば自ら羽翼を生じて誰でも鸞鶴に伍することが出來るのである。かの丹臺に名を列する者を見られよ。皆世間に居る時に道を修めた人である。

過二天門街一　天門街を過ぐ

雪盡終南又欲レ春。　雪盡きて終南又春ならんと欲す、
遙憐翠色對二紅塵一。　遙に憐む翠色の紅塵に對するを。
千車萬馬九衢上。　千車萬馬九衢の上、
廻レ首看レ山無二一人一。　首を廻らして山を看るは一人も無し。

【題義】天門街を過ぎて所感を述べた詩である。

【字解】【一】趙秀才　趙は姓、秀才は科目の名、秀才の試驗に及第した人。【二】新登科　試に應じて及第した者。【三】蓬萊　仙島の名。鸞鶴は仙人の乘る所の鳥。及第者に喩ふ。【四】丹臺　仙人の居る所。

【字解】【一】天門街　長安の街名。【二】終南　長安の南に在る山の名。【三】紅塵　熱鬧繁華なること。

【詩意】雪が消えて終南山も春色を呈するやうになつた。吾は遙に其翠色が長安の紅塵と相對してゐるのを愛する。長安の市街には車や馬が織るが如く往來してゐるが、誰一人首を廻らして此景を賞する者もない。何と不風流なことであらう。

惜二玉蘂花一。有レ懷二集賢王校書起一

玉蘂花を惜み、集賢王校書起を懷ふあり

芳意將レ闌風又吹。　芳意將に闌ならんとして風又吹く、
白雲離レ葉雪辭レ枝。　白雲葉を離れ雪枝を辭す。
集賢讐校無二閑日一。　集賢讐校して閑日無し、
落二盡瑤花一君不レ知。　瑤花を落盡するも君知らず。

【題義】玉蘂花の散るのを惜むに就いて集賢校書王起を懷うて作つた詩である。集賢院・唐昌觀・翰林院等は皆此花の名所である。

【詩意】花も既に盛を過ぎた所へ風さへ吹き起つたので、雲の如く雪の如き花が枝葉を離れて散らうとしてゐる。君は集賢院に在りて圖書を校讐して一日の閑もなく、花の散るのも知らずにゐるであらう。

【字解】【一】玉蘂花　花の名。唐人甚だ此花を重んず。【二】集賢王校書起　集賢校書は官名、集賢院にゐて書籍を讐校することを掌る。王起は姓名。【三】讐校　書籍をつき合せて其誤を摘擧すること。【四】瑤花　玉の花。玉蘂花をいふ。

春送盧秀才下第遊太原謁嚴尚書

春盧秀才が下第して太原に遊び嚴尚書に謁するを送る

未將時會合。且與俗浮沈。
鴻養青冥翮。蛟潛雲雨心。
煙郊春別遠。風磧暮程深。
墨客投何處。幷州舊翰林。

未だ時と會合せず、且く俗と浮沈す。
鴻は青冥の翮を養ひ、蛟は雲雨の心を潛む。
煙郊春別遠く、風磧暮程深し。
墨客何處にか投ずる、幷州の舊翰林。

【字解】【一】下第　落第。【二】青冥翮　青天に飛翔する翼。【三】雲雨心　雲雨を得て天に升る心。【四】風磧　風の吹く河原。暮程は日暮の道。【五】墨客　文人をいふ。【六】幷州　山西省太原の地。舊翰林は、もとの翰林學士嚴尚書をいふ。

【題義】春、盧秀才が落第して太原に遊び嚴尚書に謁せんとするを送る詩である。

【詩意】君は未だ良い時運に際會せぬ故、暫く世俗の人と俱に俯仰してゐる。譬へば鴻が後日晴天に飛翔すべき翼を養ひ、蛟龍が一時雌伏して雲雨を得て升天する時を待つてゐるやうなものだ。さて今煙郊に遠く手を分ち、風磧の間の夕暮の道を急ぎつつ、君は何處を指して往くかといふに、流石に文人だけあつて幷州の舊翰林嚴尚書の許に行くのである。

長安送柳大東歸

長安にて柳大の東歸を送る

白社羈遊伴。青門遠別離。
浮名相引住。歸路不同歸。

白社羈遊の伴、青門に遠く別離す。
浮名相引住し、歸路同歸せず。

【字解】【一】白社　地名。今の河南省洛陽縣の東に在り。羈遊は行遊なり。【二】青門　長安城の東南の門。【三】引住　ひきとめる。

【題義】長安で柳大が東の洛陽の方に歸るのを送る詩である。

【詩意】君は僕が白社にゐた頃の遊仲間であるが、今長安の青門で君と遠く別れることになつた。僕は浮名に引留められ、君と同じく東に歸ることも出來ぬ。俗氣の多い吾が身が愧かしい。

送文暢上人東遊

文暢上人の東遊を送る

得道卽無著。隨緣西復東。
貌依年臘老。心到夜禪空。
山宿馴溪虎。江行濾水蟲。
悠悠塵客思。春滿碧雲中。

道を得ては卽ち著するなし、緣に隨つて西復東す。
貌は年臘に依つて老い、心は夜禪に到つて空し。
山宿溪虎を馴し、江行水蟲を濾す。
悠悠たり塵客の思、春は碧雲の中に滿つ。

【字解】【一】文暢上人　佛僧の名。韓退之に送浮屠文暢師序あり、中に貞元十九年春、將行東南とあり。此詩或は同時の作

か。【二】無レ著　執著のないこと。【三】隨レ緣　佛語なり。其機緣に隨ひ勉强を加へざるを謂ふ。【四】年臘　僧の年を臘といふ。年歲といふが如し。【五】夜禪　夜の坐禪。【六】悠悠　憂ふる貌。塵客は俗人。樂天自ら言ふ。

【題義】文暢上人の東方に出遊するを送る詩である。

【詩意】上人は佛道の修業が積んでゐるから物事に執著がなく、機緣のままに西に東に遊行してゐる。容貌は年齡と共に老いたが心は夜の坐禪によつて益〻空になつた。今東方に往くに方り山に宿しては溪虎を馴らし、水を行きては、水蟲を伏しなどするであらう。我は俗人の情として別を惜むの情に堪へないが、今や春色碧雲の中に滿つる好季節であるから、俗人の情などを顧みずに行くが宜しい。

社日關路作

晚景函(一)關路。涼風社(二)日天。
青巖新有レ鸞。紅樹欲レ無レ蟬。
愁立驛樓上。厭レ行官堠(三)前。
蕭條(四)秋興苦。漸近二毛(五)年。

【字解】【一】函關　函谷關。【二】社日　立秋後第五の戊の日。此日后土を祀る。【三】官堠　一里塚。【四】蕭條　物淋しき貌。【五】二毛　胡麻鹽あたま。晉の潘岳の秋興賦に、余三十有二、始見二二毛一とある。

【題義】秋の社日の頃函谷關の附近を過ぎし時の景況を述べた詩である。

【詩意】秋風の寒き函谷の夕暮に旅路を急げば、青苔のむした巖頭に珍らしく燕の飛ぶのを見、紅葉した樹には蟬の聲も殆ど聞えない。愁を抱いて驛樓の上に立ち、行きなやんで一里塚の前を過ぎなどすれば、吾が身は潘岳が二毛を悲んだ年に近くなつたので、物淋しき感に堪へられない。

重到二虢村宅一有レ感

重ねて虢村の宅に到りて感あり

欲レ入二中門一淚滿レ巾。　中門に入らんと欲して淚巾に滿つ、
庭花無レ主兩廻レ春。　庭花主無くして兩び春を廻す。
軒窓簾幕皆依レ舊。　軒窓簾幕皆舊に依る、
只是堂前欠二一人一。　只是れ堂前一人を欠く。

【題義】再び虢村の宅に往き感ずる所ありて作つた詩である。

【詩意】中門に入らんとして先づ淚を流し、主なき庭の花が再び年を過ぎたことを憐んだ。窓も幕も昔の儘であるのに、主人の姿の見えないのが物足りない。

亂後過二流溝寺一

亂後流溝寺に過る

九月徐州新戰後。
悲風殺氣滿山河。
唯有流溝山下寺。
門前依舊白雲多。

九月徐州新戰の後、
悲風殺氣山河に滿つ。
唯流溝山下の寺有り、
門前舊に依つて白雲多し。

【題義】貞元十四年淮西の吳少誠叛す。十五年宣武軍節度使董晉の卒するや、留後陸長源を殺す。因つて諸道の兵に詔して淮西を討たしむ。これを汴徐の變といふ。此詩は此戰亂の後、徐州の流溝寺を訪うて作つたのである。

【詩意】秋九月、新戰の後なので、徐州に於ては何處を見ても悲風殺氣が山河に滿ちてゐる。ただ流溝山麓の寺のみは昔の儘に白雲が低迷して、浮世をよそに超然としてゐる。

【字解】【一】徐州　古の九州の一。江蘇・山東・安徽の三省に跨る。
【二】殺氣　殺伐の氣。
【三】流溝山　徐州に在る山の名。

歎髮落

多病多愁心自知。
行年未老髮先衰。
隨梳落去何須惜。
不落終須變作絲。

髮の落つるを歎ず

多病多愁心自ら知る、
行年未だ老いざるに髮先づ衰ふ。
梳るに隨つて落ち去る何ぞ惜むを須ひん。
落ちずんば終に須らく變じて絲と作るべし。

【題義】毛髮の脫落するのを悲んだ詩である。

【詩意】吾が多病多愁は年未だ老ゆるに至らざるに先づ毛髮が衰へるのを見てもわかる。梳づる後から脫けて落ちるが敢て惜しいとも思はない。どうせ脫けずに居れば白毛になるのであるから。

【字解】【一】行年　年齡。
【二】絲　白髮。

留別吳七正字

成名共記甲科上。
署吏同登芸閣間。
唯是塵心殊道性。
秋蓬常轉水長閑。

吳七正字に留別す

名を成して共に記す甲科の上、
吏に署せられて同じく登る芸閣の間。
唯是れ塵心道性に殊なり、
秋蓬常に轉じて水長く閑なり。

【題義】集賢殿正字（官名）吳七（七は排行）に別れて去る時に贈つた詩である。

【詩意】君と僕とは共に甲科に及第し、同じく小吏となつて祕書を校讐する役目になつたが、我が塵心は道性に異にして吏職に安んずることが出來ず、秋の蓬や谷川の水の如く、處定めで流轉してゐる。

【字解】【一】甲科　進士に甲乙二科あり。試題難易の分なり。
【二】芸閣　祕書を藏する處。
【三】塵心　俗氣。

除夜宿洛州

家寄關西住。身爲河北遊。

除夜洛州に宿す

家は關西に寄りて住し、身は河北の遊を爲す。

(一)蕭條歲除夜。旅泊在洛州。

【字解】【一】除夜　十二月三十日の夜。【二】蕭條　淋しき貌。

【題義】大晦日の晩に洛州（今の直隷省永年縣）に旅宿したことを述べた詩である。

【詩意】吾が家族は關西に寄寓してゐるが、吾は獨り河北の地方を旅行し、何となく物淋しき大晦日の晩に洛州に旅寢の夢を結んだ。誠に心細いことだ。

邯鄲冬至夜思家

邯鄲にて冬至の夜家を思ふ

邯鄲驛裏逢冬至。　邯鄲驛裏冬至に逢ふ、
抱膝燈前影伴身。　膝を抱きて燈前影身に伴ふ。
想得家中夜深坐。　想ひ得たり家中夜深けて坐し、
還應說著遠行人。　還つて應に說著すべし遠行の人。

【字解】【一】說著　語る。著は助辭。遠行人は樂天自ら言ふ。

【題義】古の趙の都なる邯鄲に宿し、冬至の夜、家族の人人を思うて作つた詩である。

【詩意】邯鄲驛に宿泊して丁度冬至に逢ひ、無量の感慨に驅られ、燈前に膝を抱いて孤影蕭然としてゐる。家鄕を回想すれば、此夜深に一家團欒して、遙に吾が身の上を案じて語り合つてゐるであらう。

冬至夜懷湘靈

冬至の夜湘靈を懷ふ

(一)豔質無由見。寒衾不可親。　豔質見るに由無く、寒衾親む可からず。
何堪(二)最長夜。俱作獨眠人。　何ぞ堪へん最も長夜、俱に獨眠の人と作る。

【字解】【一】豔質　美しきうまれつき。【二】最長夜　冬至は一年中最も夜の長き日なり。

【題義】冬至の夜湘靈（女子の名）を懷うた詩である。

【詩意】彼女の美しき姿は見るに由なく、寒夜に衾を同うすることも出來ない。今夜は一年中の最も長き夜であるのに、俱に獨寢るのは堪へられぬほど淋しい。

遊(一)仙遊山

仙遊山に遊ぶ

闇將心地出人間。　闇に心地を將つて人間を出で、
五六年來人怪閑。　五六年來人閑なるを怪む。
自嫌戀著未全盡。　自ら嫌ふ戀著の未だ全く盡きざるを、
猶愛雲泉多在山。　猶雲泉を愛して多く山に在り。

【字解】【一】仙遊山　盩厔縣に在る山。寺あり仙遊寺といふ。【二】心地　心なり。人間は俗世間。【三】戀著　愛慕すること。

【題義】仙遊山に遊んで感慨を述べた詩である。

【詩意】暗に我が心を持して世外に超然としてゐるので、五六年來人皆我が心の閑なるを怪むほどである。併し山寺を愛慕する念が未だ全く盡きず、雲泉を賞せんが爲に屢〻此山に遊びに來る。

見尹公亮新詩偶贈絶句

尹公亮が新詩を見、偶〻絶句を贈る

袖裏新詩十首餘。　袖裏の新詩十首餘、
吟看句句是瓊琚。　吟じ看れば句句是れ瓊琚。
如何持此將干謁。　如何ぞ此を持して將て干謁するも、
不及公卿一字書。　公卿一字の書に及ばざる。

【題義】尹公亮の作つた詩を見、感ずる所を述べて此絶句を贈つたといふ意。

【詩意】君が袖裏に收めて來た十餘首の詩を見れば、いづれも金玉にも比すべき佳作である。かかる立派な詩を呈して擢用を求めても、公卿の一字の書に及ばずして、誰も擢用してくれる者がないのは氣の毒なことだ。

【字解】【一】瓊琚　美玉なり。
【二】干謁　擢用を求めること。

長安閑居

長安の閑居

風竹煙松晝掩關。

風竹煙松晝關を掩ふ、

【字解】【一】關　門たり。

意中長似在深山。　意中長く深山に在るに似たり。
無人不怪長安住。　人の長安に住するを怪まざるはなし、
何獨朝朝暮暮閑。　何ぞ獨朝朝暮暮閑なると。

【題義】長安の閑居の狀を述べた詩である。

【詩意】風にそよぐ竹、煙の罩むる松を見ながら、晝も門を閉ぢて閑居してゐると、心はまるで奥山にでも隱居してゐるやうだ。されば誰でも「どうして君は長安の都に住みながら、朝となく晩となく閑靜にしてゐられるのか」と怪まぬ人はない。

早春獨遊曲江

時爲校書郎。

早春獨り曲江に遊ぶ　時に校書郎たり

散職無羈束。羸驂少送迎。　散職羈束無く、羸驂送迎少し。
朝從直城出。春傍曲江行。　朝に直城より出で、春曲江に傍うて行く。
風起池東暖。雲開山北晴。　風起つて池東暖かに、雲開いて山北晴る。
氷銷泉脈動。雪盡草芽生。　氷銷して泉脈動き、雪盡きて草芽生ず。
露杏紅初拆。煙楊綠未成。　露杏紅初めて拆き、煙楊綠未だ成らず。

影遲新度鴈。聲澁欲レ啼鶯。
閑地心俱靜。韶光眼共明。
酒狂憐二性逸一。藥效喜二身輕一。
慵慢疎二人事一。幽棲逐二野情一。
廻看二芸閣一笑。不レ似レ有二浮名一。

【字解】【一】散職　閑職なり。校書郎を指す。【二】羸驂　痩馬。【三】直城　宿直所。【四】韶光　春色。【五】幽棲　しづかなすまひ。【六】芸閣　祕書を藏する處。校書郎の役所。

【題義】早春獨り曲江（長安の遊園地の名）の畔を過ぎて自宅に歸る時の景況を述べた詩である。

【詩意】吾は閑職に居るので身の束縛されることもなく、送迎する人もないので、獨り痩馬に乘つて朝宿直所を出て曲江のあたりを行けば、春風が吹いて暖かく、雲が散つて山が晴れ、氷が解けて泉が流れ、雪が消えて草の芽が生え、露を帶びた杏の花が咲き初め、煙罩めた楊は未だ綠を呈せず。新鴈の影尙ほ遲く、鶯の初音がまだ滑かでない。吾は閑地にゐるので心も亦靜かで、春光と共に目も明かであり、酒に醉うて氣の逸るを憐み、藥の效能が現れて身の健なるを喜び、疎懶の性なので總て世事を拋ち、閑居を構へて野情を全うし、役所の方を顧望しては自ら笑ひ、浮名の身に在るを忘れてゐるものの如くである。

祕書省中憶舊山

厭二從薄宦一校青簡。悔レ別二故山一思二白雲一。
猶喜蘭臺非二傲吏一。歸時應レ免レ動二移文一。

【字解】【一】薄宦　微官なり。青簡は圖書なり。【二】故山　故郷の山。【三】蘭臺　祕書省をいふ。【四】移文　官文書の名。齊の周顒鍾山に隱る。後詔に應じ出でて海鹽縣令となり、此山を過ぎんとす。會稽の孔稚珪、北山移文を作り、山靈の威を借りて、再び此山に至ることを得ざらしめた。

【餘論】唐宋詩醇に、「中二聯、早春の景を刻畫し、細膩清新なり」と評してある。

【題義】祕書省（圖書を掌る官署）にゐて故山を憶うて作つた詩である。

【詩意】微官に繫がれて圖書を校讐する（校書郎たるをいふ）を厭ひ、故山に別れたことを悔いて白雲を思慕してゐる。ただ責めてもの喜びは校書郎は幅のきく傲吏ではないから、歸る時にも移文を天下に公布するやうな騷ぎを免れることだ。

涼夜有レ懷　自レ此後詩、竝未レ應レ舉時作。

清風吹二枕席一。白露濕二衣裳一。

涼夜懷あり　此より後の詩、竝に未だ擧に應ぜざりし時の作

清風枕席を吹き、白露衣裳を濕ほす。

好是相親夜。漏(一)遲天氣涼。好し是れ相親む夜、漏遲くして天氣涼し。

【字解】【一】漏遲　漏は水時計。夜のふけたこと。

【題義】秋の夜に感懷を述べた詩である。

【詩意】清風が枕席を吹き、白露が衣裳を濕ほす。良朋相親む時、夜深けて天氣の涼しきは快き極みである。

送武士曹歸蜀　士曹、卽武中丞兄。

武士曹の蜀に歸るを送る　士曹は、卽ち武中丞の兄なり

花落鳥嚶嚶。南歸稱野情。花落ちて鳥嚶嚶、南歸野情に稱ふ。
月宜秦嶺宿。春好蜀江行。月宜しうして秦嶺に宿し、春好くして蜀江に行く。
鄉路通雲棧(四)。郊扉近錦城。鄉路雲棧に通じ、郊扉錦城に近し。
烏臺陟岡送。人羨別時榮。烏臺岡に陟つて送る、人は羨む別時の榮。

【字解】【一】嚶嚶　鳥の啼く聲。【二】秦嶺　山の名。【三】雲棧　雲のかけはし。蜀は山國なる故棧道を設けて往來を通ず。【四】郊扉　郊外の門扉。錦城は蜀の成都の稱。【五】烏臺　御史臺。ここは御史中丞武元衡を指す。

【題義】御史中丞武元衡（貞元二十年武元衡御史中丞となる）の兄なる武士曹が故鄉の蜀に歸るのを送つた詩である。

【詩意】花落ちて鳥啼く時、南方の故鄉に歸るのは、君の野情に稱つた結構なことだ。秦嶺に宿して明月を賞し、陽春の候に蜀江に向ひ、棧道を渡ればやがて成都に近づくであらう。御史中丞閣下が岡に登つて君の行を送るのだから、その光榮は實に人の羨む所である。

江南送北客。因憑寄徐州兄弟書　時年十五。

江南にて北客を送り、因つて憑んで徐州の兄弟に書を寄す　時に年十五

故園望斷欲何如。故園望斷ちて何如せんと欲する、
楚水吳山萬里餘。楚水吳山萬里餘。
今日因君訪兄弟。今日君に因つて兄弟を訪ひ、
數行鄉淚一封書。數行の鄉淚一封の書。

【字解】【一】徐州　古の九州の一。江蘇・山東・安徽三省に跨る。【二】故園　故鄉。徐州を指して言ふ。

【題義】江南にゐて北歸の客を送り、鄉書を託して徐州に居る兄弟に寄せたといふ詩である。

【詩意】故鄉の空は見れども見えず悲み如何ともすべからず、ただ楚水吳山萬里の道を隔てて遙に相思ふのみである。今日君に逢つて兄弟の樣子を問ひ、又懷鄉の淚を濺ぎつつ一封の書信を君に託する。

賦得古原草送別

古原の草を賦し得たり、送別

離離原上草。一歲一枯榮。
野火燒不盡。春風吹又生。
遠芳侵古道。晴翠接荒城。
又送王孫去。萋萋滿別情。

離離たり原上の草、一歲に一たび枯榮す。
野火燒けども盡きず、春風吹いて又生ず。
遠芳古道を侵し、晴翠荒城に接す。
又王孫を送りて去り、萋萋として別情滿つ。

【字解】【一】離離　草の茂る貌。【二】王孫　貴人の子孫。楚辭招隱士に、王孫遊兮不レ歸、春草生兮萋萋とある。【三】萋萋　草の茂る貌。

【題義】古原の草を賦し、送別の意を述べた詩である。

【詩意】野原の草は年に一たび榮え又一たび枯れる。冬になつて野火に燒かれても其根は盡きず、明春になれば又生え出し、遠く古道を侵して芳香を放ち、或は荒城に接して翠色を逞しうする。適〻王孫の遠行を送り、春草の萋萋たるを見て離別の情に堪へない。

【餘論】復齋漫錄に曰はく「野火燒不レ盡、春風吹又生は、劉長卿の春入燒痕青の句の語簡にして意盡くるに若かず」と。堯山堂外紀に曰はく、「白樂天、初め京師に至り、所業を以て顧著作況に謁す。況、姓名を覩、熟視して曰はく、長安米貴し、居大に易からずと。卷を披くに及び、首篇に曰はく、咸陽原上草、一歲一枯榮、野火燒不レ盡、春風吹又生と、乃ち嗟賞して曰はく、箇語を道ひ得、居亦何ぞ難からん。前言は之に戲るるのみと。因つて爲に延譽し、聲名遂に振ふ」と。

旅次景空寺宿幽上人院

景空寺に旅次し、幽上人の院に宿す

不與人境接。寺門開向山。
暮鐘寒鳥聚。秋雨病僧閑。
月隱雲樹外。螢飛廊宇間。
幸投花界宿。暫得靜心顏。

人境と接せず、寺門開きて山に向ふ。
暮鐘寒鳥聚り、秋雨病僧閑なり。
月は雲樹の外に隱れ、螢は廊宇の間に飛ぶ。
幸に花界に投じて宿し、暫く心顏を靜むるを得たり。

【字解】【一】旅次　たびやどりする。【二】花界　寺なり。

【題義】景空寺に次り、幽上人の僧院に宿つた詩である。

【詩意】此寺は俗界と境を接せず。門は山に向つて開かれてゐる。夕暮の鐘が鳴つて寒鳥が聚り、秋の時雨に對して病僧が閑坐してゐる。月は早くも雲樹の外に隱れ、螢が廊宇の間に飛びかうてゐる。幸に此寺に宿ることが出來て、暫く心も顏も靜かなるを得た。

長安正月十五日

長安の正月十五日

諠諠車騎帝王州。

諠諠たる車騎帝王の州、

【字解】【一】諠諠　かまびすし

羈病無心逐勝遊。
明月春風三五夜。
萬人行樂一人愁。

【題義】長安に於て正月十五日の夜の感想を述べたのである。

【詩意】長安の都には車騎がかまびすしく往來してゐるが、自分は病に繫られて遊びに出る氣にもなれない。今日は正月の十五夜で、多くの人が行樂してゐるが、自分は唯一人愁に鎖されてゐる。

【字解】【一】羈病　病に繫られること。勝遊は景色のよい處に遊ぶこと。
【二】三五夜　十五日の夜。
き貌。帝主州は帝都。

過高將軍墓

原上新墳委一身。
城中舊宅有何人。
妓堂賓閣無歸日。
野草山花又欲春。
門客空將感恩淚。
白楊風裏一霑巾。

【題義】高將軍の墓を過りて作つた詩である。

【詩意】原上の新しい塚に將軍の一身を委ねて、長安の舊宅にはもう居ない。妓堂や賓閣には永久に歸ることはないが、野山の花は春が來れば又咲くこともある。人の身は貴賤尊卑を問はず誠に果敢ないものだ。門下生どもは空しく感恩の淚を流して、白楊に風の蕭蕭たる處に巾を霑してゐる。

【字解】【一】新墳　新しい塚。
【二】白楊　墓上の樹。

宿桐廬館同崔存度醉後作

江海漂漂共旅遊。
一樽相勸散窮愁。
夜深醒後愁還在。
雨滴梧桐山館秋。

【題義】桐廬館に宿り崔存度と俱に酒を酌み、醉後に作つた詩である。

【詩意】君と僕とは共に江海の間を漂遊し、今俱に酒を飲んで愁を遣らうとすれば、夜深け酒醒めて後愁が更に募つて來る。折しも雨が山館の梧桐に滴り、ますます旅愁を添へる。

【字解】【一】桐廬館　浙江省桐廬縣に在る。
【二】漂漂　ただよひあるく。

江樓望歸　時避難在越中。

江樓に歸を望む　時に難を避けて越中に在り

滿眼雲水色。月明樓上人。
旅愁春入越。鄉夢夜歸秦。
道路通荒服。田園隔虜塵。
悠悠蒼海畔。十載避黃巾。

【字解】【一】鄉夢　故郷の夢。【二】荒服　王畿を離るること二千里より二千五百里の地。かたゐなか。【三】虜塵　えびすの塵。淮徐の地方に起つた李希烈等の亂をいふ。【四】悠悠　遙なる貌。滄海は大海。【五】十載　十年。黃巾は後漢の末の亂黨。李希烈等の叛賊に喩ふ。

【題義】亂を越中（浙江省の地方）に避けてゐた時、江樓に登りて故郷に歸らんことを望んで作つた詩である。

【詩意】見渡す限り茫茫たる雲と水とに對し、月明の夜に樓上に居れば、旅愁がひしひしと迫つて來て、身は越地に在るも夢は北方の故郷に飛び、旅の道は南方荒遠の境に通ずれども、故園は兵塵に隔てられて歸るを得ず。遙なる滄海の畔に流浪して、十年の間叛賊を避けてゐる。早く戰亂が鎭まつて故郷に歸りたいものだ。

除夜寄弟妹

除夜弟妹に寄す

感時思弟妹。不寢百憂生。
萬里經年別。孤燈此夜情。
病容非舊日。歸思逼新正。
早晚重歡會。羈離各長成。

【字解】【一】除夜　大晦日の晩。【二】新正　新年、正月。【三】早晚　いつか、早く。【四】羈離　羈旅して離れてゐること。長成は人となること。

【題義】大晦日の晩に故郷に居る弟妹に寄せた詩である。

【詩意】時の亂離に感じ（淮徐地方の戰亂をいふ）弟妹の事を思へば、寢ても眠られずに其れから其れと憂が湧いて來る。久しく萬里の他郷に離居してゐるので、孤燈に對して今夜は特に感慨が深い。吾は病の爲に舊日の容姿を留めず、新年に逼り故郷に歸りたくてたまらない。今こそ別れ別れに成長してゐるが、早く重ねて歡會したいものだ。

感芍藥花寄正一上人

芍藥の花に感じ、正一上人に寄す

今日階前紅芍藥。
幾花欲老幾花新。

律詩　除夜寄弟妹　感芍藥花寄正一上人

開時不解比色相。　開く時解せず色相を比するを、
落後始知如幻身。　落ちて後始めて知る幻身の如きを。
空門此去幾多地。　空門此を去つて幾多の地ぞ、
欲把殘花問上人。　殘花を把りて上人に問はんと欲す。

【題義】芍藥の花の盛の短きに感じて正一上人に寄せた詩である。

【詩意】階前の紅芍藥は、今日は老いて散らうとしてゐるのもあり、又新しく開いたのもある。開いてゐる時は他に比する物もない程美しいが、落ちての後は始めて人の身と同じく果敢ないことがわかる。佛門に歸依して一切皆空なるを悟りたいと思ふが、佛門は遙にして入り難いものであらうか。芍藥の殘花を把つて正一上人に聞いて見ようと思ふ。

晚秋閑居

地僻門深少送迎。
披衣閑坐養幽情。
秋庭不掃攜藤杖。
閑蹋梧桐黃葉行。

晚秋閑居

地僻に門深うして送迎少し、
衣を披閑坐して幽情を養ふ。
秋庭掃はず藤杖を攜へ、
閑に梧桐の黃葉を蹋んで行く。

【字解】【一】色相　佛語。肉眼で見られる形。
【二】幻身　幻の如く、はかなき身。
【三】空門　佛敎をいふ。

【字解】【一】披衣　衣を著る。
【二】幽情　靜なる心。

【題義】秋の末の閑居の狀を述べた詩である。

【詩意】吾が閑居の處は人里離れた處で出入に送迎する者もなく、衣をまとひ閑坐して幽情を養つてゐる。掃除もしない庭を藤の杖を攜へて、梧桐の落葉を蹋みつつ散歩する。

秋暮郊居書懷

郊居人事少。晝臥對林巒。
窮巷厭多雨。貧家愁早寒。
葛衣秋未換。書卷病仍看。
若問生涯計。前溪一釣竿。

秋暮郊居書懷

郊居人事少なり、晝臥して林巒に對す。
窮巷多雨を厭ひ、貧家早寒を愁ふ。
葛衣秋未だ換へず、書卷病んで仍看る。
若し生涯の計を問はば、前溪の一釣竿。

【字解】【一】葛衣　葛で織つた著物。夏の著物。

【題義】晚秋郊外に住み、感懷を述べた詩である。

【詩意】郊外に閑居してゐると、世間のうるさい事が少いので、晝も臥して林巒を眺めてゐる。ただ窮巷だから雨の多いのを厭ひ、貧乏だから寒さの早く來るのには困る。今以て夏の著物を換へもせず、病中にも尙ほ讀書をやめない。若し吾が生涯の計を問ふ者があらば、一本の釣竿を垂れて前溪に釣して暮すのだと答へよう。

爲薛台悼亡

薛台の爲に亡を悼む

半死梧桐老病身。　半死の梧桐老病の身、
重泉一念一傷神。　重泉一念一たび神を傷ましむ。
手攜稚子夜歸院。　手に稚子を攜へて夜院に歸れば、
月冷房空不見人。　月冷かに房空しうして人を見ず。

【題義】薛台の爲に其妻の死を悼んだ詩である。

【詩意】薛台は譬へば半枯れた梧桐のやうな老病の身で、黄泉の客となつた妻の事を思ひては心を痛ましめてゐる。幼兒の手を引いて家に歸つても、月冷に室空しくして妻の姿は見えない。

【字解】【一】重泉　黄泉なり。

途中寒食

路傍寒食行人盡。　路傍寒食行人盡く、
獨占春愁在路傍。　獨春愁を占めて路傍に在り。
馬上垂鞭愁不語。　馬上鞭を垂れて愁へて語らず、
風吹百草野田香。　風百草を吹いて野田香し。

【字解】【一】寒食　冬至から百五日目をいふ。此時火を禁ずること三日。行人は道を行く人。

【題義】旅行の途中寒食に遇ひ、その景況を述べた詩である。

【詩意】時恰も寒食なので往來の人も絶え、路傍には春愁を催さしめる氣分が漂つてゐる。馬に乘り鞭を垂れて物も言はずに獨りとぼとぼと行けば、風が八千草を吹いてあたりに香氣を散じてゐる。

題流溝寺古松

流溝寺の古松に題す

煙葉蔥蘢蒼塵尾。　煙葉蔥蘢たり蒼塵の尾、
霜皮剝落紫龍鱗。　霜皮剝落す紫龍の鱗。
欲知松老看塵壁。　松の老いたるを知らんと欲せば塵壁を看よ、
死却題詩幾許人。　死却す詩を題する幾許の人ぞ。

【題義】流溝寺の古松に題した詩である。

【詩意】煙の罩めた松の葉は大鹿の尾の如く、霜深き松の皮は龍の鱗のやうである。この松の古いことを知らうと思はば、塵の積つた寺の壁を見るがよい。嘗て壁に詩を題した人が多く故人になつてゐる。以て此松の古いことがわかるであらう。

【字解】【一】流溝寺　寺の名。前に見ゆ。
【二】蔥蘢　茂る貌。塵尾は大鹿の尾、以て拂子となす。
【三】塵壁　塵の積つた寺の壁。
【四】死却　死ぬこと。

感月悲逝者

月に感じ逝者を悲む

存亡感月一潸然。　存亡月に感じて一に潸然たり、
月色今宵似往年。　月色今宵往年に似たり。
何處曾經同望月。　何の處か曾て經て同じく月を望める、
櫻桃樹下後堂前。　櫻桃樹下後堂の前。

【題義】月に感じて死者を悲んだ詩である。

【詩意】何處で彼と同じく月を賞したかといふに、櫻桃の樹の下の後堂の前で賞したのであつた。今夜の月は丁度あの時と善く似てゐるので、彼の死を悲む涙が潸然として流れる。

【字解】【一】存亡　死亡したこと。存は帶説で意味を持たない。潸然　さめざめと泣く貌。【二】曾經　カツテと訓ずるも可なり。【三】櫻桃　さくらんぼの木。

代隣叟言懷

人生何事心無定。　人生何事ぞ心定まる無き、
宿昔如今意不同。　宿昔如今意同じからず。
宿昔愁身不得老。　宿昔は身の老ゆるを得ざるを愁へ、
如今恨作白頭翁。　如今は白頭翁と作るを恨む。

【題義】隣家の老翁に代つて感懷を述べた詩である。

【字解】【一】宿昔　むかし。若かりし時。如今は今、老いたる時。

【詩意】人はなぜかう心が定まらずにぐらついてゐるのであらう。昔と今では全く考がちがつてゐる。昔は早く大人になりたいものだと、年を取るのがもどかしかつたが、今は白毛老翁になつたことを不足に思つてゐる。

自河南經亂。關內阻飢。兄弟離散各在一處。因望月有感。聊書所懷。寄上浮梁大兄・於潛七兄・烏江十五兄。兼示符離及下邽弟妹

河南亂を經、關內飢に阻みてより、兄弟離散して各〻一處に在り。因つて月を望んで感あり、聊か所懷を書して、浮梁の大兄・於潛の七兄・烏江の十五兄に寄せ上つり、兼ねて符離及び下邽の弟妹に示す

時難年荒世業空。　時難に年荒れて世業空し、
弟兄羈旅各西東。　弟兄羈旅して各〻西東す。
田園寥落干戈後。　田園寥落たり干戈の後、
骨肉流離道路中。　骨肉流離す道路の中。
弔影分爲千里鴈。　影を弔し分れて千里の鴈と爲り、

【字解】【一】河南經亂　淮西の叛亂をいふ。【二】關內　函谷關以內の地。【三】浮梁　江西省饒州府の縣名。大兄は長兄なり。時に浮梁縣主簿たり。【四】於潛　浙江省杭州府の縣名。【五】烏江　水の名。安徽省和縣の東北に在り。【六】符

辭根散作九秋蓬。　根を辭し散じて九秋の蓬と作る。
共看明月應垂淚。　共に明月を看て應に淚を垂るべし、
一夜鄕心五處同。　一夜鄕心五處同じ。

鄕を思ふ心。

【題義】河南には戰亂があり關内には饑饉があつて、一族兄弟各地に離散した。一夜月を觀て感ずる所あり、因つて所感を賦して、浮梁に居る大兄・於潛に居る七兄・烏江に居る十五兄に寄せ、併せて符離と下邽とに居る弟妹に示したといふ意である。

【詩意】戰亂やら饑饉やらで父祖の遺産も使ひ果し、兄弟が各〻旅に出で活計を立てねばならぬことになつた。亂後田園は荒廢し、兄弟は道中に流浪し、分れて千里の鴈となり、散じて秋郊の蓬となつた。共に今夜の明月を看て皆淚を流し、處は五個處に別れてゐるが思は同じく故鄕を慕つてゐるであらう。

寒閨夜

夜半衾裯冷。孤眠懶未能。
籠香銷盡火。巾淚滴成氷。
爲惜影相伴。通宵不滅燈。

寒閨夜

夜半衾裯冷かに、孤眠懶くして未だ能くせず。
籠香銷え盡くる火、巾淚滴づて氷と成る。
影の相伴ふを惜むが爲に、通宵燈を滅さず。

【字解】【一】衾裯　夜具。【二】籠香　ふせどの香。【三】通宵　終夜。

【題義】寒夜獨寢の狀を述べた詩である。

【詩意】夜中に衾の寒さを感じ、獨寢の淋しさに堪へられない。伏籠の香の火も消え盡くし、手巾の淚が滴つて氷となつた。吾が影の消えてなくなることを惜む爲に、終夜燈を滅さずに置いた。

寄湘靈

湘靈に寄す

淚眼凌寒凍不流。　淚眼寒を凌ぎ凍つて流れず、
每經高處卽廻頭。　高處を經る每に卽ち頭を廻す。
遙知別後西樓上。　遙に知る別後西樓の上、
應凭闌干獨自愁。　應に欄干に凭つて獨自ら愁ふべし。

【題義】湘靈に別れ去つて後寄せた詩である。

【詩意】眼に淚が溜り凍つて流れない。それでも高い處へ出る每に、幾度となくふりかへつてお前の方を見た。お前の方でも西樓の上の欄干に凭り、獨り悲みを抱いて此方を望んだことであらう。

冬至宿楊梅館

冬至楊梅館に宿す

【字解】【一】湘靈　女子の名。前に見ゆ。【二】闌干　てすり。おばしま。

離　安徽省の縣名。下邽は陝西省の縣名。【七】世業　先祖から傳はつた財産。【八】羈旅　旅行なり。【九】寥落　さびれ果てる。【一〇】流離　さすらふ。【一一】鄕心　故

十一月中長至夜。　十一月中長至の夜、
三千里外遠行人。　三千里外遠行の人。
若爲獨宿楊梅館。　若爲ぞ獨宿する楊梅館、
冷枕單床一病身。　冷枕單床一病身。

【題義】冬至の晩に楊梅館に宿つたことを述べた詩である。

【詩意】十一月の冬至の晩に、郷を距ること三千里外の客たる吾は、何故あつて獨り楊梅館に宿つたのであらう。枕も冷く床も一つな處へ、一の病身を横たへてゐる。誠に憐れな狀である。

【字解】【一】長至　冬至なり。此日は一年中最も夜の長き日なり。
【二】遠行人　遠く旅する人、樂天自ら謂ふ。
【三】單床　獨寢のとこ。

臨江送夏瞻　瞻年七十餘。

江に臨んで夏瞻を送る　瞻は年七十餘なり

悲君老別我霑巾。　君が老いて別るるを悲みて我は巾を霑す、
七十無家萬里身。　七十にして家無し萬里の身。
愁見舟行風又起。　愁へ見る舟行風又起る、
白頭浪裡白頭人。　白頭浪裡白頭の人。

【題義】江に臨み夏瞻の舟出を送つた詩である。

【字解】【一】白頭浪裡　白い波頭のうち。

【詩意】君が老いて別れ去るを悲んで我は涙を流した。七十にもなつて家もなく、萬里の旅路に漂泊してゐるのは誠に氣の毒なことだ。折惡しく舟出をすると風さへ加はり、白い波の間に白い頭の人を見て愁に堪へない。

冬夜示敏巢　時在東都宅。

冬夜敏巢に示す　時に東都の宅に在り

爐火欲銷燈欲盡。　爐火銷えんと欲し燈盡きんと欲す、
夜長相對百憂生。　夜長うして相對して百憂生ず。
他時諸處重相見。　他時諸處重ねて相見ん、
莫忘今宵燈下情。　忘るる莫れ今宵燈下の情。

【題義】冬夜敏巢と相對して坐し、此詩を作つて示したのである。

【詩意】爐の火も燈も消えさうになつた。夜の深けるまで君と相對して語り、限なき憂が湧いて來る。後日諸處で又相見ることもあるであらうが、今夜燈下に語り合つたことを忘れぬやうにせよ。

【字解】【一】他時　後日。

客中守歲　在柳家莊。

客中歲を守る　柳家莊に在り

律詩　臨江送夏瞻　冬夜示敏巢　客中守歲

守(一)歲樽無酒。思鄕淚滿巾。歲を守りて樽に酒無く、鄕を思ひて淚巾に滿つ。
始知爲客苦。不及在家貧。始めて知る客と爲るの苦しきを、家に在つて貧しきに及ばず。
畏老偏驚節(二)。防愁預惡春。老を畏れて偏に節に驚き、愁を防ぎて預め春を惡む。
故園今夜裏。應念未歸人(四)。故園今夜の裏、應に未歸の人を念ふべし。

【字解】【一】守歲　除夜に爐を圍んで圍坐し、旦に達するまで寢ねざること。【二】節　時節の推移。【三】故園　故鄕。【四】未歸人　まだ鄕里に歸らぬ人。樂天自ら謂ふ。

【題義】旅中に在りて除夜に遇ひ、寢ねずして元旦を迎へしことを述べた詩である。

【詩意】酒も飲まずに夜を明かし、故鄕を思つて淚を流した。旅に出ての苦みは家にゐて貧しいぐらゐの段ではない。年を取るのを畏れては時節の推移に驚き、春愁を厭ひては春の來るのを惡む。今夜故鄕の人人も旅路に在りて歸り來ぬ我を念ひ、遙に案じてゐるであらう。

問淮水

自嗟名利客。擾擾在人間(一)。自ら嗟す名利の客、擾擾として人間に在るを。
何事長(二)淮水。東流亦不閑。何事ぞ長淮の水、東流して亦閑ならざる。

淮水に問ふ

【字解】【一】擾擾　さわがしき貌。人間は世間。【二】長淮　長き淮水。

【題義】淮水の流に問うたといふ詩である。

【詩意】自分は名利の爲に世間に奔走してゐるのを自ら嗟いてゐるが、見れば淮水の流も、晝夜舍めずに東に流れて休む時とてもないのは、一體何事であるか。

宿樟亭驛

夜半樟亭驛。愁人起望鄕。夜半樟亭の驛、愁人起ちて鄕を望む。
月明何所見。潮水白茫茫(二)。月明かにして何の見る所ぞ、潮水白うして茫茫たり。

樟亭驛に宿す

【字解】【一】愁人　心に愁ある人。樂天自ら謂ふ。【二】茫茫　ひろびろとしてゐる貌。

【題義】樟亭驛（驛の名）に宿つた時の詩である。

【詩意】樟亭驛に宿つて、夜中に愁に堪へず、起きて故鄕の方を望んだ。月は明かであるが、故鄕は見えず、ただ潮水の茫茫と際限なく廣いのを見て、益〻悵然たるのみである。

及第後憶舊山

偶獻子虛登上第。偶子虛を獻じて上第に登る、
却吟招隱憶中林。却つて招隱を吟じて中林を憶ふ。

及第の後舊山を憶ふ

【字解】【一】子虛　漢の司馬相如子虛賦を漢の武帝に獻じ、武帝の擢用する所となる。上第は及第なり。